

技術移転受入基盤に関する調査研究

インドネシア・ランポン州における  
人口動態と農業経営に関する考察

昭和59年3月

国際協力事業団  
国際協力総合研修所

総 研
J R
84 — 30



技術移転受入基盤に関する調査研究

地域	ア	ジ	ア	分野	農	林	水	産
	インドネシア		0190		農業一般		301010	

# インドネシア・ランポン州における 人口動態と農業経営に関する考察

執筆者氏名： 杉 井 裕

専門分野： 農 業 普 及

プロジェクト名： インドネシア・ランポン農業開発計画

派遣期間： 昭和51年2月6日～昭和57年11月15日

JICA LIBRARY



1055999[5]

本書は、国際協力総合研修所の調査研究活動の一環として実施している技術移転受入基盤に関する調査研究の成果品であり、開発途上国の国別・分野別の基礎的技術指標、技術吸収能力等に関する調査研究報告である。

国際協力事業団	
受入 月日 '84. 8. 17	108
登録No. 10621	817
	IIC

# 目 次

1. 歴史的背景 .....	1
1-1. ランボンへの移民の歴史 .....	1
1-2. 移民の背景 .....	2
1-3. 社会環境条件 .....	3
2. 集落共同体の特色 .....	4
3. 地域特性 .....	6
3-1. 雨量による地域分類 .....	6
3-2. 気温・海拔 .....	7
3-3. 温度 .....	7
3-4. 土地について .....	8
3-5. 土地の分類 .....	8
3-6. 土壌の種類 .....	9
3-7. 水源 .....	10
4. 地域行政 .....	11
5. 人口増加の要因解明にあたって .....	12
5-1. 州内人口増加と行政区域について .....	12
5-2. ランボン州の人口推移 .....	13
5-2-1. 人口増加推移 .....	13
5-2-2. 行政区について .....	15
5-2-3. 村の数の推移について .....	15
5-3. 農用地に対する人口密度 .....	17
6. 出身地別分類 .....	23
7. Transmigrasi (政府移民) と Spontan (自主移民) における家族帯同数について .....	26

8. 調査村内における流入種別	27
8-1. 流入種別による年齢構成	28
8-2. 離郷の理由	28
8-3. 流入年代別にみた離郷理由	29
8-4. 流入時における職業	32
8-5. 流入年代別にみた職業	32
8-6. 流入年代別にみた携行金額とその割合及び目的	38
8-7. 流入時における住居	43
9. 土地の取得	45
9-1. 購入について	45
9-2. 政府配分について	47
9-3. 第2世代における土地取得について	47
9-4. 土地所有状況(面積別、年齢別)	50
9-5. 土地取得時期について	54
10. 土地売却について	59
10-1. 土地購入からみた売却について	59
10-2. 売却理由について	59
11. 家畜の購入と売却	65
11-1. 家畜の購入について	65
11-2. 売却について	65
12. 結婚について	68
12-1. 男子側からの把握	68
12-1-1. 結婚年齢	68
12-1-2. 結婚後の住居について	68
12-1-3. 村内居住と村外居住について	71
12-1-4. 職業別にみた居住	71
12-2. 女子側からの把握	74
12-2-1. 結婚年齢	74

12-2-2. 結婚後の住居について .....	74
12-2-3. 職業について .....	75
12-2-4. 結婚年令と産児数について .....	75
13. 集落内における教育程度 .....	78
13-1. 年代別教育程度(水準) .....	79
14. 集落内における戸数、家族数、人数の増加について .....	83
15. 1982年10月現在における土地所有状態 .....	86
16. 現状下における住民意識 .....	88
17. 一時帰郷について .....	90
18. 流入原因と地域内人口増加の結語として .....	92
19. 人口増加と経営形態の変化について .....	93
19-1. 人口比較 .....	94
19-2. 耕作面積比較 .....	95
19-3. 借地について .....	96
19-4. 期間と借地料 .....	97
20. 経営形態の変化 .....	98
20-1. 庭園地(Pekarangan)における変化 .....	98
20-2. 庭園地での農業 .....	99
20-3. 家畜飼養の変化 .....	102
20-4. 農業における技術変化 .....	103
20-4-1. 収量変化 .....	103
20-4-2. 投入資材の変化 .....	105
(1) 品種の変化 .....	105
(2) 肥料投入の変化 .....	105

(3) 農薬投入の変化 .....	105
20-4-3. 農具の変化 .....	106
20-4-4. 労働投入と作業内容及び技術の変化 .....	107
(1) 水田地域 .....	107
① 苗代の変化 .....	107
② 本田における変化 .....	108
③ 植付けの変化 .....	108
④ 除草の変化 .....	109
⑤ 病害虫防除の変化 .....	109
⑥ 収穫についての変化 .....	109
⑦ 収穫作業者の変化 .....	110
⑧ 収穫費用の変化 .....	111
⑨ 脱穀方法の変化 .....	112
⑩ 脱穀場所の変化 .....	113
⑪ 粃販売先の変化 .....	113
(2) 畑作地域 .....	114
① 混植形態の変化 .....	115
② 連作々物栽培割合の変化 .....	115
③ 投入資材の変化 .....	116
④ 耕起方法の変化 .....	117
⑤ 耕起所要時間の変化 .....	117
⑥ 植付けの変化 .....	118
⑥-1. 陸稲の植付け変化 .....	118
⑥-2. メイズ植付けの変化 .....	119
⑥-3. キャッサバ植付けの変化 .....	120
⑥-4. 植付け方法の変化についてのまとめ .....	121
⑦ 施肥の変化 .....	121
⑧ 除草の変化 .....	122
⑨ 作物保護の変化 .....	123
⑩ 収穫作業の変化 .....	123
⑩-1. 陸稲収穫の変化 .....	124
⑩-2. メイズ収穫の変化 .....	125
⑩-3. キャッサバ収穫の変化 .....	125



21. 販売についての変化 .....	127
21-1. 販売先について .....	127
21-2. 農産物価格情報について .....	127
21-3. 輸送について .....	128
22. 精米についての変化 .....	130
23. 村段階における農産物価格の変化 .....	131
24. 農業労働所得の変化 .....	133
24-1. 所得の変化 .....	135
24-1-1. 水田地域 .....	135
24-1-2. 畑作地域 .....	137
25. 水田、畑作両地域における期間内変化 .....	140
26. 畑作、水田作両者における開発の相違 .....	142

## 序

世界における農業地域の中で最も農業人口密度が高いインドネシア共和国の Jawa 島は、すでにそれら人口問題解決のために、18世紀末のオランダ治政下より労働移民形態をとりながら政策として移民に着手し、現在に至っている。

通常政策移民には、特に予算的措置を必要とするためにその規模において制約され、また政策移民のみに依存していたのでは Jawa 島の人口問題解決を計るには余りにも小規模で逆に外領より Jawa 島への流入が上廻る恐れさえある。現に政策移民初期より独立後に至る期間内における大部分の移民は、スマトラ島のランボン州にその足跡が見られるが、1970年代後半に至って州政府は、移民の受入れ不可能を宣言したように政策的破綻もあらわれている。

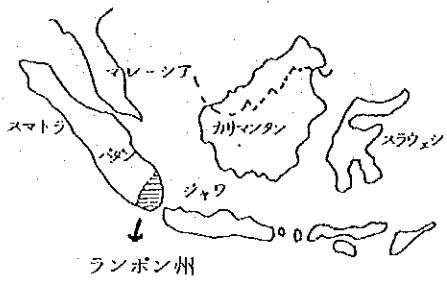
また、政策移民の全移民人口の中に占める割合は、僅かの部分を占めるに過ぎない。それでは、大部分を占めているものは何か？ 即ち自主移民 (spontan) と呼ばれるもので政策的には何らかの保障、保護も受けずに流入して来る人々である。

本書では、自主移民による流入者がどのような理由によって出生地を離れるかまたどのような経過を辿って流入、定着するのか、また定住後における生活形態はどのような変遷を辿るか等に関し、実施調査に基づいて考察を行った。また19章以降においては、定住後の人口増に伴っての農業経営の変化、栽培から流通に至る変化の過程に関し追跡調査を実施するとともに、水田地域と畑作地域における各々の生産性をも併せて考察した。

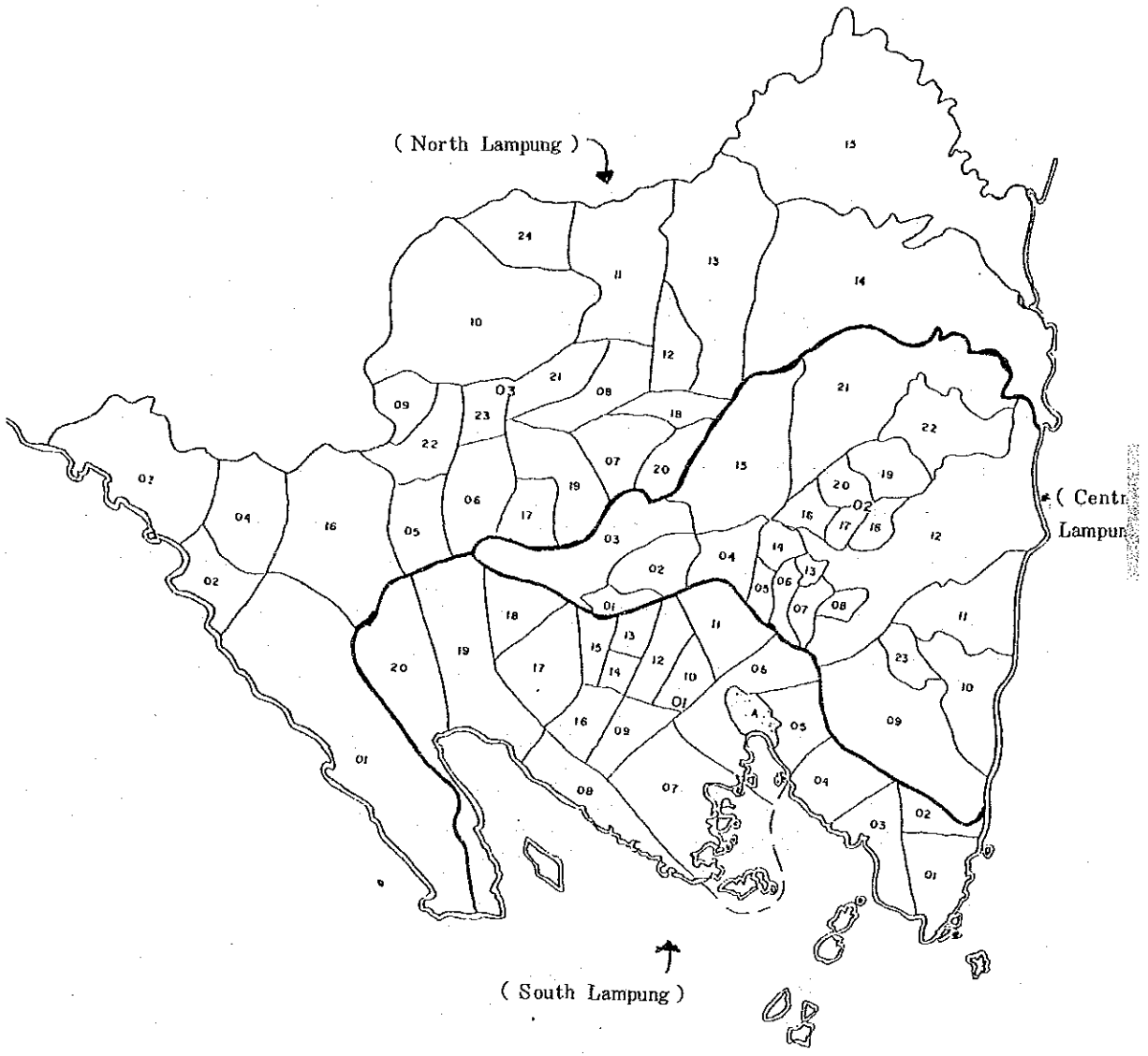
一般的に現在スマトラ島のランボン州は、北 Jawa と呼ばれる程に Jawa 種族の流入増加が顕著であり、これはとりもなおさず州内に、それだけのポテンシャルが存在するのにほかならないといえるのではなからうか。また、土地の外延的開発がほぼ限界に達し、さらに人口増加がみられることから、インドネシア共和国全体からみて今後とも継続されなければならない Jawa 島から外領への人口移動を行う上で、ランボンの農業開発の事例は先導的好例のひとつと言えるだろう。

しかし、インドネシア共和国は、島嶼国で広大な面積を有し、かつ距離的にも遠隔であり、その種族数においても100以上を数えるが故に、行った調査解析が一般的に適用されるという保障はないが、農業が種族本位の形態で行われるとすれば、ランポン州以外他地域で、かつJawa族が流入して行く地域において営まれる人口動態、農業経営形態は、この様な経緯を辿るであろうことは、ほぼ予測できるところである。

杉 井 裕



ランポン州行政区分図



KODE	NAMA PROPINSI, KABUPATEN KODYA DAN KECAMATAN	KODE	NAMA PROPINSI, KABUPATEN KODYA DAN KECAMATAN
18	PROP. LAMPUNG (ランボン州)	180214	KEC. PUNGUR
1801	KAB. LAMPUNG SELATAN	15	KEC. TERBANGGI BESAR
180101	KEC. CUKUH BALAK (南ランボン)	16	KEC. SEPUTIH RAMAN
02	KEC. PADANG CERMIN	17	KEC. RAMAN UTARA
03	KEC. KEDONDONG	18	KEC. PURBOLINGGO
04	KEC. PARDASUKA	19	KEC. RUMBIA
05	KEC. KOTA AGUNG	20	KEC. SEPUTIH BANYAK
06	KEC. WONOSOBO	21	KEC. SEPUTIH MATARAM
07	KEC. TALANG PADANG	22	KEC. SEPUTIH SURABAYA
08	KEC. PULAU PANGGUNG	23	KEC. GUNUNG BALAK
09	KEC. PAGELARAN		-----
10	KEC. PRINGSEWU	1803	KAB. LAMPUNG UTARA (北ランボン)
11	KEC. SUKOHARJO	180301	KEC. PESISIR SELATAN
12	KEC. GADINGREJO	02	KEC. PESISIR TENGAH
13	KEC. GEDONG TATAAN	03	KEC. PESISIR UTARA
14	KEC. NATAR	04	KEC. BALIK BUKIT
15	KEC. KEDATON	05	KEC. SUMBER JAYA
16	KEC. TELUKBETUNG/PANJANG	06	KEC. BUKIT KEMUNING
17	KEC. KALIANDA	07	KEC. KOTABUMI
18	KEC. KETIBUNG	08	KEC. SUNGKAI SELATAN
19	KEC. PENENGAHAN	09	KEC. KASUY
20	KEC. PALAS	10	KEC. BLAMBANGAN UMPU
	-----	11	KEC. PAKUAN RATU
1802	KAB. LAMPUNG TENGAH	12	KEC. TULANG BAWANG UDIK
180201	KEC. KALIREJO (中ランボン)	13	KEC. TULANG BAWANG TENGAH
02	KEC. BANGUNREJO	14	KEC. MENGGALA
03	KEC. PADANG RATU	15	KEC. MESUJI LAMPUNG
04	KEC. GUNUNG SUGIH	16	KEC. BELALAU
05	KEC. TRIMURJO	17	KEC. TANJUNG RAYA
06	KEC. METRO	18	KEC. ABUNG TIMUR
07	KEC. BATANGHARI	19	KEC. ABUNG BARAT
08	KEC. SEKAMPUNG	20	KEC. ABUNG SELATAN
09	KEC. LABUNG	21	KEC. SUNGKAI UTARA
10	KEC. LABUHAN MERINGGAI	22	KEC. BANJIT
11	KEC. WAY JEPARA	23	KEC. BARADATU
12	KEC. SUKADANA	24	KEC. BAHUGA
13	KEC. PEKALONGAN		



## 1. 歴史的背景

### 1-1. ランボンへの移民の歴史

#### 第1段階

公式には、オランダ植民時代の1905年にJawaから155家族Gedong Tataanへの移住が行われ、続いて1905年～1911年にわたって、新規開拓地へ6,500人が移住を了えるとともに、それに伴う官公吏の移住が毎年860人前後の者が移住されたと考えられる。(Zwaal, 1936)

以上の制度においては、転居に要する費用、一年間の食糧費等は、オランダ植民地政府負担によって行われた。

#### 第2段階

次の段階として1912年に開設されたのが、移住費のBank Rakyat Lampungからの貸付制度によって実施され、独立後に返済を行う制度が採られ、1928年まで継続され、この期間中に、16,838人、年間平均1,531人(Amralsiamsu, 1960)が移住したが、資金返済が行われず、1928年に、この制度は閉鎖された。また、1923年～1931年の間JawaからLampung州への移民は僅かに約4,000人で、年平均では440人にしかすぎない。この理由として考えられるのは、Jawa人の移住よりも労働者として働くことに好感をもっていること、とくにこの期間Deliにおける労働に安く従事し移民の低下を招いたと考えられる。

第3段階として、1930年の世界恐慌に伴っての、オランダ植民政府による農園開設に伴っての労働移民が北スマトラを主として行われたのに続いて、Lampung州へは、1933年～1941年にかけて大きく伸び、ことに1940年には、52,885人を教えるに至った。

また、この段階から新移民に対して旧植民定住地におけるTawa adatにおけるbawon制度による植民制度が採用されていることが注目される。

次に独立後における植民政策は、まず、1961年から8年計画で150万人をJawaから外領へ移住さす計画であったが(Heeren, 1967)この期間年平均で53,000人にしかすぎなかった。

また、Jawaにおける自然増加人口は年間、少なくとも120万人であるところから、実質移住人口が前記の移民人口数では、殆んど効果をあらわすに至ってはいない。

また、1961年における外領からの Jawa への流入人口は、40万人と (Mc Nicoll, 1968) と推定されており、Mr. Widjojo Nitisastro も、「毎年20万人の移民を実施しても、Jawa の人口問題解決に対して、際立った解決はなされない」と述べており、政府移民政策は常に家族計画と併行して実施されなければならぬとも言及しているのが実状であった。

## 1-2. 移民の背景

Lampung 州における移民(移住)の流入は、インドネシアの歴史の中でも初期に属し、公式には、1904年オランダ施政下における Kolonisasi に端を発する。その最大の目的が、Lampung 州内における輸出作物(胡椒、ゴム、コーヒ、丁字等の永年作物)栽培労働者として、既に過剰になりつつあった JAWA 島の人口を定住安定労働力としての移住を進めるところにあったことは、明らかであるが、それに伴う定住推進のための農用地の開発も見落してはならない。ちなみに南 Lampung 県における Peringsewu 地域、中部 Lampung 県における Sekampung 河流域の水田開発等は、Lampung 州内における稲作農民定住の基礎の確立を成したことは植民政策の中において評価される可き事業であるといえる。

このことは、現在州内における農業生産基盤の核をなすものであり、農業開発事業として現在も継続されていることをみても開発の端緒となったことは評価に値する。当初の目的と異なった点は、プランテーション労働移民主体から自立経営農家移民へと発展を遂げ定着したことで、それが今日の発展の基礎となったといわなければならない。

しかし、現在農業地域開発あるいは、農業総合開発と呼ばれる「地域の発展をはかる」と称するほとんど総ての開発地域においては、人口の流入、あるいは定着が前提になることは勿論であろう。如何に土地が広大で自然条件に恵まれていようと人口の流入定着なくしては、それら地域の農業開発は不可能であるとともに初期目標の達成をも危ぶまれる状態を引き起すものである。また、一方においては、人口の流入が農業開発計画を上廻る状況を呈して、常時飢餓状態を起しているのも問題であろう。ランポン州はまさに後者の例である。

ここで、よく論議がなされるのが農業開発援助の定義であるが、少なくとも第1段階においては飢餓からの脱出であり、第2段階として自主的自営農民の



育成であり、第3段階として経済的意識農民の育成をもって、目的の達成とみなさなければならない。

第1段階の飢餓状態とは、FAO、テラ氏の論として、1人、1日当りカロリー摂取量1,600 kcal以下の人々であって、現在開発途上国と呼ばれる86ヶ国よりサンプル抽出した推計によると、全体の23%、人口にして、436,000(千)人がこの線上にあるといわれる(1980、サイエンス、日本経済新聞社)。しかし、これら飢餓状態は、自然環境条件下に現出する一時的状態と、社会環境条件が造り出してきた慢性的な飢餓状態とに分類されなければならない。前者の状況下における改善は、農業技術の投入によって可能に導くが、後者においては農業技術よりも社会環境条件の改善が求められることが農業技術投入よりも大きな要因となるところである。

### 1-3. 社会環境条件

この様な見地から農業開発乃至は開発と呼ばれる行為は常に社会環境条件の変革を少なからず伴わなければ、その目的を達成するのは不可能と考えられる。また飢餓状態からの脱出は人道的見地より、絶対であると同時にそれら地域の改善と飢餓状態からの脱出が考えられなければ初期目的の達成はおぼつかない。またここでの「地域改善」とはその地域の農業集約化による改善であるし、また、他の地域から脱出をはかる人々が定着する地域を「開発地域」と定義づけられよう。また、飢餓線上に存在している地域の人々にとって、「生きること」とその社会条件下において「生活すること」とは、次元を異にした考えが存在する。殊に貨幣経済化が遅れている地域、宗教的意識の強固な地域にそれらの意識は強く存在し、個人としてよりも集団の中における一構成員として把える個人としての脱責任論的発想が行なわれるが、構成員自らは、それらの意識は存在しない社会、すなわち家族主義的社会、運命共同体的社会であり、この様な社会においては、とくに共同体指導者(公式、非公式)の人格と力量によって、それら共同体を変革する力を時として発揮するが、それはおのずから同一共同体に属する者に限られる。

## 2. 集落共同体の特色

ここでまず、論ずべきランボン州内集落における共同体の位置づけの範囲は如何に位置づけを行えばよいのか。まずランボン種族における共同体社会と Jawa 種族共同体社会に大別されるが、前者は州内を三共同体社会に分けられ地域的な広範性を有する社会である。即ち① Suku-Menggala。=旧商業港を中心として、② Suku Sisil = 南部ランボン州より南スマトラ州境界に至る沿岸地帯を中心として、③ Suku Abung = 北ランボンを中心とした内陸部より南スマトラ州境ムン河に至る地域、それら各々の特色として①は商業中心であり②は永年作物を主体として胡淑から始められ丁字に至る商品作物、また同時にこれらが焼畑耕作で成立した。③は永年作物、ゴム主体で胡淑、丁字は従で、加えて牧畜が加わるのが特徴であり各種族構成員に私有地的なものは殆んど無く、種族所有地として維持されてきた。

また、大家族制度を採用して財の分散防止に務めたこと、主食は米であるが、副食として主に河魚を採ることに特色があり、部族内に階級性が存在した事に差異がある。

つぎに Suku banteng である。古くは Jawa に居住した種族で主として海洋漁業にたづさわり海岸地帯に分布して居住する。

つぎにあげられるのが Suku Sunda で Jawa 島よりの流入であるが、この種族の業種は二つに大別され内陸部出身者による農耕と沿岸部出身者による生魚商人とである。

Suku Ogan は南スマトラ州よりの流入者で住居形態は殆んどランボン種族に近いが生活形態は永年作物(コーヒ、果物)に依存している。また、Suku Lampung ①②③、Suku Ogan の伝統的集落の殆んどは河辺にその住居が設けられているのも特色である。

その他の部族として Suku Batak, Suku Minan kabau 等があるがまだ少数の域を出ないし、その大部分は農耕に直接従事していない。

最後に最も大きな割合を占める農耕種族の Jawa 族である。Jawa 本島におけるその地域性は 1 集落(村=Desa)に限定されていたが(各々集落においての慣習が異なるため)Panca Limo が提唱され(1919年)一集落(村)を中心に周囲四ヶ村を統合する五集落(村)一単位の制度であるが、実質的な統合に至って地域住民すなわち集落構成員に効果をもたらしたと言

うことは未だに明らかでなく、どちらかと言えば行政的性格が強い。

よって集落は集落自らの地域を有し閉鎖的社會を構成していることから、血縁的家族集團社會を構成する農耕種族であると言える。また流入者の殆んどは、日常 Jawa 語 (Bahasa Pasaran) と呼ばれるものを使用し、庶民に属する人々である。彼等は慣習に固執し、集落内に居住する限り生活が當んでゆける安定性をもっている。

すなわち、集落、村 (Desa) は強固な共同体的機構を意味する。

また、主食も一般的に米とされるが地域によって異なる。例えば中部 Jawa 内陸部の多くはキャッサバであり、東部 Jawa においてはメイズに変わる。

割合で述べると従来からの米主食率は Jawa よりも Sunda の方が高いと考えられる。これら主食としての種類が分れることは、古来からの伝統、習慣からくるものであって、生活指数 (エンゲル係数) を推計する上では何の役にも立たない。近年になって、カロリー計算が行われ自動的に米が主食の位置に据えられたために議論がなされる。が一方において、これらの価格構成から検討すれば、殆んど同一価値線上に位置づけられ、即ち、米価格 4 とすればオイエ (キャッサバ加工品) は 2、キャッサバ 1、との価格対比体系が各々炊飯時の増量割合によって位置づけられほぼ価格比率に応じた炊飯割合となり、慣行的な価格形成においても証明される場所である。

また、付言すれば古米王侯貴族 (Priai) の食した米は大粒種が主で一般小粒種米を指すものではない。

### 3. 地域特性

Lampung 州は南緯  $3^{\circ}45' \sim 6^{\circ}45'$ 、東緯  $105^{\circ}45' \sim 103^{\circ}45'$  の間にあって、総面積は、 $35,376.5 \text{ km}^2$  で雨期（11月～3月）と乾期（4月～10月）の二季節に大きく分けられるが乾期においても完全に乾燥するという事はなく降雨日数、降雨量が減少することである（表1-(1)及び(2)参照）。雨期においても1963年、1973年、1982年と約10年毎に乾期が長期化して作期に変動を起し乾旱被害をもたらして作物の生産量に大きな変動をあたえるのが特徴である。

#### 3-1. 雨量による地域分類

また雨量別に地域分類を行うと次の四種に分けることができる。

表-1-(1) 雨量と地域区分

年間降雨量	月平均降雨量（平均）	地域
① 3,000mm以上	100mm	西海岸地域クルイ周辺
② 2,000～3,000mm	60-100mm	スマンカ湾周辺
③ 2,500～3,000mm	100mm（8月、9月、10月は多雨）	スマンカ湾周辺
④ 2,000mm	少量	グドンタアアン テギネネン タンジュンカラン } 周辺

一般的には、年間を通じて11月～4月が雨期（雨量が多い）、5月～10月が乾期（雨量が少ない）と言えるが、降雨量に地域性があり例えば最低降雨量、最高降雨量も次の様に相違を見る。

表-1-(2) 月別、地域別、最低、最高降雨

最低降雨月	地域
5月	Meuggala Tulung Buyut Bukit Kemuning Telwk Lampung Peringseuu Bekri Kolianda
6月	Kotabuwu 周辺 Kalianda 周辺
8月	Kata Agung Pekalengan 周辺
10月	Blambangan Umpu 周辺

最高降雨月	地 域
11 月	Kasui Kota Agung Pantai Tiwur bagian Selatan
12 月	Kasui Kota Agung Pantai Tiwur bagian Selatan
1 月	Kota Agung Pring Seure Sampai Padang Rutu
2 月	Bukit Kemuning
3 月	Bulcit Barisan Lereng barat dan Timur Tulang buyut Sampai Kasui Blambangan Umpu Pantai Timur Sampai Labuhan Meringgai Lampung Selatan

これよりみて州の西側においては多雨月は10月～4月となり、少雨月は7月である。また、東側においては多雨月は12月～2月～4月で少雨月は8月と云うことが明らかとなる。

雨量図参照の事

### 3-2. 気 温・海 抜

州内陸地30～60mにおける平均気温は26℃～28℃であるが、1979年における最低最高平均は、24.4℃(1月～12月)26.8℃であった。

しかし、高地山間部における気温はこれよりも低いが計測データは現在のところない。

### 3-3. 湿 度

州内に於いての年間平均湿度は80～84%であるが1日の中での最高と最低は次の通りである。

AM 07:00 90～95%

PM 13:00 64～67%

PM 18:00 70～81%

湿度も温度と同じく海拔によって異なり、高地に行くほどこの値は高くなる事が推測される。

### 3-4. 土地について

土地条件については5つに分類する事が出来る即ち、

1. 傾斜高地から山間部

傾斜地 15%以上の勾配地域で300m以上

山間部 海拔1,500m以上の地域

2. 起伏 傾斜地

起作地で傾斜8~5%で海拔300~500m=栽培作物=稲、

野菜類、永年作物類

3. 平地

勾配が0~5%で海拔25~75mの地域

4. 湿地

海拔0.5~1.0mの地域

5. 河川地域

① Tulang bawang 流域

面積 10,150 km<sup>2</sup> 河川長 965Km

② Seputih 流域

面積 7,550 km<sup>2</sup> 河川長 965Km

③ Sekampung 流域

面積 5,675 km<sup>2</sup> 河川長 623Km

④ Semangka 流域

面積 1,525 km<sup>2</sup> 河川長 189Km

⑤ Teparu 流域

面積 800 km<sup>2</sup> 河川長 106.5Km

### 3-5. 土地の分類

以上の事から大まかに土地を①②③と分けてその面積を推計すると①とされる面積は、1,796,000ha、②とされるもの696,000ha、③639,740ha合計3,131,000haとされ、その中で①が57%、②が22%計士79%、面積にして2,492,000haが一次産品の生産に使用でき得る土地であると言える。

### 3-6. 土 壤 の 種 類

州内における土壌の種類は8種48分類で次の通りである。

- ① Alluvial ② Regosol ③ Hydromorf ④ Laterit
- ⑤ Andosol ⑥ Podsolik ⑦ Latsol
- ⑧ Podsolik Meyah Kening

#### ① Alluvial 地域

中部Lampung を中心として東側海岸沿いまで、Sekampung 河  
Seputih 河、Tulang bawang と Mesuji 河流域

#### ② Regosol

少々傾斜地則ち、Gedongtataan Kedonlong Sekoharjo  
各部地域、Ponggung 県周辺、(南Lampung) Kalirejo、  
Bangunrejo 郡地域、(中Lampung)

#### ③ Hydromorf

Natar Gadingrejo Pringsewu とその周辺、及び中部ランボン  
南ランボン県境周辺

#### ④ Laterit

Gadingrejo Pringsewu Kedondong Rantau Tijang  
(南Lampung 各郡境界地域)

#### ⑤ Andosol

傾斜地から山間部にかけてにみられる。

北ランボン Sumberjaya Bukit Kemuniug

南ランボン Gisting Rantau Tijang Kedondong Gedong  
Tataan Kalianda Penengahon 周辺

#### ⑥ Podsolik Coklat

傾斜地から山間部にかけて主として北Lampung にみられる。

Sumberjaya Belalau 周辺と Padang ratu

#### ⑦ Latosol

傾斜地から山間部にかけてみられる。

北Lampung においては Bukit Kemuning 郡

中Lampung においては Jepara Sukadana 郡

南Lampung においては Pewkgahau Kalianda

Ketibung Palang Cerwin

Negri Kota Agung 各周辺

⑧ Podsolik Merah Kening

山間部に主としてみられるが南 Lampung が主である。

南 Lamp Ketibung Panjang Padang Cermin Pring Sewu

中 Lamp Bangunrejo Kalirejo Padong Ratu Sep Mataram

Rumbia

北 Lamp Menggala Blambangan Umpu とその周辺

以上のごとく分類せられる。

3-7. 水 源

州内における水源は大小の河川からなり、その殆んどは西から東に向って流れているが、小河川は南へ流れ、東に向って流れるのは大河川、即ち Mesji 河、Tulang bawang 河、Sekampung 河、Seputih 河、Terusan 河でその水源を Bukit Barisan に発している。また南へ流れる河川は Semangka 河、Ngarib 河、Payung 河、Lima 河、Putih 河、Napal 河等がみられ、これらの河川流の殆んどは農業用水として利用が開始されている。



#### 4. 地域行政 (Adminstrasidaerah)

州内行政は州知事の下に4つの二級行政区に分割せられる。

即ち北、中、南 Lampung と州都 Tanjung Karang、Telak betung 市であり、この下部に三級行政区として71郡があり、その下に1,496ヶ村が存在して(三級行政区長)おり、村長は一般選挙によって選出せられるが、郡長及び(二級行政区長)(Bupati - 県長) 以上は各々上級機関の任命制(各議会の推選を伴う)に等しい。

次に二級行政区についてみると次の通りである。

##### 1. 州都 (Tanjung Karang Telukbetung)

面積 52.62 km<sup>2</sup> 4郡

##### 2. 南 Lampung 県

面積 6,765.98 km<sup>2</sup> 20郡

##### 3. 中 Lampung 県

面積 9,198.50 km<sup>2</sup> 23郡

##### 4. 北 Lampung 県

面積 1,936.50 km<sup>2</sup> 24郡

以上のことから Lampung 州総面積は 35,376.50 km<sup>2</sup> (含 島 部) と算定される。

つぎに1.の州都 (Kotamadya) には首長として1人の Walikota が、他の南、中、北 Lampung 県には各々1名宛の Bupati が在り、州段階即ち一級行政区にあっては州知事、副知事の元に3部門の官房が存在して各々機関の調整を行う即ち

官房1.においては政府政策及び各人事に対する調整。

官房2.においては主として経済関係及び開発ならびに洲民担当。

官房3.官房1.官房2.が関与していない事務とされている。

この官房機関は2級行政区に於いても行われている。

## 5. 人口増加の要因説明にあたって

### 5-1. 州内人口増加と行政区域について

まず表-2の人口増加は1961年の1,667,511人から1981年の4,768,657人へと年間平均5.8%の伸びであり自然増加2.3%を除いても年平均3.5%の人口が流入している。

ことに1974年～1976年にかけてと、1980年における15.61%増を頂点としていることは言うまでもない。然しこの事は政府移民による増加ではなく、政府移民は表-2のごとくその移民数は部分的にしかすぎない。

また、行政区分によって明らかな様に村の増加割合が人口増加割合には及んでおらずこの事は既成の村の中における人口増加が多かった事を意味している。この事は表-2からも明らかであるし、新規政府移民が行われる場合には新規開村を伴うのが常である。しかし1971年から1981年の11年間に新規339ヶ村の開村をみており平均1ヶ村戸数約400戸として135,600戸の入植が計られ、人口にして732,240人(一戸平均5.4人)が政府移民と推計される。

そこで1981年人口より1971年人口を除き毎年2.3%の自然増加民を除いたものが即ち自主流入、または自主移民と言うことになる。

次に年次別に表でみると次の通りである。

表-2 人口増加分類表

年	A 人口(人) Penduduk	B 出生(人) Kelahiran	C 流入(人) Pendatang
1971	2,775,695	63,841	—
72	2,848,276	65,510	7,071
73	2,949,526	67,839	33,411
74	2,165,337	72,803	143,008
75	3,308,833	76,103	67,393
76	3,646,059	83,859	253,367
77	3,707,324	85,268	⊖ 24,003
78	3,820,481	87,871	25,286
79	4,000,336	92,008	87,847
80	4,624,785	106,370	518,079
81	4,768,657	109,679	341,193
		911,151	1,145,652

表-2から明らかな事は、自然増が州外よりの流入に匹敵する勢いである事と、1972年から1981年迄の10年間に流入した人口は1,145,652人と推計されるとともに1980年においては518,079人と最高値を示していることである。また、州政府においては1980/81年以降の政府移民の受入れ不可能を伝える現状にまで州内人口増加は急激であるが、それに対応しての開発が進行していない。果して流入した人々が州内定着を何の様に行ない、また何の様に生活基盤を育成してゆくか、さらに今後の動向はどう見たらよいかを以下で考察する。

## 5-2. ランボン州の人口推移

人口増加は潜在的な生産力の拡大であると同時に消費需要の増大をもたらす。この様な状況に対しては、生産的投資のみならず、生活環境整備にも行政は財政負担の増大を余儀なくされる。そして財政投資は人口増加の把握を前提とする。したがって人口増加予測が立たない場合においては、環境及び社会条件の整備が立遅れるのはむしろ当然と言わなければならない。とくにランボン州における人口増加は推計することが困難を極める。理由は出生率政府移民ではなく自主流入（移民）が人口増加に占める割合が大きいことに原因するからである。

### 5-2-1 人口増加推移

ランボン州における人口は、1960年に入ってより統計上明らかになっている（それ以前の独立直後から南スマトラ州時代については明らかとなっていない）。表-3によれば1961年の1,667,511人から、1981年10月センサスの4,768,657人へと20年間に2.86倍に増加し、年率5.77%の割合で増加してきた。またこの中での自然増加率は2.23%とされている。

然し、人口の増加が毎年平均して増加してゆくのではなく、1977年のように自然増加率を下廻る（州外への流出と考えられる）ことがあり、また、1976年、1980年のように増加率が1.0%台を上廻り、ことに1980年の15.61%は公式記録上最高である。以上のように人口増加率の変動が激しく、その推計において困難をきたしている。

また、人口増加は、戸数増加に殆んど比例しており、家族内人口増加ではなく、戸数の増加である。（増加率は前年対比）

ランボン州における年次別、郡、村、戸数、人口の変化

表-3 1974年-1980年

No	Tahun	BANYAKNYA					Kenaikan%
		Kecamatan	Desa	Kepala Keluarga		Penduduk	
	年 (2)	郡 (3)	村 (4)	戸数 (5)		人口 (6)	増加率
1.	1974	71	1,426	556,222	027	3,163,000	7.32
2.	1975	71	1,466	586,014	534	3,308,833	4.53
3.	1976	71	1,489	666,368	1371	3,646,059	10.19
4.	1977	71	1,492	677,826	172	3,707,324	1.68
5.	1978	71	1,498	709,334	465	3,820,481	3.05
6.	1979	71	1,501	736,799	380	4,000,336	4.71
7.	1980	71	1,496	871,666	1830	4,624,785	*15.61
8.	1981	71	1,503	891,846	231	4,768,657	3.11

また、地域別（二級行政区、Kodya Kabupaten）の人口増加率は、表-4のごとく、1961年-1971年の10年間においては、中部ランボンの年率6.93%を最高に南ランボンの5.04%、州都の4.08%、北ランボンの3.39%、平均5.29%であったものが、1971年-1981年の10年間には、北ランボンの7.30%、中ランボンの5.96%、南ランボンの5.19%、州都の4.00%、平均5.77%で増加しており、人口移動が1960年代の中ランボン中心から北ランボンに移行していることを示すものである。

ちなみに1980年のkm<sup>2</sup>あたりの人口を比較してみると、① 州都の5,400人、② 南ランボン261人、③ 中ランボン184人、④ 北ランボン46人、平均で131人となっており、州都を最高に北に低い様相を呈しており、北部の開発が進展していない。

一つの指標となるであろう。

ランボン州人口センサス

表-4 1961、1971、1980年における  
郡市、県別、人口と期間内年間増加率

Kab/Kodya 県/都市	Jumlah Penduduk 人口合計			期 間 内 年 間 増 加 率	
	Okt 1961	Sept.1971 (*)	Okt 1980 (*)	1961-1971	1971-1980
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
1. Kodya T.Karang.T.B- etung	133,901	198,986	284,275	408	4.00
2. Kab. Lam. Selatan 南	685,392	1,114,765	1,767,084	504	5.19
3. Kab. Lam. Tengah 中	514,084	998,423	1,690,947	6.93	5.96
4. Kab. Lam. Utara 北	334,134	464,834	882,479	3.39	7.30
(Prop) Lampung	1,667,513	2,777,008	4,624,785	5.29	5.77

Keterangan : \*) Hasil Sensus Penduduk 1980, termasuk tuna Wisma,  
aWak kapal dan rumah tangga terapung.

SUMBER : Biro Pusat Statistik Jakarta.

5-2-2. 行政区について

州はまず、① 州政府(一級行政区 Propinsi) → ② 県庁(二級行政区、Kabupaten) → ③ 郡庁(Kacamatan) → ④ 村(Desa) に各々長たる Gebennur Bupati Camat Kepala Desaが存在して行政を司どる。

こゝでは、その末端行政区としての村(Desa)について考察する。

5-2-3. 村の数の推移について

1960年の1,164ヶ村から1980年の1,503ヶ村へと339ヶ村、(129.13%)増加しているが同期間内の人口増加(285.97%)に比較して少なく、同一村内(地域内)における人口増加、すなわち圧力が加わったことをあきらかにしている。また二級行政区別の一村平均戸数は各々 ① 州都、1,538戸、② 南ランボン、585戸、③ 中ランボン、737戸、④ 北ランボン、361戸で州平均581戸であり(1980年)州都を除いて中ランボンが密である。

また、経済の基盤が農業であるので、人口のみならず農用地面積あたり

の人口密度を問題にしなければならないのは当然であろう。

1980年における州内郡市在住人口は575,559で全体の12,45%、残り、4,048,679人(87.55%)が村落に居住して農業と、それに関連する職業に従事しているからである。(表-5)

また、各郡別人口については附表を参照されたい。

表-5 PENDUDUK LUAS KABUPATEN SEI TAKIPADATAN  
PENDUDUK DIPROPINSI LAMPUNG TAHUN 1980.

No	DAERAH TINGKAT II	PENDUDUK (*)	LUAS (KM2)	KEPADATAN PENDUDUK (3)DIBAGI(4)
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
K O T A				
1.	KAB. LAM. SELATAN	157,489	14,454	1,090
2.	KAB. LAM. TENGAH	87,200	273,29	319
3.	KAB. LAM. UTARA	46,703	9,606	486
4.	KODYA T KARANG T BETUNG	284,167	5,262	5,400
SUB JUMLAH (KOTA)		575,559	566,51	1,016
P S D E S A A N				
1.	KAB. LAM. SELATAN	1,609,294	6,621,34	243
2.	KAB. LAM. TENGAH	1,603,720	8,916,21	180
3.	KAB. LAM. UTARA	835,665	19,271,44	43
4.	KODYAT. KARANG T BETUNG	-	-	-
SUB JUMLAH (PEDESAAN)		4,048,679	34,813,69	116
K O T A , P E D E S A A N				
1.	KAB. LAM. SELATAN	1,766,783	6,765,88	261
2.	KAB. LAM. TENGAH	1,690,920	9,189,50	184
3.	KAB. LAM. UTARA	882,368	19,368,50	46
4.	KODYA T KARANG T BETUNG	284,167	5,262	5,150
J U M L A H		4,624,238	35,376,50	131

RETLRANGAN : \*) Hasil Sensus Penduduk 1980, tidak termasuk tuna  
Wisma, awak kapal dan lulahtangga terapan

S U M A E R Kantor Statistik Propinsi Lampung.

表-6 ランボン州における農業用地開発、既開発面積

	開発可能地 (ha)	既開発地 (ha)	既開発割合 (%)	備考
水田	411,345	138,201	33.68	
畑地	1,568,200	629,492	40.14	
計	1,979,545	767,693	38.78	

出所：Diperta TKI Lampung 1982

### 5-3. 農用地に対する人口密度

農用地とはランボン州総面積に占める農業用地（表6参照）の中で既に開発され、農業が営める面積である。

1978年における住民1人当りの面積を図示したのが図-1で、南ランボンにおける1人当り面積は平均0.11ha、中ランボン、0.18ha北ランボン0.21haと南から北にゆくに従って1人当り農用地面積が拡大される。

換言すれば村段階における人口密度が粗である。このことを表示したのが次図-2で1ha当りの人口密度をあらわすものである。

都市部の30~32人/haを除いても、南、中ランボンにおける1ha当り10人以上の水田地帯と6~8人の間にある畑作地帯に比べて、北ランボンは多い地域で4~6人/haで、未だその大半は農業用地でありながら2~4人/haの間で農業人口の増加が遅れており、早くから開発された南、そして中ランボンに比べての農業人口圧の低いことが考察できる。

また図-3は、郡別平均家族数、1人当り農用地面積と農耕地1km<sup>2</sup>あたりの農民数（含家族）である。

表中家族数の突出している郡は原住ランボン種族の在住率が高いことを示すものである。（大家族的）。また州内71郡（1981、12）であるが郡Tanjung Karang市が除かれて68郡となっているが、No5のTb/Panjangも州都に連なる都市域で農用地調査からは除外すべきであったと考えている。

図-3によっても原住ランボン人が主体となる郡は僅かに3郡を占めるにすぎず、都市部を含めると71郡の中、既に68郡は流入による住民に主体が移ったことがうかがわれる。（種族別統計データは存在しない）。

また、1人当り農用地の州平均地点（郡）は、中ランボンのNo34 Punggur No36 Terbangi Besar/Bandar Jayaで、この地点（郡）を境として南に密、北に粗であることが示されている。

図一1 ランポン州内各県別、郡別、1人当り農耕地面積

DAFTAR PEMILIKAN TANAH PERTANIAN PER-ORANG  
DI PROPINSI DAERAH TINGKAT I LAMPUNG.

LAMPUNG SELATAN:

1. Kec. Cukuh Balak
2. Kec. Monosobo.
3. Kec. Kota Agung
4. Kec. Talangpadang
5. Kec. Pulaupanggung
6. Kec. Pegelaran.
7. Kec. Sukoharjo
8. Kec. Pringsewu.
9. Kec. Gading Rejo
10. Kec. Pardasuka
11. Kec. Kedondong.
12. Kec. Gedong Tataan.
13. Kec. Natar
14. Kec. Kedaton
15. Kec. Padang Cermin
16. Kec. T.Betung/Paujang
17. Kec. Ketibung
18. Kec. Kalianda
19. Kec. Penengahan
20. Kec. Palas.

LAMPUNG TENGAH:

1. Kec. Metro
2. Kec. Trimurjo
3. Kec. Batanghari
4. Kec. Sekampung
5. Kec. Pekalongan
6. Kec. Sukadana
7. Kec. Way Jepara
8. Kec. Labuhan Meringgai
9. Kec. Jabung
10. Kec. Purbolinggo
11. Kec. Raman Utara
12. Kec. Seputih Banyak
13. Kec. Seputih Raman
14. Kec. Punggur
15. Kec. Gunung Sugih.
16. Kec. Terb.Desar/Bandarjaya
17. Kec. Padang Ratu
18. Kec. Kalirejo
19. Kec. Rumbia
20. Kec. Seputih Mataram.
21. Kec. Bangun Rejo
22. Kec. Sukaraja Nuban
23. Kec. Seputih Surabaya
24. Kec. Gunung Balak.

LAMPUNG UTARA:

1. Kec. Kotabumi
2. Kec. Abung Barat
3. Kec. Abung Timur
4. Kec. Abung Selatan
5. Kec. Sungkai Utara
6. Kec. Sungkai Selatan.
7. Kec. Tulangbawang Udik
8. Kec. Tulangbawang Tengah
9. Kec. Menggala
10. Kec. Pakuan Ratu
11. Kec. Mesuji
12. Kec. Pahuga.
13. Kec. Blambangan Umpu
14. Kec. Baradatu
15. Kec. Kasuy
16. Kec. Bukit Kemuning
17. Kec. Tanjung Raja
18. Kec. Sumber Jaya
19. Kec. Belalau
20. Kec. Balik Bukit
22. Kec. Pesisir Tengah
23. Kec. Pesisir Utara
24. Kec. Pesisir Selatan.

Data2 dari Kadiperta Daerah Tingkat II Se Propinsi Lampung

Tahun 1978

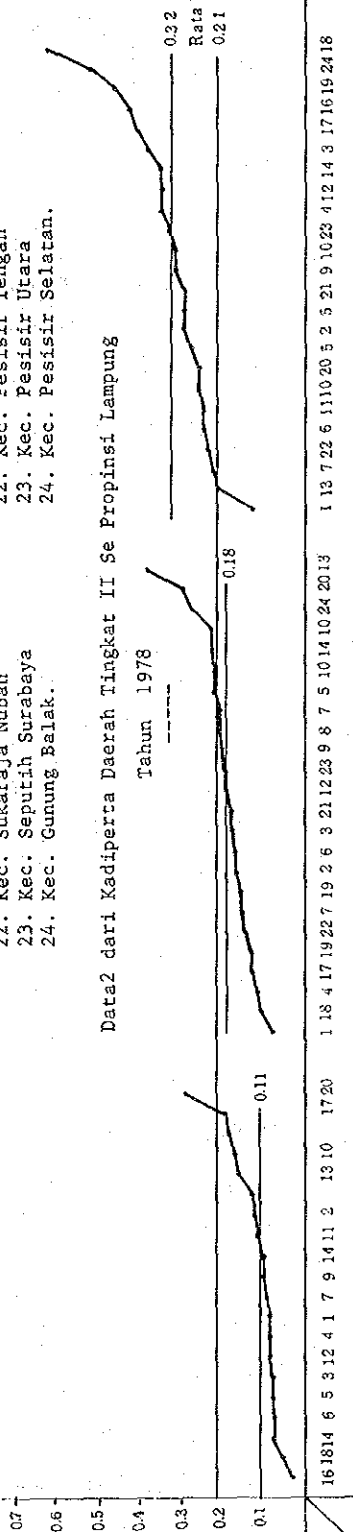
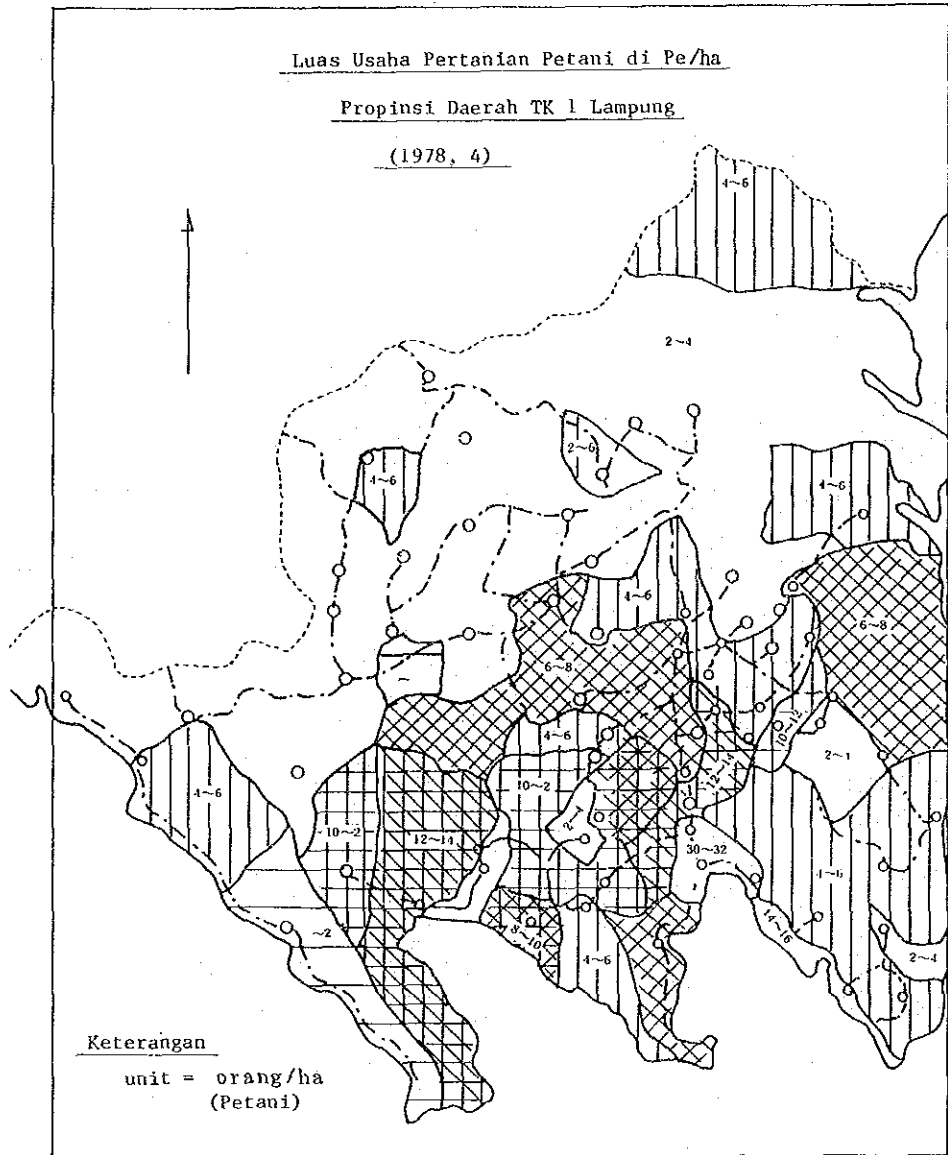




図-2 農耕地面積と人口割合



\* 図の中の数字は農耕地 1 ha 当りの人口を示す。



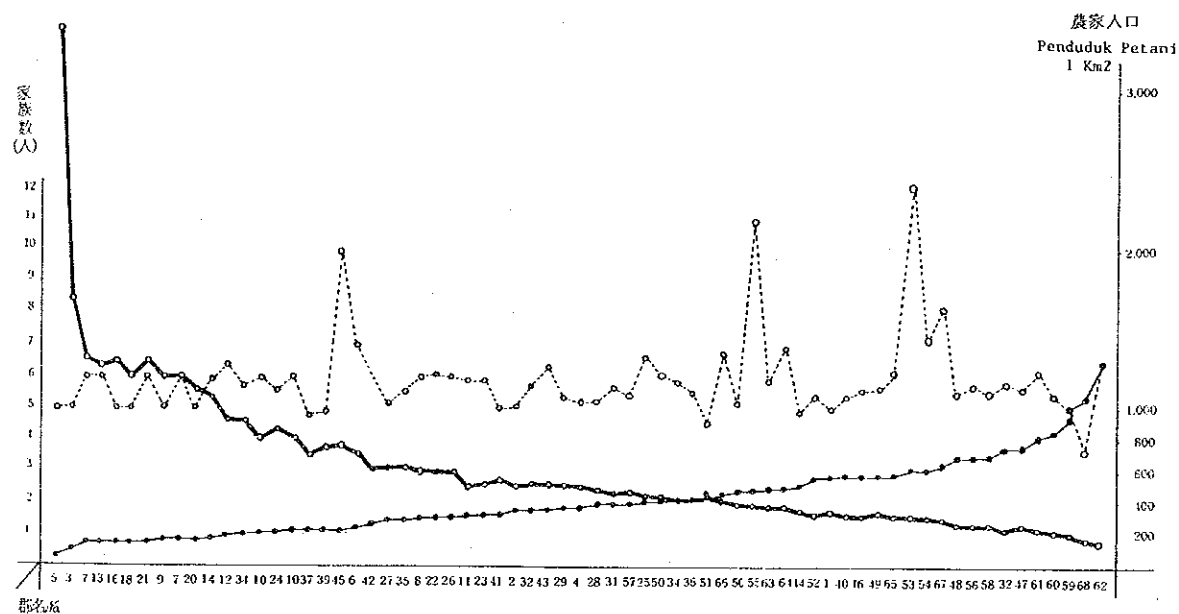


図-3 各郡別農耕地面積と平均家族数

DAFTAR LUAS TANAH PERTANIAN/JUMLAH RATA2 KELUARGA PETANI  
SETIAP KECAMATAN DALAM PROPINSI DATI I LAMPUNG TH. 1978

----- Rata2 satu K.K. / orang (平均家族数) ○ Lampung Selatan  
 ——— Satu orang/luas Pertanian.(1人当り耕地面積) ● Lampung Tengah  
 ===== Penduduk Petani per 1 Km2 luas usaha. ● Lampung Utara.  
 (農耕地1Km<sup>2</sup>当り農家人口)

1. (x 1.0 = keluarga/orang) (家族数)
2. (x 0.1 = Luas / Ha). (農耕地/ha)



No	郡名	No	郡名
1.	Kec. Palas	35.	Kec. Gunung Sugih
2.	Kec. Penengahan	36.	Kec. Terb.Besar/Bandar Jaya
3.	Kec. Kalianda	37.	Kec. Padang Ratu
4.	Kec. Ketibung	38.	Kec. Kalirejo
5.	Kec. Tb/Panjang	39.	Kec. Rumbia
6.	Kec. Padangcermin	40.	Kec. Sept. Mataram.
7.	Kec. Kedaton	41.	Kec. Bangunrejo
8.	Kec. Natar	42.	Kec. Sukaraja Nuban
9.	Kec. Gedong Tataan	43.	Kec. Sept. Surabaya
10.	Kec. Kedondong.	44.	Kec. Gunung Balak.
11.	Kec. Pardasuka	45.	Kec. Kotabumi
12.	Kec. Gadingrejo	46.	Kec. Abung Barat.
13.	Kec. Pringsewu	47.	Kec. Abung Timur
14.	Kec. Sukoharjo	48.	Kec. Abung Selatan
15.	Kec. Pagelaran	49.	Kec. Sungkai Utara.
16.	Kec. Pl.Panggung	50.	Kec. Sungkai Selatan
17.	Kec. Talang Padang	51.	Kec. Tulangbawang Udik
18.	Kec. Kota Agung	52.	Kec. Tulangbawang Tengah
19.	Kec. Wonosobo.	53.	Kec. Menggala.
20.	Kec. Cukubalak	54.	Kec. Pakuan Ratu
21.	Kec. Metro.	55.	Kec. Mesuji
22.	Kec. Trimurjo.	56.	Kec. Bahuga
23.	Kec. Batanghari.	57.	Kec. Blambangan Umpu
24.	Kec. Sekampung	58.	Kec. Baradatu
25.	Kec. Pekalongan	59.	Kec. Kasuy
26.	Kec. Sukadana	60.	Kec. Banjit
27.	Kec. Way Jepara	61.	Kec. Bukit Kemuning
28.	Kec. Lab. Meringgai	62.	Kec. Tanjung Raja
29.	Kec. Jabung	63.	Kec. Sumber Jaya
30.	Kec. Purbolinggo	64.	Kec. Belalau
31.	Kec. Raman Utara	65.	Kec. Balikbukit
32.	Kec. Sept. Banyak.	66.	Kec. Pesisir Tengah.
33.	Kec. Sept. Raman	67.	Kec. Pesisir Utara
34.	Kec. Punggur.	68.	Kec. Pesisir Selatan.

Data2 dari Kadiperta Daerah Tingkat II Se Propinsi Lampung  
Tahun 1978



## 6. 出身地別分類

調査地域内該当者の出身地別（二級行政区別、Kabupaten Kodya等）では、86に分類されるが、この中からランポン州内出身者と現地出生者、出身地不明及びシンガポール、オーストラリア帰住者、寄留者を除いた、Tawa Bali 二級行政区数112区（Tawa 東部38、中部35、ジョクジャカルタ 5、西部 26、Bali 8、1982年現在。除くD.K.I.）の中で78二級行政区からの出身者で構成されていた。

また、調査内におけるそれらの占める割合は全調査該当者2,100名の中の1,721名（81.95%）で、続いてランポン出身者275名（13.10%）現地出生者59名（2.81%）、出身地不明45名（2.14%）である。

この中で最も多い外部からの流入地域はPonorogo、Magetanで続いてKebumen Boyocali以下につづくが、ランポン州内出身者にあつては中部ランポンの243名が調査域内においても最も多かった。（二次流入者を含む）

表-6に示すように、調査域内Lampung Tengah（中部ランポン）各集落における出身地は1集落約30～40二級行政区（Kabupaten）よりの出身者によって占められていることが判る。然し開村後年数を経た集落においては、二世代目によって占められてきており、流入一世代目をみると1940年代開村地域にあつては、Kebumen、Purworejo、Tambang、Kutoarjo、Banyumas、Kutorejo 地域出身者によって116/179すなわち約65%が占められている。（T.R.）

次に1950年代の開村地では、Banyumas、Jogjakarta、Cilacap、Pekalongan、Kebumen、Brebès 出身者によって160/264すなわち約61%が占められており（S.K）、1960年代の開村地域においては、Magetan、Ponorogo、Madiun、Blitar、Malang、Sragen、Banyumas、Banyuwangi、Pacitan 出身者によって364/455すなわち、約80%がそれぞれ占められており年代別流入の地域性がうかがわれる。

1960年代開村地域においては、Ponorogo、Tulung Agung、Banyuwangi、Madiun、Malang、Magetan、Kediri、Boyocali、Trenggalek 出身者によって288/339約85%を占めるが、1960年代後半からの開村地域には、州内よりの流入がみられる。

この集落においては、39戸、全体戸数39/378すなわち約10%で、二次流入者であることから、ランボン州内における二次流入、すなわち州内移民と呼ばれる状態が1960年代中期に至っては後半にかけて始まったことを裏付けるものである。

ASAL DARI

表-7 各村別出身地別人數

NO	Kab 二級行政区名	村別	計										計							
			TR	SK	GA	AL	TT	SB	RU	計	NO	TR		SK	GA	AL	TT	SB	RU	計
1.	Bau Numas		10	46	1	10	2	0	0	69	44	Ngawi	0	1	0	2	0	2	0	5
2.	Kebumen		38	16	2	1	38	0	0	95	45	Banjar Negara	0	1	0	0	0	0	0	1
3.	Purworejo		30	1	3	0	0	0	0	34	46.	Palembang	0	1	0	0	0	0	0	1
4.	Kutoarjo		12	0	0	0	2	0	0	14	47.	Bumi ayn	0	1	0	0	0	0	0	1
5.	Purwokerto		3	8	0	0	0	0	0	11	48.	Pororogo	0	10	0	66	0	119	6	201
6.	Prembon		2	0	0	0	0	0	0	2	49.	Magelang	0	3	0	0	0	0	1	4
7.	Purbolinggo		2	3	0	0	0	2	0	7	50.	Semarang	0	2	1	0	0	3	17	23
8.	Wonosobo		2	0	0	0	0	0	0	2	51.	Bantung	0	1	0	7	0	0	32	40
9.	Kutorarjo		10	0	0	0	0	0	0	10	52.	Malang	0	0	0	18	0	19	1	38
10.	Cilacap		1	30	0	0	0	1	16	48	53.	Magetan	0	0	0	171	0	18	0	189
11.	Wonogiri		1	5	0	9	3	3	10	31	54.	Pacitan	0	0	0	10	4	5	0	19
12.	Blitar		3	1	1	24	3	7	10	49	55.	Jember	0	0	0	4	0	3	2	9
13.	Sleman		4	6	0	5	3	0	2	20	56.	Krawang	0	0	0	1	0	0	0	1
14.	Madiun		2	0	0	42	3	24	0	71	57.	Cianjur	0	0	0	2	0	0	0	2
15.	Jombang		16	0	0	1	1	0	0	18	58.	Purwonegro	0	1	0	0	0	0	0	1
16.	Klaten		1	1	0	1	1	0	26	30	59.	Tulung Agung	0	0	0	1	4	41	16	62
17.	Banyuwangi		3	0	0	1	2	5	5	46	60.	Bondowoso	0	0	0	1	0	0	0	1
18.	Buntul		1	2	6	2	22	0	11	44	61.	Cucukang	0	0	0	1	0	0	0	1
19.	Kediri		3	8	0	2	2	18	3	36	62.	Wonosari	0	0	0	1	4	2	0	7
20.	Surobaya		3	0	0	0	0	0	0	3	63.	KDA, Surakarta	0	0	0	1	0	0	1	2
21.	Yogyakarta		1	35	0	2	0	0	1	39	64.	Cirebon	0	0	0	0	2	0	0	2
22.	Sukoharjo		1	0	0	0	1	0	1	3	65.	Boyocali	0	0	0	0	4	13	75	92
23.	Garut		1	6	0	1	0	0	0	8	66.	Nomia Australia	0	0	0	0	1	0	0	1
24.	Temanggung		4	0	0	0	0	0	0	4	67.	Temanggung	0	0	0	0	1	0	0	1
25.	Pare		1	0	0	0	0	0	0	1	68.	SenKoto	0	0	0	0	1	0	0	1
26.	Jakarta		1	0	0	0	1	0	0	2	69.	O K U	0	0	0	0	1	0	0	1
27.	Wates		3	3	0	1	7	11	0	15	70.	Bengkulu	0	0	0	0	1	0	0	1
28.	Kulonprogo		1	4	5	0	0	1	9	20	71.	Sidoarjo	0	0	0	0	1	1	0	2
29.	Lumajang		1	0	0	8	0	0	0	9	72.	Purwakarta	0	0	0	0	1	0	0	1
30.	Pekalongan		1	23	0	0	2	1	39	65	73.	Pati	0	0	0	0	0	2	0	2
31.	Singapura		1	0	0	0	0	0	0	1	74.	Tegal	0	0	0	0	0	1	0	1
32.	Ciamis		0	6	0	0	0	0	0	6	75.	Bojonegoro	0	0	0	0	0	1	2	3
33.	Serang		0	3	0	0	0	0	0	3	76.	Caruban	0	0	0	0	0	0	1	1
34.	Brebes		0	10	0	0	0	0	39	49	77.	Blora	0	0	0	0	0	1	0	1
35.	Bangka		0	1	0	0	0	0	0	1	78.	Salatigo	0	0	0	0	0	0	4	4
36.	Tasikmalaya		0	5	0	0	1	0	0	6	79.	Kemeyan	0	0	0	0	0	0	28	28
37.	Trenggalek		0	6	0	7	0	1	12	36	80.	Bulcleng	0	0	0	0	0	0	6	6
38.	Banjarnpatoman		0	1	0	0	0	0	0	1	81.	Tabanan	0	0	0	0	0	0	12	12
39.	Pemalang		0	2	0	7	0	0	0	9	82.	Lomp'Utara	0	0	0	0	3	0	0	3
40.	Sragen		0	1	0	12	0	8	8	29	83.	Lamp'Tengah	99	74	1	30	39	0	0	243
41.	Palitan		0	1	0	0	0	0	0	1	84.	Lamp'Sdatan	2	5	0	20	1	1	0	29
42.	Kroya		0	4	0	0	0	0	0	4	85.	Kelalman Setem mpat	0	0	37	0	17	0	3	59
43.	Nganjuk		0	1	0	0	0	0	0	1	86.	A lamat Kosong	16	4	0	21	0	4	0	45
													280	318	56	496	132	378	440	2,100

除 < Lampung 出身者  
Tidak termasuk dari Lampung

※ 調査村名

略字	村名
TR	Trogo Rejo
SK	Sido Kerto
GA	Ganjara Agung
AL	Adi Lwijh
TT	Toto Katon
SB	Suko Binangun
RU	Rama Utama



## 7. Transmigrasi (政府移民) と Spontan (自主移民) における家族帯同数について

Transimigrasi の1家族あたりの帯同人口は、平均4.51人、これに比較して、Spontan 1家族当りでは2.83人と、前者に比べて1.68人少ない。

また、平均家族数(ランボン州)5.40人に比して、前者で0.91人、後者で2.57人帯同家族数が少ない事は、各々の原出身地に一親等乃至は、これに類似した者を残留させてあることを示唆するとともに、農耕民族として、従来からの「出生地を売る。」ことを恥と考えること、もし失敗に帰した時点での「帰るべき拠点の確保」「老年令世代の生地への強い執着」等の理由によって、まず家族内の部分的流出がなされるが、Transimigrasiにあっては、Spontan に比較して、生地への残留数が少ないことから、今後におけるTransimigrasi 政府移民地域への流入数も少ないことが察せられるが、後者においては、流入者の成功に併行して、今後生地残留者の呼寄せ等による流入の増加が予想される。

※ Transimigrasi = 政府移民  
Spontan = 自主流入者(自主移民)

## 8. 調査村内における流入種別

調査農家 2,066 戸の中では、Metro 市を中心として 1930 年代～1940 年代初期において開かれた地域については、Kolanisasi による移住があり全体の 7.07%、146 戸、Transi Migrasion によるものが同じく 15.83%、327 戸、Spontan は全体の 64.71%、1337 戸、また、現地出生者 11.76%、243 戸、その他 Tanpa Tahun として、0.63%、13 戸であった。このことは、Transimigrasi による計画移民人口 95,862 人 (21,228 戸、1971～1980) 実績にして、人口 87,791 人、戸数 20,006 戸に対して、州内人口増加は 71 年 2,775,695 人から 1980 年の 4,624,785 人と率にして、166.62%へと増加しており、換言すると、同期間内において、毎年前年度人口の 6.66%の上昇があったことであり、この内で 2.23%は、自然増加分であり政府移民が人口増加率に占めた割合は、年平均 1.90%で、これら数値からの差、即ち年平均 2.53%が自主流入人口といえる。また、増加分のみで分類を行うと、自然増加が 33.48%、政府移民 28.53%、自主流入 37.99%となり、1971～1980 年間ににおける人口増加は、前年人口 6.66%加えて直線的に上昇を続けたことである。また、調査地域においては、1930 年代、1950 年代、1960 年代と各々開村年代がことなっているために州平均の流入別増加数とは必ずしも一致しない。

次に人口増加と戸数増加は完全と言える程比例しており、1 戸平均構成員 5.40 人を約 0.2 人で上下するに止まる。此の家族構成は、Jawa 人のも一つ一つの特徴としてあげられるものであろう。即ち男子は結婚によって半村民 (Mondoh = Kewajiban Penuh di Desa = 村内における義務の完全履行) として位置づけられるが、完全に独立した場合、すなわち家、屋敷、耕地等の所有によって、その地域社会における権利が認められる。

完全村民 (Warga Desa = Hak dan Kewajiban Penuh = 完全なる権利と義務が生じる。) となることは、Jawa 人の中における大きな目的の一つであることは勿論であり、ランボン州における家族構成員数から考察すれば殆んど結婚後における完全自立家族、流入後における早期自立家族 (Warga Desa) の達成を示唆しているものであるとともに、2～3 世代に入った地域においては、均等相続 (Warisan) による耕地の細分化が進行しつつ

あることは憂慮しなければならない。

### 8-1. 流入種別による年齢構成

先述のとおり流入種別は3種類であるが各々において原住地を離れるという決定権を行使する家長の年代に相違があるか否かを調査したのが第8表である。

1. Kolonisasi の場合においては、15才～45才が全体の89.17%を占めており、その目的としたプランテーション労働力の供給であったことが推察できる。
2. Transimigrasi の場合においては、15才～45才まででみると全体の88.19%と前者に比較してやや低い、年齢を50才まででみると全体の94.79%となり年齢的に前者に比べて下降している。
3. Spontan の場合には、15才～45才までは全体の91.32%と前二者よりも高い。また50才まででみると全体の95.75%と前者より少々上昇しており年齢的にみると45才以前に、その比率が高まっていることを示唆する。

また、前3者で最もピークを描く年代は、1.においては、15才の45.83%、2.の場合においては、20～30才の18.06%、3.の場合においては21～25才の16.46%であった。

表-8 流入種別年齢構成 単位(人)

種別	年齢	15人	15~20	21~25	26~30	31~35	36~40	41~45	46~50	51~55	56~60	61~65	66~70	計
植民政策(本人)	(本人)	55	18	14	13	3	4	3	4	3	2	1		120
	(家族)	184	62	58	49	10	21	9	17	18	12	7		447
自主移民(本人)	(本人)	138	159	186	184	176	124	65	50	20	17	8	3	1,130
	(家族)	52	106	174	281	360	278	187	148	39	48	28	7	1,708
政府移民(本人)	(本人)	40	27	37	52	50	34	14	19	2	6	4	3	288
	(家族)	73	41	118	242	251	176	65	68	8	39	25	9	1,115
合計	(本人)	233	204	237	249	229	162	82	73	25	25	13	6	1,538
	(家族)	309	209	350	572	621	475	261	233	65	99	60	16	3,270

### 8-2. 離郷の理由

離郷をしなければならなかった理由については、流入してきた時期、及び流入種別によって異なるが、全体でみると、その理由として上げられた数は現地出生を除いて23種別がえられたが(1963人)それらの中で占める割合の大きい方からみてゆくと① 原住地における土地不足23.20%、

② 親と同伴 17.40%、③ 独立した生活を営む 16.20%、④ 経済的不満足 6.80%、⑤ 安定した生活を求めて、6.70%、⑥ 意義ある生活を求めて 5.70%、⑦ 親類、縁者よりの呼寄せによって、5.60%、⑧ 植民地政策によって、2.0%、⑨ 土地を求めて、1.80%、⑩ 仕事を求めて、1.40%と以下に続く。また一方において現地出生者が調査地域内において、6.40%を占めていることに注目してゆかなければならない。

(土地の細分化問題について後述)また、以上の大別した理由にもとずくと、一般的には「土地」に関連しての理由で全体の95%以上が占められている。また、土地を目的としていない理由としてあげられるものは、① 役人、0.1%、② 結婚したために定着した、0.9%、③ 出稼ぎ(歴訪)、2.9%、合計で3.9%が直接理由を土地としていない。

また、家族を捜してが、1.1%である。次に親と同行したが既に17.4%、家長に成長を遂げて第2世代目が古い流入地域から進行しつつあることを示唆している。

### 8-3. 流入年代別にみた離郷理由

1930~1970年代に各々の離郷、またはLampung州への流入目的に変化があるか否かをみる。

① 1936年を中心として集落化された中部Lampung県々庁所在地に隣接する現Desa G. Aの集落においては全体の23.53%が土地無し農民であり、また、35.29%が経済的不満を上げ、両者共に当時のJawa農村における土地無し農民あるいは、これに近い農民の経済的困窮が表現されており58.82%が、それからの脱出という目的意識を持っていた事。また、一方Kolonisasi(植民政策)によっては、11.65%であり、すでに1930年代にJawa農村における経済的困窮と、それからの脱出意識が働いていることが明かである。

(Buntul Kulón Progo Prworejo 主出身地)

② 1940~1942年を中心集落化したDesa T. Rは、①同様Metro市に隣接する郡内にあるが、この集落においては、51.35%が意義ある生活を求めて、21.08%がKolonisasi、11.89%が家族を捜して、7.03%が出稼ぎ、8.65%がその他であるが、ここでは①の経済的不満あるいは困窮が②においては意義ある生活を求めて変化していること、Kolo-

nisasiによる割合が①に比較して約2倍に増加されていること、家族を求めて流入したこと、自主的な出稼ぎ目的流入等によって特徴づけられる。

(Kebumen Purworejo Tombang Kutoarjo Banyumas Kutorejo 等が主出身地)

③ 1955年を集落化したDesa T. T.も前二者同様Metyo市に隣接する郡内に存在するがここでは、37.37%が土地を求めて、21.21%が経済的不満によって、15.15%が転居によって、8.08%が土地が良い。

7.07%がKolonisasiであるが、Kolonisasiは1940年代に終末をつけており集落化する以前に住居を定めた人々である。

このDesaにおいては土地に対する目的意識とする割合は66.66%を占め直接土地意識を明確にしている。

(Bantul Wates Kulon Lamptengah 等主出身地)

④ 1952年から1960年代に集団形成がなされた。中部Lampung県Gunung Sugih郡にあるDesa sd. Kにあつては、既に流入は1927年から開始されており1930年末までに全体流入数の11.68%、同じく、1940年代末までに4.12%が、1950年代末まででは全体の50.52%、1960年代末までが18.90%、1970年代末までが14.78%と新しい流入者を迎えながら、40年間に亘って集団化を形成してきたDesaであり前者におけるのと集団化の形成が長期間に亘っていることが特徴であるが、その形成の中心は1950年代になされている。また、離郷目的とされたものは36.43%が独立した生活を、18.90%が親類縁者の呼寄せによって、24.05%が親と同伴して、8.59%がTransimigrasiによって、12.03%がその他とされる。そこでこのDesaの特徴としてあげられるのは、離郷の原目的意識は、36.43%の独立した生活とに集約され、42.95%の流入者は自己としての目的意識ではない。また、集団の形成化に長期間を要したDesaの特徴として捉えられる。

(Banyumas Tagyakarta Cilacap Pekalongan Kebumen Lamp Tengah 等主出身地)

⑤ 1957年から1967年に亘って集落化し、その中でも1957年から1964年の7年間に全体の69.15%が流入した南Lampung県Sukoharjo郡Desa Ad. Lにおける離郷目的は、48.63%が独立した生活を求めて、23.79%が経済的不満、15.37%が親との同伴によって、6.95%が呼び

寄せその他となっている。このDesaにおける流入者は前者に比較して、全体の72.42%が自己目的意識によって離郷を実行するに至ったこと、自己意識が向上されたことが特徴とされる。

(Magetan Ponologo Madiun Malang Bilitar Sragen 等が主出身地)

⑥ 1958年から1963年に亘って集落化した中部Lampung 県 Sep-Raman 郡 Desa R. U では1958年から1963年の5ヶ年間に全体の、79.77%が流内している。このDesaにおける各々の目的意識は54.69%の原住地における土地不足24.71%が安定した生活を求めて、12.36%が親に同伴して、2.75%が呼び寄せ、2.52%が役人として、2.29%が仕事場を求めて、であるが、このDesaにおいても79.40%の流入者が土地を基本に、目的意識をもち、前者に比較してその目的意識がすすんでいるのが特徴である。

(Boyolali Pekalongan Kebumen Brebes Bandung Kemeyan Telung Agung 等主出身地)

⑦ 1960年から1965年を中心に集落化が進んだ中部Lampung 県 Sep-Banyak 郡 Desa S. B の場合の流出目的意識は、まず66.13%の原住地における土地不足、15.20%の親に同伴して、8.53%の安定した生活を求めて、5.07%の仕事場を求めて、2.40%の結婚によって1.87%が呼び寄せ等となっている。このDesaにおける特徴は、前者に比較して原住地における土地不足による流入率がより上昇してきたこと、また、各人の目的意識がより高くなってきている事、仕事場を求めての割合が増加してきた事、また、直接原住地における土地不足を意識しての流入増加は割合にして、前者(1958~1963年)と比較して、11.44%増加している。

ここで流入年代別に集約してみると、第1期Kolonisasi(1930~1940)においては、若年層と、土地無し農民、あるいは、それに近いものが、プランテーション定住労働力として流入してきたのが主体であり、

第2期Spontan(1940~ )自主的流入開始と親類縁者を頼って、家族を捜して等が発生してくる。

第3期Transimigrasi(1950~ )政府介入による移民が開始され貧農の救済援助が主体となる。

第4期Spontan(1960~ )自主的に目的意識を備えた流入者と二世

代目の台頭、以上のごとく1930年代より現在に至るまでを四期に各々目的意識を分類することができる。

#### 8-4. 流入時における職業

全調査戸数2,100戸の内、2,018戸より回答を得た。この内から親に同伴してを除くと（流入時点における職業種は自己意識による選択とはとらえ難い。）1,771戸になり、この① 農業に従事したが、1,423戸で、全体の80.35%、② 農業労働者としてが、133戸で全体の7.51%、③ Tanpa Alasanが93戸で全体の5.25%、④ 密林の開拓に従事したが、40戸で全体の2.26%、⑤ 商業従事が19戸、1.07%、⑥ 日雇い職人として、17戸、0.96%、その他、役人、教師、工場労働者、籐さがし、瓦製造、修理工の順序で並ぶが、まだ数値化するにはいたらない。

ここで注目しなければならないのは、流入時点で農業に従事したのが全体の80.35%存在することで、Transimigrasion の場合には、政府により1戸あたり2.0haの供給が行われるが一般流入者に対しては行われない。

また、前段の流入種別調査の結果から考察すれば全体の17.94%と推計される（現地出生者を除く。また、同じくKolonisasiは801%で、その差土74.05%がSpontanと推計されるが、彼等の離郷目的が原住地における土地不足、あるいは経済的不満が、その理由の大半を占めるところから到着と殆んど同じくして農業に従事する即ち農業を営む土地が取得でき、あるいは購入するだけの資力を持って流入してくるのであろうか。

（農家と農業労働者とは分類されている。）

#### 8-5. 流入年代別にみた職業

1940年代から1960年代にわたって、主に集落化が成されており、各々年代において、職業様相に変化が生じている。表9-(1)~9-(5)は、集落化の進んだ順序に合せたものである。

表 9 - (1) USAHA WAKTU DATANG (流入時の職業)

			(%)
①	1. Tani 農業	= 87 Jiwa *	58.78
	2. Dagang 商業	= 3 Jiwa	2.03
	3. Buruh 労働者	= 14 Jiwa	9.46
	4. Ikut Orang Tua 親懸り	= 6 Jiwa	4.05
	5. Bengkel 修理工	= 1 Jiwa	0.67
	6. Buka Hutan 密林開拓	= 34 Jiwa	22.97
	7. Pegawai 役人	= 2 Jiwa	1.37
	8. Buat genteng 瓦作り	= 1 Jiwa	0.67
	9. Masih ikut orang tua	= (132 Jiwa)	-
	親懸り (148) Jumlah	= 280 Jiwa	100 -
	合計		

\* Jiwa = 人数

表 9 - (2) USAHA WAKTU DATANG

			(%)
②	1. Tani	: 93 KK *	70.45
	2. Bengkel	: 1 KK	0.76
	3. Tukang	: 1 KK	0.76
	4. Buruh	: 4 KK	3.03
	5. Dagang	: 3 KK	2.27
	6. Ikut Orang tua	: 3 KK	2.27
	7. "	: 26 KK (Tak memberi Keterangan)	20.46
	Jumlah	: 132 KK	100 -

\* KK : 戸数

表 9 - (3) USAHA WAKTU DATANG

			(%)
③	1. Tani	: 393 Jiwa	82.74
	2. Dagang	: 7 Jiwa	1.47
	3. Buruh	: 7 Jiwa	1.47
	4. Ikut Orang tua	: 67 Jiwa	14.11
	5. Buka hutan	: 1 Jiwa	0.21
	Jumlah	: 475 Jiwa	100 -



表 9 - (4) USAHA WAKTU DATANG

		(%)
④ 1. Tani	: 394 KK	90.16
2. Buruh	: 29 KK	6.64
3. Dagang	: 3 KK	0.69
4. Mengajar	: 2 KK	0.46
5. Tidak memberikan	: 9 KK	2.05
Keterangan.		100 -

437 KK ( yang 3 KK Kelahiran setempat ).

Buruh terdiri dari : Buruh tani	= 24 KK	82.76
Buruh pabrik	= 1 KK	3.45
Buruh tukang	= 4 KK	13.79
	29 KK	100 -

⑤

表 9 - (5) USAHA WAKTU DATANG

		(%)
1. Tani	: 252 KK	66.67
2. Buruh	: 77 KK	20.37
3. Dagang	: 3 KK	0.79
4. Buat genteng	: 1 KK	0.26
5. Cari Rotan	: 1 KK	0.26
6. Mengajar	: 1 KK	0.26
Keterangan : Buruh terdiri dari :		(%)
Buruh tani	: 66	85.71
Buruh gesek	: 11 (Menggergaji kayu)	14.29
43 Orang tak memberikan keterangan, mungkin ia sebagai		
Buruh upahan.		
	: 43 KK	11.39
Jumlah :	378 KK	100 -

まず項目の中から 1. Tani ( 農業 ) に従事したのから考察してゆくと、1940年～1950年初期にかけての①のDesaは、約60%が従事しており、順次1950年後期より1960年初期の90%まで、期間内10年間は流入して農業に従事することが容易であったことをうかがわせるが、1960年

代に入って新しく開かれた集落においては、再度1940年代に逆戻って、流入人口の67%が農業に従事できる状態である。この理由として、すでに中部Lampung県内における農業用地と人口のアンバランスが生じてきて、地価の上昇を招いている。また、水田における集約栽培の成功に伴う地価の上昇、遺産相続による土地の細分化、等の理由から、現在の一次流入者が容易にそれら耕地を購入することを不可能にしている。また、農業に従事する者に比較して、2. Buruh（労働者）の比率が高まってきている。初期の9.4%から近くは、20.37%へと上昇している。また、Buruhの内容も、Buruh Tani（農業労働者）として確立し⑤のDesaの場合（1960年以降の集落）には、Buruh 77戸の中で85.71%がBuruh Taniであり、14.29%が木挽き労働者であり、殊に注目されるのは、全体の中でBuruh upah（日雇労働者）が、14.29%出現してきたことである。新しい集落に日雇労働者が現れることは、原住地における貧困化が加速されているか、流入者が現地に血縁関係を持たないか、地縁関係において、あまり良くなかったか、何れかの理由によると考えられ、この階層からの農業への昇格は現段階においては、非常にむづかしいと考えねばならない。

3. Buka hutang（密林開拓）に従事したものは、1940年代の集落において、（土）23%をみるが、その後急激に低下して、1960年代以降の集落においては、認められない。このことはLampung県が1950年代までに主とした開拓を終了したと理解すべきである（現在行われている開拓は、主として北Lampung県機械化を伴っている）。

4. Dagang（商人）集落内におけるDagangの割合は全体の0.7～2.0%で、平均すると1.45%である。しかし、集落化が新しい程その割合が低下してきており、商人資本の集約化と、交通機関の発達によって、村落内での商行為から脱却しつつあることを証明するものである。

5. Tukang（職人）1950年代に、Tukangの職種が僅か0.76%であったが、1960年代に至っては、2.94%へと伸びている。

この職種は、主として、家の建築であり、大工、左官および瓦製造業を入れなければならない。村落における家の建築は、流入当初においてはGubuk（小屋）であるが、順次成功に伴って永年家屋への改築をはかる。この段階における職人の需要から、この職種の割合が上昇したのと考えられる。

6. Mengajar (教師) 殆んど各集落において1~2名流入しているが、その殆んどは、イスラム教師で、その教義とアラビア語を教えるとともに道徳観も授けて、その後設立される小学校教師とは意味を異にするし、Jawaからの流入の一つの特色であろう。

こゝで再び2. Buruhの発生について考察を加えたい。一般的に集落に入れば集落人としてみなされ、その内において有機的に生活が営なめるのが集落すなわちDesaである。(Desaについては附記)。また、血縁、地縁関係が良好であれば、村有地の耕作によって、生活が営まれる。

また、図4-1~4-2の様に分益小作が営なまれ1982年現在、水田地域においては、その割合が50%:50%であり、畑作地域にあっては、もし不耕作地であれば、3ヶ年間は、収穫100%取りとなり、その後50%:50%に移行するのが一般的である。が原住地あるいは現住地において、好ましくない行為を行った者には、(Desaの慣習法にてらして、大きい理由として、神への不敬、目上に対しての非礼、その他人為的なものは多数等々)それらの権利は殆んどあたえられていない。

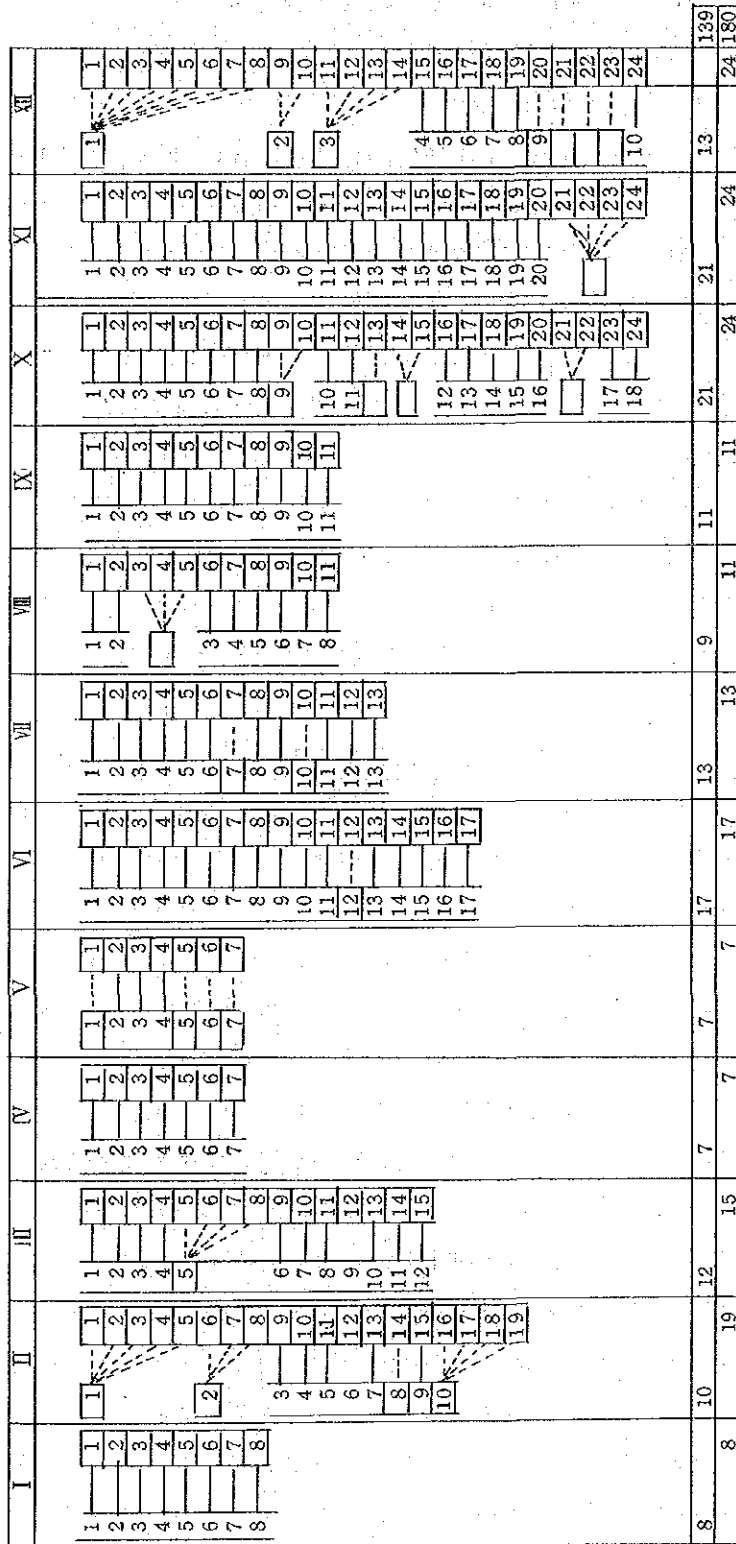
これらの理由から集落におけるBuruh upah(日雇い労働者)の発生が起る一つの大きな理由があると考えられる。また、畑作地域においては、3年間無賃小作、2年間分益小作を行うことによって、小面積でも購入することが可能だったからである。

図4-(2)は、先述の分益小作の例を表示したものであるが、その殆んどが同一地域出身者によって営まれる。これは、調査村の1つであるDesa T. Tの例であるが、図中同一区画内の前の方が土地所有者で後の方が小作者を示している。この図からは、土地所有者139名に対して、耕作者180名があり、寄留小作者が41名に達する。換言すれば、平均して土地所有者3.4人に1.0人の小作者が寄留していることである。

この段階を通過出来るか否かによって、自作農家、永年小作農家、農業労働者、日雇労働者、各々道の分岐点となるが、この流入時における段階的制度化を小作化、あるいは地主化とだけで位置づけることなく、この時点における剰余を生める面積か否かによって、決定されなければならない。

また、こゝに面倒をみななければならない人々(Famili)が出現した時には、様相は異なり血縁関係→親戚関係→地域関係へと優先順位は自から決定されることは当然である。

図 4-1(1) 水田所有者と耕作者の関係図



自作地所有 139人  
 139 org  
 耕作者 180人  
 180 org

自作  
 村内居住地主  
 村外居住地主

## 8-6. 流入年代別にみた携行金額とその割合及び目的

集落化の古い Desa 別に考察してゆくと、

- ① Desa G. A. において、第1世代流入17名の中で最も古いものが、1936年に8名定着し、その中1名の携行金額はRp2-で、1940年代2名、Rp10-(1人平均Rp5-)、目的は食糧の確保であり、土地購入を目的とした者は2名で(1943年1名Rp25-、1960年流入1名Rp50,000-)残り12名については、旅費のみであった。これを割合で見ると、土地購入を目的としての資金を携行した者は全体の11.76%、食糧確保のためが17.65%、残りの70.59%の流入者はただ旅費のみにて流入してきている。
- ② Desa Te. R. の場合には、一次流入者148戸の中で土地購入目的を持って流入した者は1962年にRp50,000-が1名のみで、食糧確保のためが、1940年代にRp60-、Rp35-の各々1名ずつ、また、旅費のみの回答は、1940年Rp7.5-1名、1968、69年Rp3,000-、Rp7,000-の各々1名ずつ、ただ1980年に家建築のため、Rp400,000-が1名存在するが、残りの141戸(95.27%)の流入者は目的を移住地への到着のみにおいていたことが推察される。
- ③ Desa T. T. の場合には、一次流入者111戸の中で土地購入を目的として資金を携行した者は14名で1950年代8名Rp3,550(1人平均Rp443.75)、1960年代、4名、Rp76,000(1人平均Rp19,000)1970年代、2名Rp650,000-(1人平均Rp325,000)、次に農業以外の職種のため(主として仲介業、小手工業主等)が5名で、1950年代Rp150,000 2名、1970年代Rp475,000-3名、つぎが商売元手として、1970年代Rp40,000-1名、つづいて家の購入資金として1950年代Rp2,000- 1名、合計21名(20.59%)が何らかの形で資金を携行してきたことが認められるが残りの81人(79.41%)は到着を目的とした旅費であったことが推察できる。また、割合で見ると、土地購入13.73%、仲介業等として、4.90%、家の購入、0.98%、商売元手0.98%、旅費のみ79.41%である。
- ④ Desa Sd. K. の場合では、第1次流入者226人(除く、親と同伴、現地出生者)の中で、土地購入目的、金携帯者が1950年代が、20名Rp97,023.50(1人当たり平均Rp4,851.18。1960年代が6名、

Rp 170,800 - ( 1人当り平均Rp 28,466.67)、1970年代が11名、Rp 1,141,000 - ( 1人当り平均Rp 103,727.27)、計37名、旅費目的のみとして回答のあった者41名を年代順に1940年代2名Rp 22,500 ( 平均Rp 11,250 ) 1950年代21名Rp 65,090 ( 平均Rp 3,099.52 ) 1960年代16名Rp 78,700 ( 平均Rp 4,918.75 )、1970年代、2名Rp 10,000 ( 平均Rp 5,000 )、で全体の中で土地購入目的金携行者は、16.37%、旅費のみ18.14%で残り148名(65.49%)は、記録するに至らない到着のみを目的とした旅費であったと推察される。

⑤ Desa Ad. L の場合には、一次流入者450名(流入理由の合計から現地出生者を除いた数)の中で土地購入目的金携帯者が年次順に1950年代143名、Rp 324,140 - ( 平均Rp 2,266.71 )、1960年代201名、Rp 1,874,035 - ( 1人平均Rp 9,323.56 )、1970年代24名、Rp 890,550 - ( 1人平均Rp 37,106.25 )、合計368名、つぎに旅費目的についてみると、1940年代3名Rp 6,250 ( 1人平均Rp 3,125 )、1950年代19名、Rp 8,100 - ( 1人平均Rp 426.32 )、1960年代10名、Rp 8,250 ( 1人平均Rp 825 ) 1970年代31名Rp 202,200 ( 1人平均Rp 6,522.58 ) 計63名、また、1979年と1980年に商業を目的として、2名Rp 210,000 - ( 1人平均Rp 105,000 - ) がみられる。二者合計で433名になり残り17名のみが到着のみを目的とした旅費であったと推察される。また、割合でみると全体の土地購入目的金携行81.78%、旅費目的のみ14.00%、商業資金目的0.44%、残り3.78%が到着のみを目的とした旅費であったと推察される。

⑥ Desa R. U の場合、一次流入者437名(現地出生者を除いた数)の中で土地購入目的資金を携行した者を年代順に1940年代1名Rp 50、1950年代26名Rp 383,850 - ( 1人平均Rp 14,763.46 ) 1960年代47名、Rp 2,714,200 - ( 1人平均Rp 57,748.94 )、1970年代23名Rp 4,232,000 - ( 1人平均Rp 184,000 - ) 1980年4名、Rp 3,775,000 - ( 1人平均Rp 943,750 - )、計101名、次に食糧確保のため、1950年代37名Rp 174,455 - ( 1人平均Rp 4,715 - )、1960年代、11名、Rp 95,090 - ( 1人平均Rp 8,644.55 )、1970年代7名、Rp 48,000 - ( 1人平均Rp 6,857.14 ) 計55名。

商業資金として、1958年1名、Rp80,000-、1965年1名、Rp400,000-、1980年1名、Rp350,000-、計3名、家の建築資金として、1979年、1名、Rp300,000-、1980年1名、425,000-計2名、残り269名は到着を目的とした旅費のみが269名になり、これらを割合にすると、土地購入目的資金携行者23.06%、食糧確保目的資金携行者13.93%、商業目的資金0.68%、家建築目的資金0.46%、旅費のみ61.64%、その他0.23%となる。

⑦ Desa S. B の場合では、一次流入者378名の中で土地購入目的資金携行者は年次順に1960年代、35名、Rp2,120,900-(1人平均Rp60,597.14)1970年代15名、Rp1,400,000-(1人平均Rp93,333.33)計50名。つぎに食糧確保目的資金は、1960年代、17名、Rp193,050-(1人平均Rp11,355.88)、1970年代1名、Rp9,000-、1980年代2名、Rp45,000-(1人平均Rp22,500-)計20名。次に家建築資金として、1961年、1名Rp2,000-、1979年1名、Rp70,000-1981年1名、150,000-、計3名。商業目的資本としては、1959年1名、Rp20,000-、1979年1名、Rp100,000計2名であり、これらを割合でみると、土地購入目的資金携行者13.23%食糧確保目的資金携行者5.29%、家建築資金として0.79%、商業資金として0.53%、計19.84%、残り部分80.16%については到着を目的とした旅費のみであったと推察される。

### 年代別、目的別、携行資金の変遷

表10-(1) 土地購入目的けい行資金の変遷

(単位 Rp. けい行者1人あたり)

Desa 年代	G A	T R	T T	Sd. K	Ad. L	R U	S B	平均	備考
1930	-	-	-	-	-	-	-	-	
40	25	-	-	-	-	50	-	37. <sup>50</sup>	
50	-	-	443. <sup>75</sup>	4,851	2,267	14,763	-	5,581. <sup>19</sup>	
60	50,000	50,000	19,000	28,447	9,323	57,749	60,597	39,302. <sup>29</sup>	
70	-	-	325,000	103,727	37,106	184,000	93,333	148,633. <sup>20</sup>	
80	-	-	-	-	-	(943,750)	-	(943,750)	

表 10 - (2) 食糧確保目的けい行資金の変遷

Desa 年代	G.A	T.R	T.T	Sd.K	Ad.L	R.U	S.B	平均	備 考
1930	2	—	—	—	—	—	—	2.00	16,250
40	5	47. <sup>50</sup>	—	—	—	—	—	26. <sup>25</sup>	
50	—	—	—	—	—	4,715	—	4,715	
60	—	—	—	—	—	8,645	11,356	10,000. <sup>50</sup>	
70	—	—	—	—	—	6,857	9,000	7,928. <sup>50</sup>	
80	—	—	—	—	—	—	22,500	22,500	

表 10 - (3) 旅 費 の 変 遷

Desa 年代	G.A	T.R	T.T	Sd.K	Ad.L	R.U	S.B	平均	備 考
1930	—	—	—	—	—	—	—	—	
40	—	7.50	—	11. <sup>50</sup>	3.13	—	—	7. <sup>38</sup>	
50	—	—	—	3,100	426	—	—	1,763	
60	—	5,000	—	—	825	—	—	2,912. <sup>50</sup>	
70	—	—	—	—	6,523	—	—	6,523	
80	—	—	—	4,919	—	—	—	4,919	

表 10 - (4) 家建築目的資金の変遷

Desa	G.A	T.R	T.T	Sd.K	Ad.L	R,U	S.B	平均	備 考
1930	—	—	—	—	—	—	—	—	
40	—	—	—	—	—	—	—	—	
50	—	—	2,000	—	—	—	—	2,000	
60	—	—	—	—	—	—	2,000	2,000	
70	—	—	—	—	—	300,000	70,000	185,000	
80	—	400,000	—	—	—	425,000	150,000	325,000	



表 10 - (5) 村別・目的別・資金携行割合

(%)

Desa	G. A	T. R	T. T	SdK	Ad.L	R. U	S. B	平均	備考
土地購入	11.76	0.68	13.73	16.37	81.78	23.06	13.23	22.94	Ad.Lを除くと13.14%
食糧確保	17.65	1.35	—	—	—	13.93	5.29	5.46	
商業	—	—	0.98	—	0.44	0.68	0.53	0.38	
小工業	—	—	4.90	—	—	—	—	0.70	
旅費	—	2.03	—	18.14	14.00	—	—	4.88	
家建築	—	0.68	0.98	—	—	0.46	0.79	0.42	
不携帯	70.59	95.26	79.41	65.49	3.78	61.64	80.16	65.19	
その他	—	—	—	—	—	0.22	—	0.03	
計								100	

表10-(5)は、各々目的別資金携行者の各年代別における。1人当りの携行金額である。

この表から考察できることは、

- ① 土地購入目的意識は、平均金額にして、1930年代該当なし、40年代 Rp 37.50、50年代 Rp 5,581.19、60年代 Rp 39,302.29、70年代 Rp 148,633.20、(80年代 Rp 943,750) 80年代を除くと(年代初頭、一例のみのため)1940年代~1970年末期までの40年間に Rp 意識として、3.963.55(4,000)倍に増加した。
- ② 食糧確保目的意識は、1930年代、Rp 200、40年代 Rp 26.25、50年代 Rp 4,715、60年代 10,000.50、70年代 Rp 7,928.50、(16,250)(80年代 Rp 22,500-)同じく40年間で、実数で302倍推計値で619倍に増加した。
- ③ 旅費意識の変遷、同期間中1940年 Rp 7.38から1970年代の Rp 6.523で883.87(885)倍に増加している。
- ④ 家の建築目的資金携行者は、1940年代までではなく、1950年代 Rp 2,000-から1970年代の Rp 185,000で、期間中(30年間)で92.5倍である。

また、各々を単純年率にすると、

- ① 土地 99.01% ② 食糧 7.55% ③ 旅費 22.10%
- ④ 家建築 3.08%と各々目的別金額意識に大きな差異が生じている。

が、とくに土地購入目的に対する、携行金は原住地を離れる前に意識の中で、他の項目に比較して上昇率がとくに大きいことを認識していることを示唆する。（後述の土地購入参照）

表 10 - (5) は、各種別資金の携行者割合を示す表である。第一次流入者のうち、土地購入目的資金が 2.294%、食糧確保 5.46%、商業 0.38%、小工業 0.70%、旅費 4.88%、家建築 0.42%、その他 0.03%、不携帯 65.19%もしこの中から集団流入に近い Desa Ad. L を除けば、土地購入目的は、僅か 13.14%に下り、不携帯者が 75.43%へと上昇する。

#### 8-7. 流入時における住居

前段であきらかなように、各種目的別資金の不携帯者が調査全体の中で、最低で 65.19%、最高で 75.43% 存在するが、何処に誰と何の様な形態で生活の基盤をつくりだしてゆくのかをここであきらかにする。

また、勿論述べるまでもないが、土地購入、あるいは家の建築資金、小工業資金等の携行者については、各々目的に添った自立が可能であり言をまたない。ここで述べようとするのは、各種目別資金不携帯者についてである。

次表は、一時流入者の中で回答のあった 1829 人の集計と割合である。

この表から考察できることは、1~3 親等以内に住居を構える流入者が全体の 75.40% を占めており、前段における目的資金不携帯者の割合と殆んど一致しており、流入時における住居を示唆するとともに、呼び寄せられてきたことを明らかにする理由ともなる。また、親族の中から、何の部分が先行し、どの部分が在留しているかも示唆する。

この中で最も割合の高い家族の元への寄留については、家族内における流出が一度にはなされず部分的流出から漸次呼び寄せている。次に親の元への寄留は、親が流出時に帰点として残留させた長子または、これに近い子供を呼び寄せていることを意味する。また兄弟姉妹の元への寄留は、彼等の成功によっての形態をとることを意味している。また、子供の元への寄留は、子供の流出時に親が離郷を嫌ったか、または子供の成功によって、かである（原住地において血縁が無くなることは考えられない）。

叔父、または祖母を寄留先にしたのは、現地に血縁関係が存在せず、原住地から血縁関係者の呼び寄せとなった（経営委託と老後扶養）。

表-11 流入時における住居

	G. A	T. R	T. T	Sc. K	Ad. L	R. U	S. B	計	%	備考
親	4	95	30	98	63	62	85	437	23.89	
兄弟姉妹	—	2	17	24	24	124	42	233	12.74	
家族	8	86	44	69	181	109	205	702	38.39	
子供	—	—	—	—	—	2	1	3	0.16	
祖母	—	—	1	—	—	—	1	2	0.11	
叔父	—	—	2	—	—	—	—	2	0.11	
友人	1	—	—	9	13	35	7	65	3.55	
隣人	—	1	—	6	8	22	5	42	2.30	
自立 団体	4	6	20	62	133	25	29	279	15.25	
	—	—	—	4	—	58	2	64	3.50	
合計	17	190	114	272	422	437	377	1829	100	

次に寄留先を自立とした割合は、15.25%、友人、3.55%、隣人、2.30% 団体で、3.50%、計24.60%で、これを同じく前段の土地購入目的資金等の携行者の割合と比較すると、(-)1.46%の誤差が生じるのみである。

これらのことから、流入者の75%強は、すでに彼等の家族中より部分的流出を行ってきた歴史を示すものであるとともに、新開拓地への不安、そして帰点の確保(出生地不離脱本能)等の理由によるとみなされる。

表記中、家族とあるのに、原語でKeluargaのことで、一般的に従兄弟姉妹までを指し(三親等まで)、masih Keluargaと表現されれば、外戚を含む六親等までと解するが出身地域によって多少の差がある。

## 9. 土地の取得

農業の基礎となるべき土地について、その取得状況は、何の様に取得されるかを考察するが、現段階では早くも第2世代に入ったところ、また、入りつゝあるところがあり、こゝでは流入第一世代においてなされた土地取得とすでに第二世代に入ってなされた土地取得を分けて考察する。

まず、土地の取得には、①購入する、②政府による配分、③相続する、④贈与を受ける、以上四種の方法によって、一般的に行われる。

まず、④贈与によって、はこゝでは余り該当しない。この制度は地域社会に貢献した人（後期になり、貢献する人に様相を変えつゝある。）に与えられるものである。ところから一般流入者に対しては無関係と考えてよい。

ただ原住地より、血縁以外の地域住民を伴っての流入の場合（集団流入）には、その責にある者は、前以って現地調査、購入手続き等を行うので流入後、この制度の適用を受ける。

### 9-1. 購入について

もっとも一般的取得形態である購入については、流入定着後の様な過程によって、取得してゆくか、表-12は、その状態を調査したものであり、全調査対称2125戸は一次流入及び第2世代を含んだ戸数である。

一次流入者の土地購入は、3回までに分けて購入されるが、その第1回購入は、全体戸数のうち、84.80%、面積で、76.30%、平均面積にして、1.186 ha、第2回購入は、全体戸数のうち21.27%、面積にして11.57%、平均面積で0.717 ha、第3回購入は、全体戸数のうち、12.47%、面積にして、6.42%、平均面積で、0.679 ha、が購入されている。換言すれば、全体戸数の12.47%は、土地購入を3回にわたって行い、その面積は、一戸平均2.582 haを取得し、また、全体戸数の21.27%は、土地購入を2回にわたって行い、その面積は、1.903 haを取得し、全体戸数の51.06%は、土地購入が1回で、面積は一戸平均1.186 ha取得しているが、全体戸数の15.20%の未購入戸数が存在している。また、調査対称Desa 毎に購入形態が少々異なり、Desa T. RとAd. Lにおいては、1回購入であり、あとの5 Desa については、購入前の所有者は3回にわたって購入が行われている。主として1回購入が行われる集落は主として集団流入地域で、流入

表-12 土地取得状況(購入、相続、政府)第一世代

第1回目									
戸数	G. A	T. R	T. T	S. K	Ad. L	R. U	S. B	計	
	56	280	132	343	496	440	378	2125	
購入戸数	41	276	99	262	450	324	350	1802	8480
購入面積(ha)	14915	171095	49220	174280	691795	668800	367645	2137750	7630
一戸平均(ha)	0.364	0.620	0.497	0.665	1.537	2.064	1.050	1.186	
第2回目									
購入戸数	20	-	51	161	-	69	151	452	2127
購入面積(ha)	5250	-	28320	108120	-	58685	123730	324105	1157
一戸平均(ha)	0.263	-	0.555	0.672	-	0.851	0.819	0.717	
第3回目									
購入戸数	3	-	34	116	-	34	78	265	1247
購入面積(ha)	0.930	-	19900	63800	-	25250	70100	179980	642
一戸平均(ha)	0.310	-	0.585	0.550	-	0.743	0.899	0.679	
政府配分									
購入戸数	6								
購入面積(ha)	3350	43000	-	-	113660	-	-	160010	571
一戸平均(ha)	0.558								
合計面積	24445	214095	97440	346200	805455	752735	561475	2801845	100
一戸平均面積(ha)	0.437	0.775	0.984	1.321	1.790	2.323	1.604	1.554	
相続									
戸数	34	(145)		35	5			(219)	
面積(ha)	14530	70385		18350	3000			106265	
一戸平均面積(ha)	0.427			0.524	0.600			(0.485)	
耕地所有者率	$\frac{41}{56} = 73.21$	$\frac{276}{280} = 98.57$	$\frac{99}{132} = 75.00$	$\frac{262}{343} = 76.38$	$\frac{450}{496} = 90.73$	$\frac{324}{440} = 73.64$	$\frac{350}{378} = 92.59$	$\frac{1802}{2125} = 84.80\%$	

※ ( ) 内推計値

開始以前に、それら地域の確保がなされることが多いので、この様な現象を生ずる。

また、漸次購入が行われる地域では、五月雨式流入が行われ、資金不足、または、土地の1ヶ所への集団化が不可能なことから、この様な現象を生ずる。

### 9-2. 政府配分について

政府配分は、政府移民のみに配分されるもので一戸あたり2.0haが基本であるが、表-12の該当する集落G.Aについては、一戸あたり配分面積が0.437haとなっているが、集落化が開始されたのが、オランダ施政下であり、その目的が定住安定労働力の供給であったことから、施政下における一戸あたりの試算配分である。また、Desa Ad. L.に113.660haの政府配分があるが集落化が1950年以降の政府移民であることが判明するとともに、その戸数の明記はないが、約57戸と推計される。

また、土地所得者の総取得面積の5.71%が政府配分で、94.29%は自己購入によって取得がなされている。しかし、全戸数の15.20%は土地取得がなされなかった。ことが考察された。

### 9-3. 第2世代における土地取得について

第2世代は、どのような形態で土地取得を行っているのかを、すでに第2世代に入った集落G.Aについて考察する。(他の集落においては進行中、または集落化が新しいためにまだ一次流入者の世代である。)このことは今後における流入集団化社会内の今後の展開を示しており重要であると考えられる。

この集落G.Aにおける一次流入者の数は17戸であるが、現在第2世代を迎えているのは16戸である。(内1戸は1970年流入)

年代では、1936年から1960年までの定住戸数である。がすでに現在(1982.10)、同一地域内において総戸数56戸へと増加した。換言すれば同一地域内においての戸数の増加は土地の零細化でもある。

表-13 第2世代における土地取得状況

Pusa G. A.

Th	1939	.....	1945	.....	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964
	土地購入1回目	-	-	① 0.125	③ 0.875	-	-	-	② 0.625	① 0.125	④ 0.875	① 0.750	-	④ 0.500
土地購入2回目	-	-	-	④ 0.250	-	-	-	-	-	② 0.375	-	-	① 0.125	-
相 続	① 0.750	-	① 0.250	⑤ 0.625	-	-	-	② 0.500	① 0.500	⑥ 1.750	① 0.250	-	② 0.750	-
計 (ha)	① 0.750	-	② 0.375	⑦ 1.750	-	-	-	④ 1.125	② 0.625	⑨ 3.000	② 1.000	-	④ 1.375	-
1人当り平均面積	0.750	-	0.188	0.250	-	-	-	0.281	0.313	0.300	0.500	-	0.344	-
Th	19.6.5	6.6	6.7	6.8	6.9	7.0	7.1	7.2	7.3	7.4	7.5	7.6	7.7	7.8
土地購入1回目	-	② 0.750	② 0.375	-	-	① 0.125	① 0.125	④ 0.125	① 0.125	③ 0.775	-	-	-	-
土地購入2回目	① 0.500	⑦ 0.125	-	-	① 0.250	① 0.250	② 0.250	① 0.250	① 0.500	-	-	② 0.250	-	-
相 続	① 0.625	① 0.250	② 0.600	-	① 0.500	② 0.500	④ 1.000	② 0.500	-	⑤ 2.750	① 1.080	③ 0.750	① 0.375	-
計 (ha)	② 1.125	④ 1.125	④ 0.975	-	② 0.875	② 0.875	④ 1.375	④ 0.875	② 0.625	⑧ 2.525	① 1.080	③ 1.000	① 0.375	-
1人当り平均面積	0.563	0.281	0.244	-	0.292	0.292	0.344	0.219	0.313	0.441	1.080	0.333	0.375	-
Th	7.9	8.0	8.1	8.2	8.3	8.4	8.5	8.6	8.7	8.8	8.9	9.0	9.1	9.2
土地購入1回目	-	-	① 0.125	2.5	6.400	0.256	2.743	1.232	1.232	1.232	1.232	1.232	1.232	1.232
土地購入2回目	-	-	-	1.2	2.875	0.239	1.232	1.232	1.232	1.232	1.232	1.232	1.232	1.232
相 続	-	-	① 0.250	3.3	1.4055	0.426	6.025	6.025	6.025	6.025	6.025	6.025	6.025	6.025
計 (ha)	-	-	② 0.375	7.0	2.3330	1.00	100	100	100	100	100	100	100	100
1人当り平均面積	-	-	0.188	0.333	0.333	0.333	0.333	0.333	0.333	0.333	0.333	0.333	0.333	0.333

1. 第2世代 合計 3.9人  
 2. 土地購入第1回 2.5人 64.10%  
 3. 土地購入第2回 1.2人 30.80%  
 4. 相続取得 3.3人 84.60%  
 5. ○印は人数

表-14

Tabun	:	1936	=	8	K. K.
		1938	=	1	K. K.
		1939	=	1	K. K.
		1940	=	3	K. K.
		1943	=	1	K. K.
		1950	=	1	K. K.
		1960	=	1	K. K.
		1970	=	1	K. K.
Kelahiran setempat				39	K. K.
				56	K. K.

表-14 は年次別一次流

入者戸数を表すものであるが、流入定住初期年代を基準とはしないで、実際に第2世代に入った1960年までを把握するとその増加は55/16 すなわち集落化以来僅か46年にして、その戸数は、約3.44倍に増加している。

単純平均年増加率7.47%の高率で伸びており今後において問題解決をはからなければならない重要なものの一つである。

こゝで明らかのように第2世代39戸についての土地取得の形態であるが、まず面積については、一次流入定住者が取得していた24,445haの内、すでに95.44%に相当する23,330haが、第2世代に受けつがれている(差4.56%、1,115haは未だ第1世代)。その取得年代は、1950年代後期、1960年代中期、1970年代初期の3回、ピークが見られる。

これは第1次流入年代との関連性があることを推察させ、1950年代後期にピークを迎えたところは、1936年、第1次流入定住者の2世代目で、その期間として、20年が推計でき、第1次流入定住後20年経過後において世代の交代が行われ分化することが考察される。

それでは分化された土地面積23,330haが、どのような形態で受けつがれたかは、表-13に従って、その中の27.43%が第1次購入、12.32%が第2次購入、60.25%が相続と各形態で行われており、第1次購入を行った者が全体の64.10%(25人)、第2次購入を行った者が全体の30.80%(12人)、相続を受けた者が全体の84.60%(33人)。

第1次購入平均面積は1人あたり、0.256ha

第2次購入平均面積は1人あたり、0.239ha

相続面積平均1人あたり、0.426ha

となっており、それら各々の行為回数は集計で70回に及ぶが、1人あたり平均面積は0.598haと推計される。また、第2世代において、購入形態の発生が同一地域内においておこるのは、相続が女子に及んでいるため、嫁



ぎ先、あるいは距離的關係、經濟的理由、細分化されすぎたために同一地域内での經營不能等の理由によって、家の後継者に買い取ってもらうケースが多いが、集落G・Aにおいては、それらの購入面積が相続面積の約半分であり主として、女子の相続相当分の購入が推察できる（一般的に相続の場合男子1に対して女子0.5である）。

#### 9-4. 土地所有状況（面積別、年令別）

土地所有面積分布は、集落化の古いところから小面積化している。無所有者が全体（2,101戸）の11.85%（249戸）あり、全体の所有者分布は、1.00ha以下が51.33%（1,078戸）を占める。

一方年令別分布では、50才以上が全体の46.69%（981人）を占めており、高令化が進んでいるとともに第2世代へ入る前段階にあることを意味しており、前述の集落G・Aと同様の道を辿ることを示唆する。

表-15 土地所有状況 (Deseの別)

1. 面積別

(人)

Desa 面積 ha								計	%
	G. A	R. R	T. T	S. K	Ad L	R. U	S. B		
0	0	69	7	40	75	43	15	249	11.85
~0.25	2	17	15	42	65	49	39	229	10.90
~0.50	17	39	21	53	87	38	48	303	14.42
~0.75	30	65	13	33	64	42	33	280	13.33
~1.00	1	20	24	43	61	44	73	266	12.66
~1.25	3	19	14	14	41	54	20	165	7.85
~1.50	1	19	9	27	29	32	23	140	6.66
~1.75	0	7	10	13	13	55	20	118	5.62
~2.00	1	6	5	27	10	28	33	110	5.24
~2.25	0	6	5	6	12	20	10	59	2.81
~2.50	1	3	2	12	7	13	13	51	2.43
~2.75	—	2	1	2	3	12	5	25	1.19
~3.00	—	4	2	5	2	10	18	41	1.95
~3.25	—	2	3	—	2	5	5	17	0.81
~3.50	—	2	2	—	1	4	5	14	0.67
~3.75	—	0	—	—	0	2	3	5	0.24
~4.00	—	1	—	—	1	0	3	5	0.24
~4.25	—	0	—	—	1	3	1	5	0.24
~4.50	—	0	—	—	—	6	4	10	0.47
4.50>	—	2	—	—	—	—	7	9	0.42
計	56	283	133	317	474	460	378	2101	100

2. 年令別 表-16

Desa 年令								計	%
	G. A	T. R	T. T	S. K	Ad. L	R. U	S. B		
15~20	1	2	0	3	5	0	2	13	0.62
~25	1	13	6	37	33	8	17	115	5.47
~30	6	36	24	42	50	41	46	245	11.66
~35	4	34	26	42	57	37	51	251	11.95
~40	10	24	13	36	65	65	34	247	11.76
~45	13	33	7	40	59	54	43	249	11.85
~50	9	39	18	38	82	76	51	313	14.90
~55	1	25	11	36	64	65	62	264	12.57
~60	2	21	10	12	32	69	31	177	8.42
60>	9	56	18	31	27	45	41	227	10.80
計	56	283	133	317	474	460	378	2101	100

图—5 各村别、年令、面積別土地所有狀況

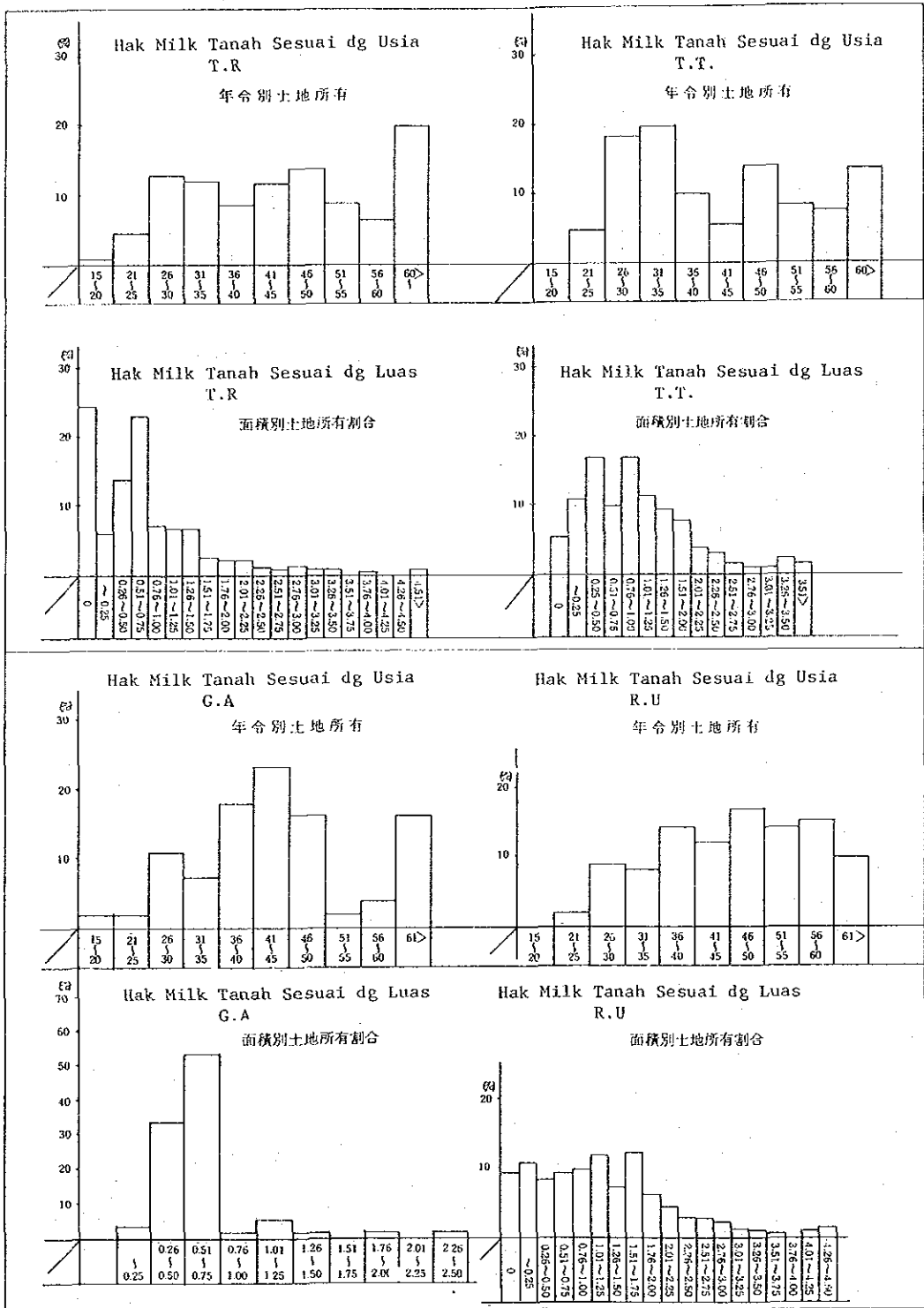
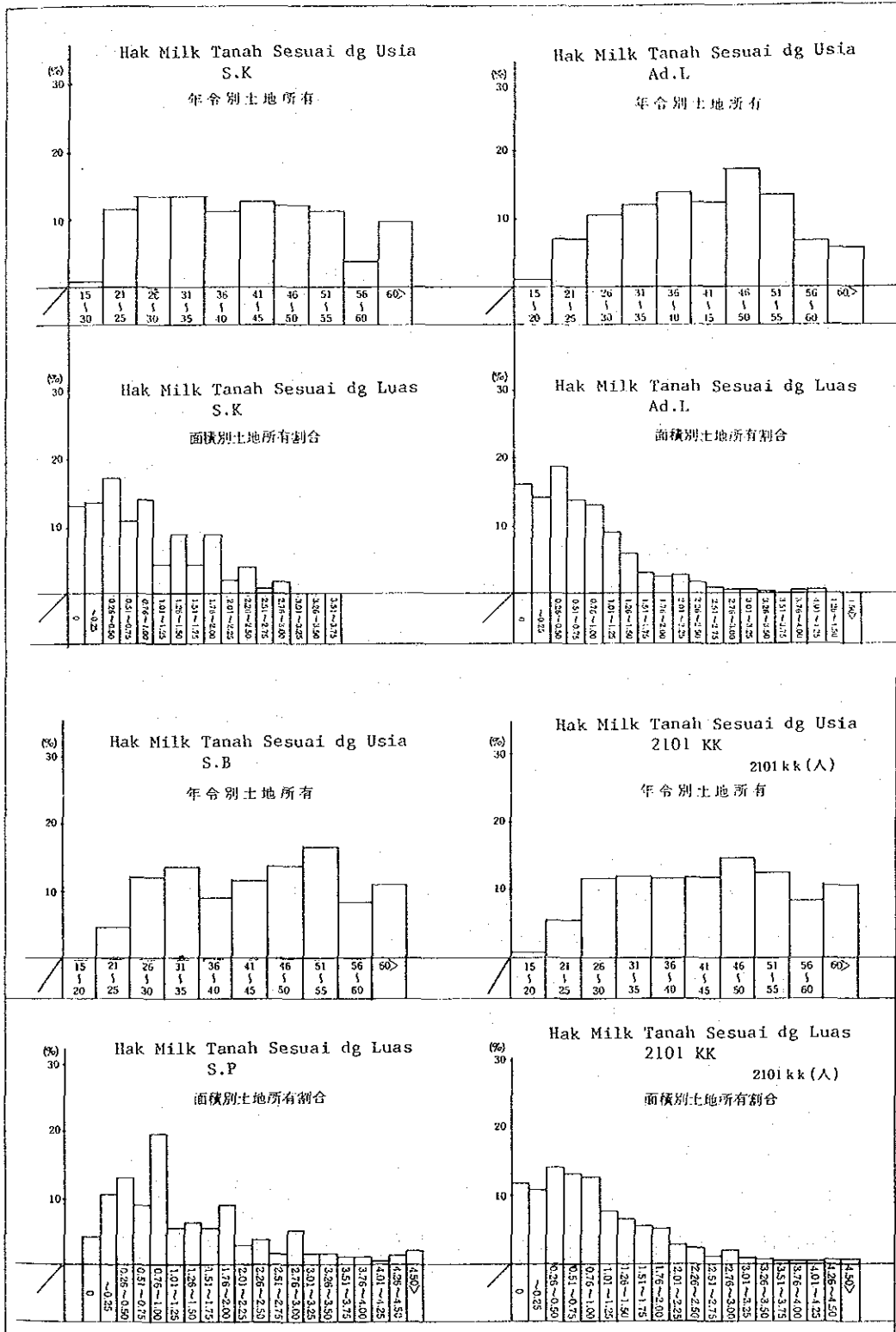


图-6 各村别、年令、面積別土地所有状况



## 9-5. 土地取得時期について

一次流入者が土地を取得する時期は、流入定着後、どの位の期間を要しているのかを調査に基いて、図化したのが、図7-(1)~(7)である。各々集落によって、僅かに異なるが、その殆んどが、2年から8年の間において取得する。

また、平均取得面積が大きい程、土地の流動が、固定化しやすく、当初取得者集団によって、その後における流動が顕著ではない。

換言すれば、当初取得不可能者の土地取得を困難化するといえる。

また、大きくピークを描く集落のその殆んどは、原住地を同じくする地縁集団（政府移民においても）による土地取得の状態を示すものであり、その前段階において、すなわち定住当初年に先遣隊数名による、平均土地取得面積を大きく上廻った確保がみられる（集落 T.R, Ad.L, R.U）。

つぎに、長期間に亘る土地取得可能集落においては、初期より一回当り平均土地取得面積が小さく、その域内に余裕地を残しているとともに、流入者による初期大面積確保が不可能である。すなわち原住地を同一とする集団流入ではなく、血縁関係を基礎とした小集団の流入地域であり、土地取得も流入後20年に及んでもなお土地の取得を容易にする（T.T, S.K, S.B）。

また、流入後47年を経過している集落 G.A においては、当時オランダ施政下にあり、流入形態自体が現在と異なっているが、現在までの一次流入者のうち定住当年において11/16人、すなわち69%が土地を取得し、その後、15年と20年目に各々一件ずつあるが、その後の15年間において一次流入者による土地取得をみるに至らない。このことは、前段の第2世代への相続移行が主体となり、土地が細分化されるために一次流入者による面積確保を目的とした土地取得を不可能にする。

以上の観点から、① 一般的には、新しい地域に流入者が入って、20年間以内においては、土地取得が容易に行われるが、それ以後においては、土地流動が余り行われず固定化して、第2世代へ移行をはじめ。② 原住地を同じくする集団流入地域においては、それよりも短かく、15年以内で土地の流動を殆んど停止する。③ 血縁的集団を基礎とした流入地域においては、土地流動は長期間に亘って続く。また、特徴として、② の場合には大面積確保、③ の場合には、小面積確保と各々特色があげられる。

図 7 - (1) 各村別、定住経過と土地取得状態

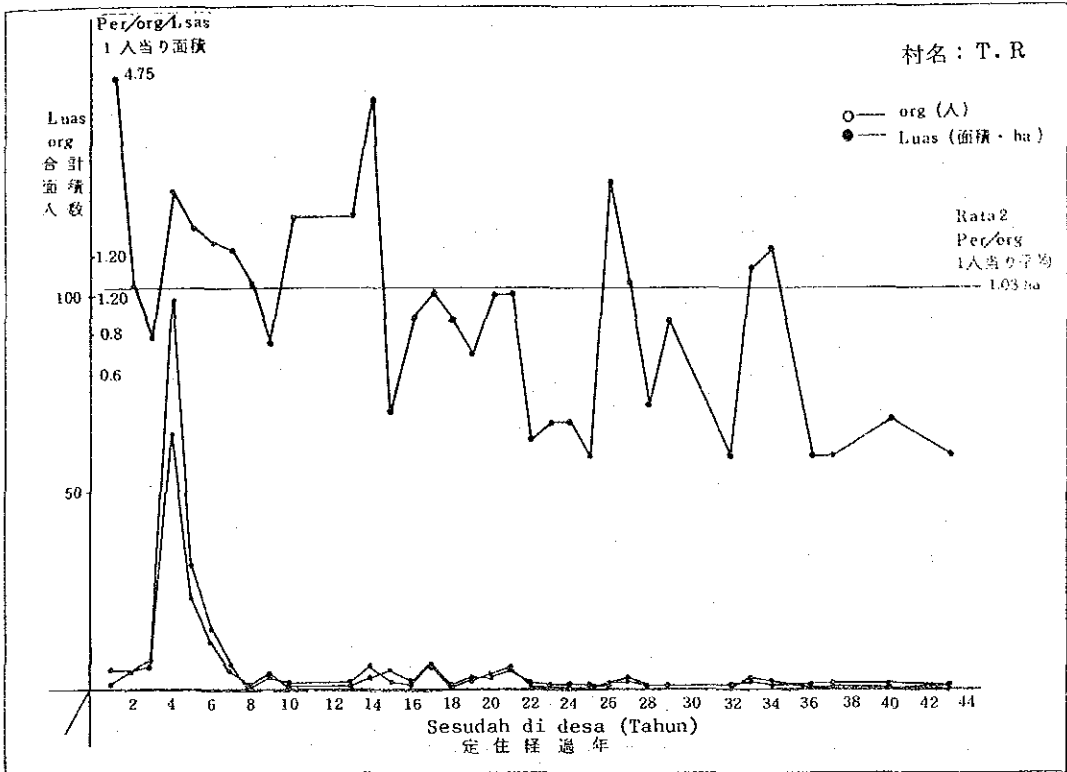


図 7 - (2) 各村別、定住経過と土地取得状態

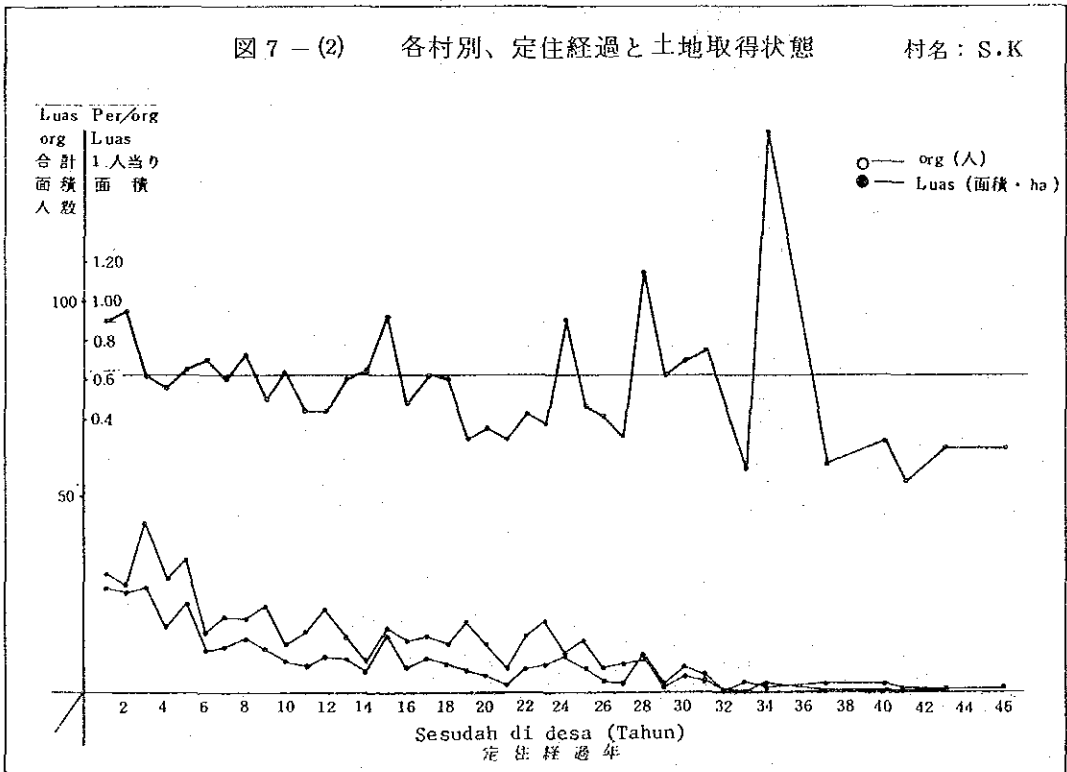


図 7 - (3) 各村別、定住経過と土地取得状態

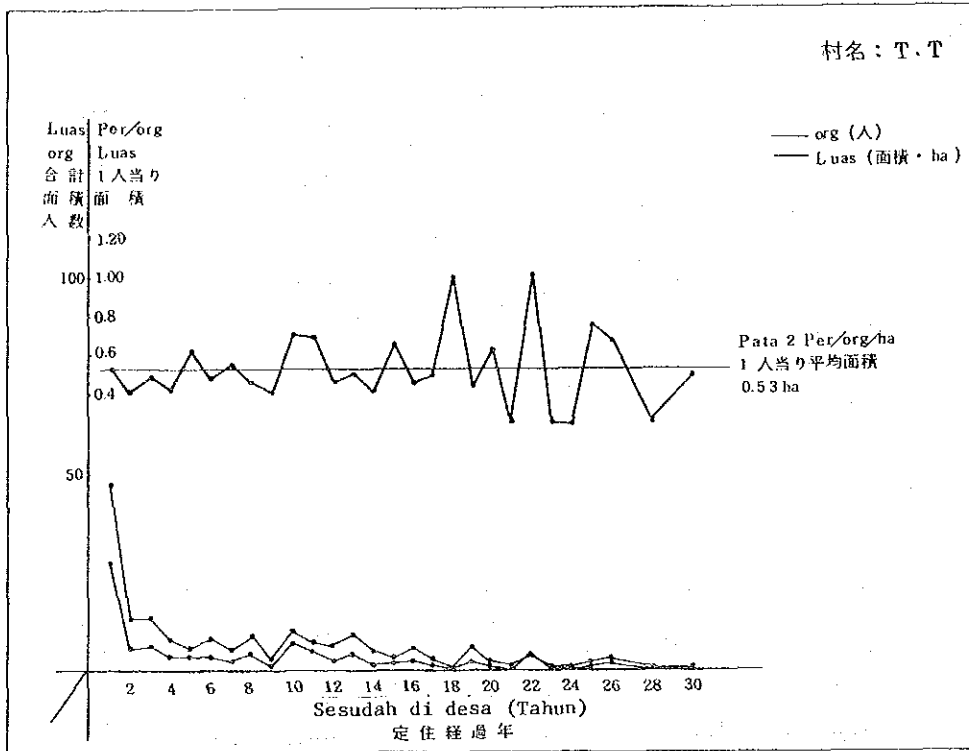


図 7 - (4) 各村別、定住経過と土地取得状態

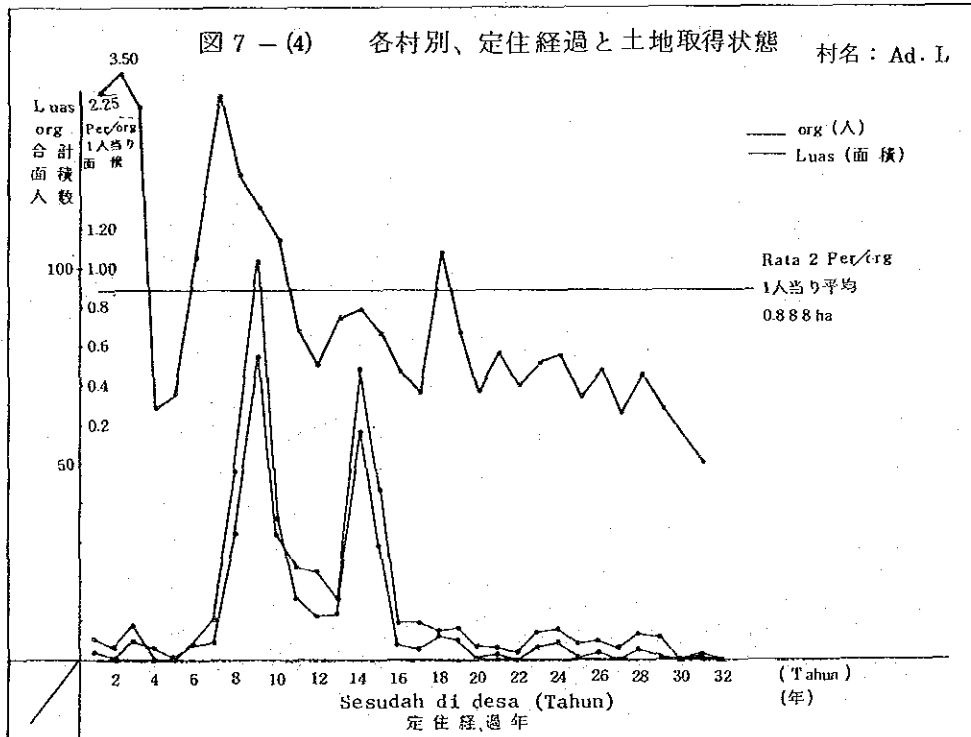


図 7 - (5) 各村別、定住経過と土地取得状態

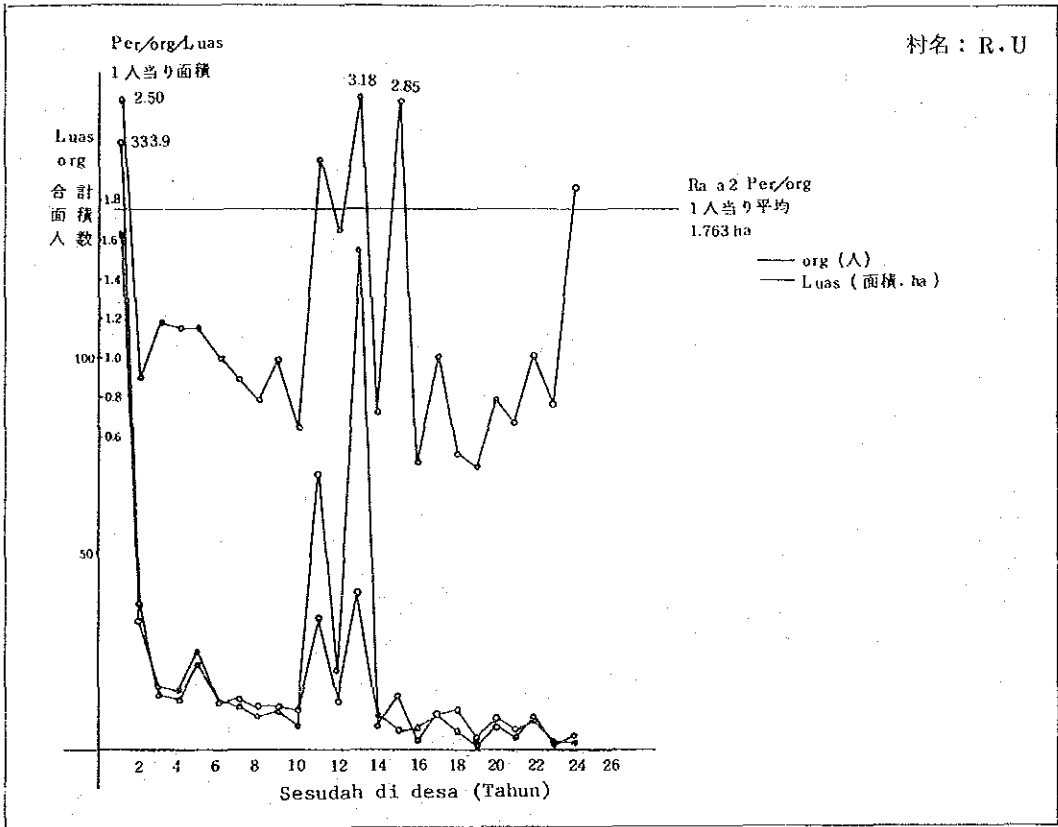


図 7 - (6) 各村別、定住経過と土地取得状態

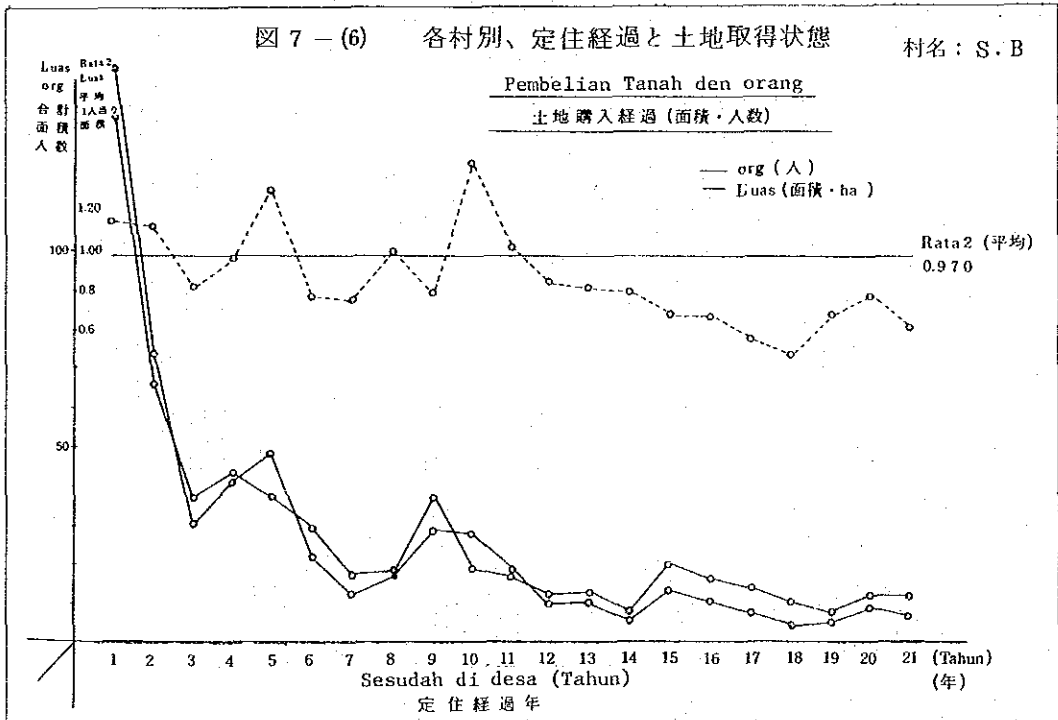
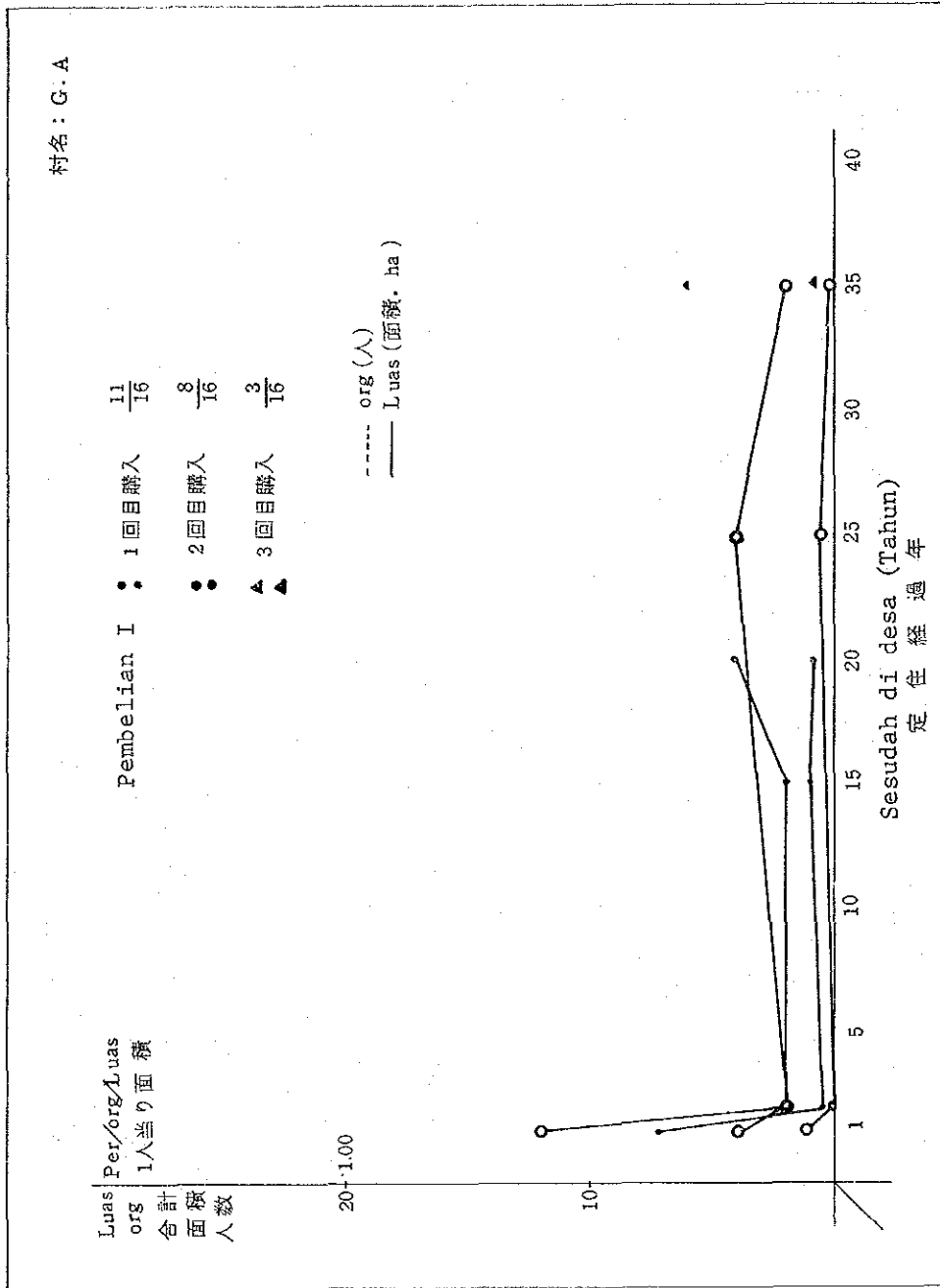




図 7 - (7) 各村別、定住経過と土地取得状態



## 10. 土地売却について

前段において、土地の取得について、考察してきたが、こゝでは、その売却について、それが行われている場合、何の様な条件のもとで行われるのかを考察する。

### 10-1. 土地購入からみた売却について

まず、この調査内における土地購入者数 1,802人面積 2,801,845 ha のうち、売却した人数は、218名で前者との比較で12.1%、面積では、169,095ha 同様に6.0%、において行われた。

### 10-2. 売却理由について

売却理由については、表-17によって考察してゆくと、その理由として、14種類あげられ、その他を加えて合計15種類である。

まず、第1番として人数、面積ともに大きいのが、家建築のために売却されたもので全体の人数で22%強、面積で同じく22%強となっている。

家の建築と言うよりは改築と称す可きもので、流入当初の一次的家屋、(gubuk) から永久家屋 (Rumah・煉瓦及び瓦屋根) への移行であり、しいて言及すれば、一代における成否、また、域内における地位の決定であり、その最終の目的とするものゝ一つであることに間違いはない。ことから域内において競争が起る場合もあり、この様な時点では土地売却によって家の建築を強行する。また、血縁、地縁関係者間にあつては講方式 (Arisan) によって、例えば、10戸一組となつて、毎年2戸宛建築する等の方式が採られるが、この場合は、総て現物供出であり、算出基礎は講の初年度において計算される。よつて同一地域内に同一型の家屋が何軒か建築されるが、それが隣、近所とはなりえず、主として点在しているが、その大部分は、血縁及至地縁関係にあくまでも基礎を成した小集団方式であり、一面屬地的でもある。以上のような理由から、土地売却に占める割合が大きくなることが推察せられる。

第2番目としてあげられるのが、投薬費で人数、面積ともに11%強を占めている。こゝで言う、投薬費の殆んどは入院を伴っていると解す可きである。何となれば、傷病の軽い場合には、その殆んどが郡単位に在る保健所 (Puskusmas) において加療が可能であるところから推察できる。

また Rp 換算 1 人当り約 Rp 159,500- とすれば約 7 日～10 間の入院加療であったことも推察できる。一般的に農村集落における収入（土地所有一戸当り平均、畑作約 Rp 400,000-、水田約 Rp 700,000-、1982 年）に比較して高価であること、収穫物販売時に貯える制度が確立していないこと、即消費すること、保健制度の不確立等社会整備が遅れていることに起因するとともに、土地非所有者層に視点をあてるとき、とくに早急な社会制度による救済をはからなければならない。また、土地所有者全体からみても入院による土地売却が約 2% 存在することは考慮を払わなければならない。

第 3 番目として、土地の買足しのためが、人数で約 10%、面積で約 8%、この理由は、上田を売却することによって、新規開田地域あるいは、中、下田を面積拡大を目的として行われたもので、自己（一次流入者、あるいは相続人）の経営もさることながら第 2 世代への布石と考えての行為で、次世代への土地確保と考えられる。

しかし、調査全体からみれば、僅か 1% 強にすぎない。換言すれば全体の 1% が前途を見越しての経営を行っていると解すべきである。

第 4 番目としては、冠婚葬祭 (Pesta/Selamatan) が、人数で約 10%、面積で約 6% がある。これは、第 3 番目と殆んど同率であるが、目的とするところは逆であることは言うまでもない。とくに婚礼 (Pernikahan)、男子の割礼 (hajatan) において甚だしく分不相応を地で行くために土地売却に連らなる。地域社会の慣行上止むを得ないが、改革の余地はあり、地域社会における指導者の双肩にあることは論を待たない。何となれば、「それらの規模、日数、等の許認可は地域指導者に存在している。」からであり、彼等が放任状態にすれば、益々競争して上昇するであろう、適切な指導を行えば、過剰な支出を止めることが可能であり、土地売却までに至らずに止める可きものである。

第 5 番目として、食費 (Makan) として、人数で約 9%、面積で約 13% がみられるが、人数の割合に比べて面積比率が大きく Rp 比率が低いことは、未だ地価が安く、換言すれば新規流入地域、畑地域に片寄り、未だその生活が安定していない状態を示すとともに新規流入者の土地取得も割合容易に行われることを併せ示している。が一般的に新規開田地域においては、作物栽培も安定せず、ことに畑地域においては、天候に左右される単年作物が主体であり制度的貯えが未発達等の条件下においての生活の厳しさを知る上で

の指標であり、食費のためには次に述べる家畜から進んでゆくので土地売却に至るまでには、種々な手段（日雇労働等）を行使し、その後においてとられるのが普通であるところから、その厳しさに至っては余りあろうし、天候条件に割合強い永年作物指向も部分的に考慮をしなければならないが、このような生活条件下にあっては、自己資金で望むことはむづかしく現存の制度金融の円滑な運用によって、その改善をはからなければならない。

第6番目が学費としての土地売却で、人数で約9%、面積で約8%、と子弟への教育投資であり、その熱心さは、古い集落から急激に新しい集落へと発展しているが、その殆んどは官公吏への基礎造りとしてであり、卒業後の村内定住率は、3:7で外部に7が流出する、また、3の殆んどは小学校教員として村内定住がみられるが、その人数においては少なく、外部よりの流入によってまかなわれているのが現状である。教育投資においては、純粋な人材養成への投資と、投資としての投資に分けて考えれば、現段階における教育投資は後者の意味合いが強いことに留意しなければ、今後の社会を建設してゆく上で危惧される。

第7番目が、家畜購入のためが、人数で約6%面積で約6%が新規集落においてみられる。が、表-17から推察して、その殆んどは、大家畜で農作業と資産の両者を兼備した反転投資と考えられる。

以上が土地売却全体のうちで、各々5%以上を占める項目で、以下表一の通り続くが、新しく目を引くのが、土地売却によってのモーターサイクルの購入が同一集落において2名みられ、割合としては未だ低い、金額より推察して“上田”の売却によって購入が行われており、都市(Metro)に近い集落にみられ、今後都市より遠隔の地域に同現象の発生がみられるであろうことが考えられる。また、この購入現象は多くの場合実用としてではなく、集落内における地位象徴と格好良さ(gensih)によって行われ、非生産的要素が大きい。

次に最後の項目として上げられている、「その他(Lain-Lain)」であるが、表中において、その殆んどを網羅しながらも、未だ、この項目に人数で約11%、面積で約16%、金額で約28%と大きな割合を占めているが、理由が明らかにされず、換言すれば明らかにできない理由と考える可きで、あまり良いことではなく、反社会的行為から生じた割合が大きいと推察される、一例として賭博が上げられる。

集落内においての、冠婚葬祭に併なって、その殆んどと言える機会に開催され、小額なものから高額に至る様々な形態で行われ長期化、あるいは定期化に連なる。また、これらは賭博 (Judi) とは表現されず遊び (Main) で以って表現されるのが、一般的で、彼等の意識の中に賭博としての意識存在が無く、遊び意識のみが存在しておれば、反社会的意識も殆んど存在しないことになる。また、宗教の中においても禁止されており、賭博から“遊び”に表現を転換した罪からの逃避を計った。姑息な人為手段によって継続されて地域社会連携に名をかりた反社会、反敬神の行為によって上げられたものが、その大部分を占めており、早急な集落に至るまでの指導によって改革を計らなければならない。

※ 表中にある金額は、現価格に換算してある。

表-17 Penjualan Tanah (土地売却) I.

Desa	G, A	T, R	J, K	T, T	Ad, L	R, U	S, B	Jumlah 合計	%
① Berobat 投 案 費 org 人 Luas 面 積 (ha) Rp	2	1	2	1	6	2	11	25	11.47
	0.375	0.180	0.750	1.000	6.125	1.500	9.500	19.420	11.48
	525,000	100,000	250,000	500,000	1,904,000	320,000	388,140	3,987,140	9.19
② Bangunan 建 案 org 人 Luas 面 積 (ha) Rp	2	6	15	1	9	6	9	48	22.02
	0.375	2.695	9.060	1.000	13.500	2.695	5.250	37.915	22.42
	450,000	2,300,000	1,878,000	500,000	2,175,000	2,300,000	490,000	10,870,000	25.04
③ Belihewan 家畜購入 org 人 Luas 面 積 (ha) Rp	-	2	-	-	-	2	9	13	5.96
	-	1.050	-	-	-	1.750	7.450	-	6.06
	-	600,000	-	-	-	230,000	804,000	-	3.76
④ Utk Sekolah 学 費 org 人 Luas 面 積 (ha) Rp	-	3	6	-	3	2	6	20	9.17
	-	0.790	3.500	-	3.500	0.750	5.450	13.990	8.27
	-	354,000	910,000	-	150,000	140,000	343,000	1,897,000	4.37
⑤ Pindan Tempat 移 転 org 人 Luas 面 積 (ha) Rp	-	-	-	-	-	-	1	1	0.46
	-	-	-	-	-	-	5.250	5.250	3.10
	-	-	-	-	-	-	472,500	472,500	1.09
⑥ Beli 土地買足 org 人 Luas 面 積 (ha) Rp	-	-	8	-	5	2	7	22	10.09
	-	-	3.860	-	4.750	1.250	4.125	13.980	8.27
	-	-	1,887,350	-	889,000	390,000	382,000	3,548,350	8.17
⑦ Utk Makan 食 費 org 人 Luas 面 積 (ha) Rp	-	2	-	-	4	3	12	21	9.63
	-	0.880	-	-	9.625	1.000	9.875	21.370	12.64
	-	460,000	-	-	425,000	75,500	704,650	1,665,150	3.84
⑧ Warisan 相 続 org 人 Luas 面 積 (ha) Rp	2	-	-	-	-	-	-	2	0.92
	0.500	-	-	-	-	-	-	0.500	0.30
	600,000	-	-	-	-	-	-	600,000	1.38

表-17 (続き) Penjualan Tanah (土地売却) 2.

	G, A	T, R	S, K	T, T	Ad, L	R, U	S, B	Jumlah 合計	%
⑨ Pesta/selamatan 冠婚葬祭 org 人	-	4	2	-	3	4	9	22	10.09
Luas 面積 (ha)	-	1.650	1.000	-	1.250	1.875	5.125	10.890	6.44
Rp	-	1,370,000	60,500	-	70,000	950,000	237,000	2,687,500	6.19
⑩ Rumah Tongga 家計費 org 人	-	-	-	-	3	-	2	5	2.29
Luas 面積 (ha)	-	-	-	-	1.000	-	0.750	1.750	1.03
Rp	-	-	-	-	265,000	-	193,350	458,350	1.06
⑪ Dagang 商売 org 人	-	-	-	-	-	-	1	1	0.46
Luas 面積 (ha)	-	-	-	-	-	-	1.500	1.500	0.89
Rp	-	-	-	-	-	-	615,000	615,000	1.42
⑫ Utk Keluarga 家族費用 org 人	-	4	-	-	-	-	6	10	4.59
Luas 面積 (ha)	-	1.755	-	-	-	-	2.330	4.085	2.42
Rp	-	1,050,000	-	-	-	-	475,000	1,525,000	3.51
⑬ Ke Jawa Jawa旅行 org 人	-	-	-	-	-	-	1	1	0.46
Luas 面積 (ha)	-	-	-	-	-	-	0.500	0.500	0.30
Rp	-	-	-	-	-	-	160,000	160,000	0.37
⑭ Beli Motor 自動車 org 人	-	2	-	-	-	-	-	2	0.92
Luas 面積 (ha)	-	0.890	-	-	-	-	-	0.890	0.55
Rp	-	1,060,000	-	-	-	-	-	1,060,000	1.90
⑮ Lain-2 その他 org 人	-	1	8	6	-	4	6	25	11.47
Luas 面積 (ha)	-	3.000	10.770	3.500	-	5.500	4.000	26.770	15.83
Rp	-	3,500,000	2,557,400	4,162,000	-	1,860,000	142,000	12,221,400	28.16
Jumlah 合計 org 人	6	25	41	8	33	25	80	218	100
Luas 面積 (ha)	1.250	12.890	28.940	5.500	39.750	19.660	61.105	169.095	100
Rp	1,575,000	10,794,000	7,543,250	5,162,000	5,878,000	7,033,500	5,415,640	43,401,390	100.

## 11. 家畜の購入と売却

### 11-1. 家畜の購入について

家畜については牛 (Sapi Kerbau 含水牛) と山羊 (Kambin)、豚 (Babi) に止めた。家畜は農作業使役と併せて資産として運用され、どちらかといえれば後者の意味合いが強い。また、その価格形成も鶏 10羽 = 山羊 1頭、山羊 10頭 = 牛 1頭となる価格形成である。現価格 (1982年) にすると鶏 1羽 Rp 1,500~1,800-、山羊 1頭 Rp 15,000-20,000、牛 1頭 Rp 150,000-250,000- である。

そのため表-18中の山羊 (Kambin) の割合換算は割愛した。一般的には、流入後、鶏の放飼より開始され羽数を増加し、山羊代金に相当すれば山羊の導入を計るが、山羊から牛、または水牛に達するまでには、山羊頭数を増加してゆかなければならず個人による飼育を不可能に近づける (飼料採取不能が主原因)。

ここで山羊小作が発生し外部 (主として血縁、地縁関係者) へ飼育を委託する。受注者は飼育によって産出された家畜の 50% を受取る制度で牛及び水牛にも、この制度が適用される。

この表-18中における購入頭数中にも上記のものが含まれる。

家畜の購入、牛の購入頭数は調査内において現在までに 925頭が計上され、全戸 1頭で計算すると約 40% 強の農家が取得したことになり、山羊は同じく約 60% 弱の農家が取得しているが、その率は未だ高いとはいえない。

また、豚は宗教的關係から、その殆んどは、Bali からの流入者に限定される。また附表から考察すると山羊の取得は流入定住直後にピークが現れて、稍々下降傾向に推移するが牛の場合には定住後 10年前後を経過してピークをむかえる。この形態が一般的で、資産の増加形態を裏付けるものであり、流入初期の取得可能者は原住地よりの資金帯同者であることが推察できる。

### 11-2. 売却について

購入、取得された家畜が役畜としての目的のみでないことは、その売却と用途によって明らかである。牛の場合には、その 37% が山羊の場合には、その 53% が各々売却されており資産としての運用の意味合いが強い。

次に用途別項目は、その他を含めて 19項目が上げられる。



その中で第1番目にあげられるのが、全体の約30%を占める家の建築であり理由としては前記土地売却と同一である。

第2番目が約20%の土地購入であるが、前記土地売却による家畜購入があるので、その転換としてとらえたい。

第3番目が冠婚葬祭のためが約15%を占めて、土地売却に至る前段階的意味でとらえられる。

以下、学費として、約8%、商業資金として約3.5%、里帰り資金として約3.5%、食費、投薬費が各々約2.3%、これより少々高率なモーターバイク購入が約2.6%と続くが、それらの理由は、前記土地売却において考察したことに他ならない。

以上、土地、家畜の売却と、その用途について考察してきたが、その中において、彼等が何を指向し、何を求めて、流入定住しているかの一端を、この項目から推察することがある程度可能であろう。

表-18 Pembelian dan Penjualan hewan 家畜の購入と売却

(I) Pembelian 購入									
	G, A	T, R	S, K	T, T	Ad, L	R, U	S, B	Jumlah 合計	
Sapi 牛	11	232	79	56	198	217	132	925	
Kambin 山羊	14	68	216	10	366	208	349	1,231	
Babi 豚	-	-	3	-	-	-	-	3	
(II) Penjualan 売却									
	G, A	T, R	S, K	T, T	Ad, L	R, U	S, B	Jumlah 合計	%
① Perbaikan Rumah 家屋修理	Sapi 2 K 1	-	-	-	-	-	-	Sapi 2 K 1	0.58
② beli Tanah 土地購入	Sapi 1 K 0	10	15	-	19	7	16	Sapi 68 K 104	19.88
③ Porak 税金	Sapi 0 K 1	-	-	-	-	-	-	Sapi 0 K 1	0
④ Ke Jawa 里帰り	Sapi - K -	-	Sopi 6 K 0	-	-	1	5	Sapi 12 K 5	3.51
⑤ Perbot R, T 家野	Sapi - K -	-	-	-	-	0	2	Sapi 2 K 8	0.58
⑥ Berobat 医看代	Sapi - K -	2	1	-	2	1	2	Sapi 8 K 23	2.34
⑦ Kepriuan R, T 緊急支出	Sapi - K -	0	5	-	10	2	6	Sapi 6 K 25	1.75
⑧ Sekolah 学費	Sapi - K -	3	16	-	1	5	4	Sapi 29 K 79	8.48
⑨ Bangun Rumah 家建築	Sapi - K -	0	29	-	25	8	17	Sapi 102 K 136	29.82
⑩ Pesta/Selamatan 冠婚葬祭	Sapi - K -	12	44	3	16	9	18	Sapi 50 K 37	14.62
⑪ Makan 食費	Sapi - K -	0	0	-	0	0	0	Sapi 8 K 53	2.34
⑫ Dagang 商売	Sapi - K -	2	-	-	39	-	12	Sapi 12 K 3	3.51
⑬ Keluarga 家族	Sapi - K -	0	3	-	-	-	-	Sapi 0 K 17	0
⑭ Kendaraan 乗物	Sapi - K -	-	17	-	-	-	-	Sapi 9 K 15	2.53
⑮ beli hewan 家畜購入	Sapi - K -	-	9	-	-	-	-	Sapi 0 K 62	0
⑯ hutang 借金	Sapi - K -	-	15	-	-	-	-	Sapi 2 K 0	0.58
⑰ Radio ラジオ	Sapi - K -	0	0	-	-	-	-	Sapi 0 K 1	0
⑱ Pindah 移転	Sapi - K -	-	1	-	-	-	-	Sapi 0 K 1	0
⑲ Lain-Lain その他	Sapi - K -	-	1	-	-	-	-	Sapi 1 K 87	9.38
Jumlah	Sapi 3 Kambin 2	39	140	14	54	36	56	342	100
合計	2	2	210	0	137	44	263	658	

Sapi 牛  
\* Kambin 山羊  
Babi 豚

## 12. 結婚について

結婚についての調査は、本人への調査ではなく、親権者に対しての調査であり、即ち全調査者が直接対称となっている。

また、結婚についての調査は第2世代目の集落内定住あるいは集落外定住、職業、結婚年令、産児数等今後の集落を解明する上で大切である。

### 12-1. 男子側からの把握

全調査対称戸数中に該当者が761名存在していた。

#### 12-1-1. 結婚年令

結婚年令は16才～25才の範囲内で殆んど終了するが、僅かではあるが、14才、15才の早婚と、30才以上の晩婚がみられるが、30才以上の場合には再婚率が高い。

教育段階で結婚年令を考察すると小学校(S.D.)中退もしくは卒業者の第1次ピークは20才であり、中学校(S.L.T.P.) (中退もしくは卒業)の第1次ピークは19才だが、23才の方がより高い。

また、高等学校(S.L.T.A.) (中退もしくは卒業)では22才がピークとなり、大学(FAKLTAS) (中退もしくは卒業にあつては、24～25才がピークになるが例が少ないために断言はできないが、全体的にみて、小学校19才、中高校22.5才、大学24.5才と中間組を採ると各々年令差が明確になり、学歴が上るに従って結婚年令が上ってゆき、小学校と中高校間では3.5才、中高校と大学間では、2.0才あるといえる。

(表-19)

また、調査地区内における各教育段階は表-19の通りで、小学校614名80.68%、中学校40名、5.26%、高等学校46名、6.04%、大学6名、0.79%、無就学55名、7.23%となっており、就学率は余り低いとは考えられない(新開地としては)が集落の古いところは教育が高いが、集落の新しいところでは、現段階では少々低いが、これは未だ生活基礎の確立中であり止むを得ない現状と理解しなければならない。

#### 12-1-2. 結婚後の住居について

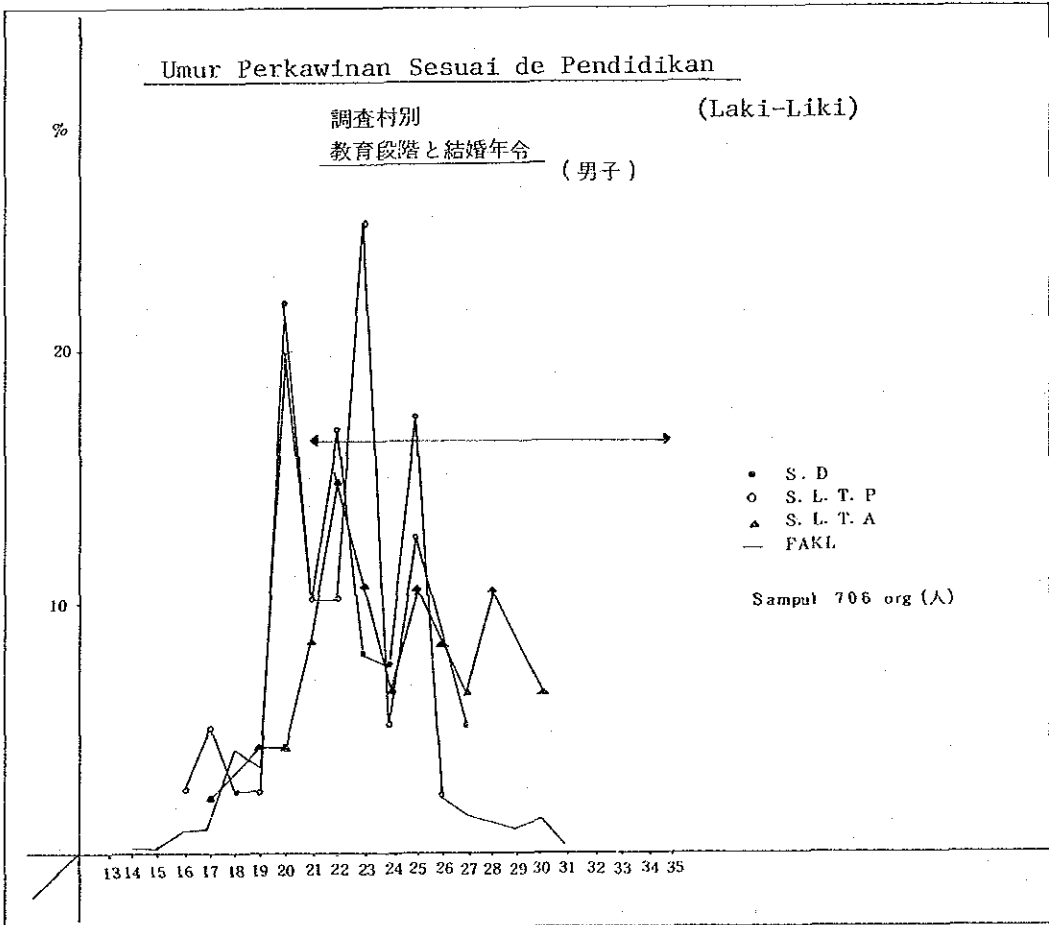
一般的には自立するまでの期間は妻方に同居することになり、この期間中は労力の提供によって、生活がまかなわれ同時に外部よりの労働報酬等

表一 19 結婚年齡之教育

結婚年齡	P. E. N. D. I. D. I. K. A. N										Laki-Laki 男子													
	Jumlah 合計					S. D. 小学校					S. U. T. P. 中學校					S. L. T. A. 高等學校					FAK. L. 大學校			
	TSGATRS	TRKALTUB	計	%	Jumlah	TSGATRS	TRKALTUB	計	%	Jumlah	TSGATRS	TRKALTUB	計	%	Jumlah	TSGATRS	TRKALTUB	計	%	Jumlah	TSGATRS	TRKALTUB	計	%
13	-	-	0	0	0	-	-	0	0	0	-	-	0	0	0	-	-	0	0	0	-	-	0	0
14	3	-	3	0.39	1	1	0.16	0.16	1	0	-	-	0	0	0	-	-	0	0	0	-	-	0	0
15	-	1	1	0.13	5	1	0.81	0.81	1	0	-	-	0	0	0	-	-	0	0	0	-	-	0	0
16	2	1	3	0.79	6	1	0.98	0.98	2	2	1	1	250	250	0	-	-	0	0	0	-	-	0	0
17	4	1	5	1.31	10	3	4.28	4.28	2	2	1	1	500	500	1	1	217	217	0	0	-	-	0	0
18	7	1	8	3.55	27	6	22.22	22.22	1	1	1	1	250	250	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0
19	7	2	9	3.29	25	6	22.22	22.22	1	1	1	1	250	250	2	2	435	435	0	0	-	-	0	0
20	18	6	24	10.24	154	13	8.44	8.44	8	8	2	2	2000	2000	2	2	435	435	0	0	-	-	0	0
21	18	9	27	10.24	78	11	8.44	8.44	2	2	1	1	1000	1000	4	4	870	870	1	1	1667	1667	1	1667
22	16	15	31	12.22	160	16	10.00	10.00	10	10	2	2	2500	2500	5	5	1522	1522	0	0	-	-	0	0
23	14	7	21	8.41	64	9	7.49	7.49	2	2	3	3	10	10	2	2	500	500	3	3	1087	1087	0	0
24	13	11	24	9.66	53	9	7.49	7.49	2	2	2	2	500	500	2	2	500	500	3	3	1087	1087	1	1667
25	17	23	40	16.29	124	32	26.53	26.53	10	10	3	3	1250	1250	5	5	1887	1887	1	1	1667	1667	1	1667
26	7	3	10	3.83	20	3	15.00	15.00	1	1	1	1	1000	1000	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0
27	3	2	5	1.97	15	1	6.67	6.67	1	1	1	1	1000	1000	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0
28	2	1	3	1.12	10	1	10.00	10.00	1	1	1	1	1000	1000	2	2	500	500	1	1	1667	1667	0	0
29	4	1	5	1.92	27	3	11.11	11.11	2	2	1	1	1000	1000	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0
30	2	1	3	1.12	10	1	10.00	10.00	1	1	1	1	1000	1000	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0
31	2	-	2	0.76	2	0	0.00	0.00	1	1	1	1	1000	1000	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0
32	1	-	1	0.38	0	0	0.00	0.00	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0
33	1	-	1	0.38	1	0	0.00	0.00	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0
34	1	-	1	0.38	1	0	0.00	0.00	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0
35	1	-	1	0.38	3	0	0.00	0.00	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0
結婚年齡	25	-	25	3.31	25	10	40.00	40.00	1	1	3	3	1667	1667	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0
結婚年齡	156	8	164	6.41	761	94	12.36	12.36	15	15	7	7	40	40	27	27	100	100	3	3	10	10	46	46
結婚年齡	130	127	257	10.00	761	117	15.39	15.39	3	3	14	14	40	40	27	27	100	100	3	3	10	10	46	46

S. D.	S. L. T. A.	FAKULTAS	B. H.	Jumlah (計)	org. (人)	%
14	44	46	6	761	8658	100
15	46	46	6	761	8658	100
16	46	46	6	761	8658	100
17	46	46	6	761	8658	100
18	46	46	6	761	8658	100
19	46	46	6	761	8658	100
20	46	46	6	761	8658	100
21	46	46	6	761	8658	100
22	46	46	6	761	8658	100
23	46	46	6	761	8658	100
24	46	46	6	761	8658	100
25	46	46	6	761	8658	100

図-8 教育程度と結婚年齢



の蓄積によって独立の過程を辿るが、この期間内においても両親の元への出入り、手伝い等は自由に行われることは勿論である。

この調査においては、それらの過程を表している様子を知ることができる。また、時として結婚後両親（男性側）と同居することもある。

合計761名の中で両親と同居中が318人で41.79%、義父と同居中が232名で30.49%、自立が192名で25.23%、親戚が18名で、2.49%である。結婚後住居を順序立てれば、①義父同居→②実父同居→③独立が一般的 Jawa より流入してきた者の形態である。（Jawa とは中部、東部を指し西部は除かれる。）

#### 12-1-3. 村内居住と村外居住について

全体についてみると、村内居住者は、511名、67.54%で村外居住者は247名で32.46%にあたる。また、職業別によって、その割合が異なる。

#### 12-1-4. 職業別にみた居住

職業別割合からみてゆくと、

- ① 農業が650名で全体の85.41%、この中の462名、71.00%が村内居住である。
- ② 商人が48名で全体の6.31%で村内居住が、この中19名、39.58%
- ③ 官公吏の43名、全体の5.65%、この中16名37.21%が村内居住、
- ④ 労働者17名、全体の中2.23%、この中14名、82.35%が、村内居住で合計村内居住者は511名、67.15%が定住する。

職業別にみて、

- ① 農業の場合には各集落によって村内への定住率が左右される。とくに農業立地条件が悪い地域、または既に農用地に不足を来たしている地域においては村外居住をはかる割合が高い（T. R. S. K. RU等）が新規農用地の取得とそれに要する資金がまかなえないのが現状で村外で農業を営むことは比較的資金に恵まれた2世代目であると解せられる。

また、一次流入者の80.35%から85.41%へと割合で5.06%増加する。

- ② 商人（Dagang）としての職種は一次流入時点における全体の1.09%より5.23%増加して、6.31%となり、集落の発展に伴って流通関係職業が増加する。

表-20

Daftar Perkawinan, Tempat, dan Pekerjaan utk Laui 20

ate 24 02 83"

結婚後住居及び職種(男子)

			T. R	S. K	G. A	Ad.L	T. T	R. U	S. B	Jumlah 計	(%)
Jumlah 結婚数			156	130	8	127	22	197	121	761	100
Tinggal di	住居	org Tua 親	21	83	7	57	0	123	27	318	41.79
		Mer Tua 義父	109	47	0	70	0	6	0	232	30.49
		Sendiri 自立	26	0	1	0	22	58	85	192	25.23
		Saudara 親セキ	0	0	0	0	0	10	8	18	2.49
Pekerjaan dan Tinggal di	職種 (村内・村外)	① Tani 農家 dalam 村内 di luar 村外	108	127	3	87	20	188	117	650	85.41
			72	76	3	78	17	121	95	462	71.00
			36	51	0	9	3	67	22	188	29.00
		② Pegawai 官公吏 dalam 村内 di luar 村外	34	2	3	0	1	3	0	43	5.65
			13	1	1	0	0	1	0	16	37.21
			21	1	2	0	1	2	0	27	
		③ Dagang 商人 dalam 村内 di luar 村外	2	0	0	40	1	3	2	48	6.31
			2	0	0	12	0	3	2	19	39.58
			0	0	0	28	1	0	0	29	60.42
		④ Buruh 労働者 dalam 村内 di luar 村外	9	1	2	0	0	3	2	17	2.23
			7	1	1	0	0	3	2	14	82.35
			2	0	1	0	0	0	0	3	17.65
			153	130	8	127	22	197	121	758	99.60

※ 3 org (人) { Toh memberikan  
不明

その中で村内居住は19名約40%、村外居住29名約60%と集落外に住居を移しての活動が行われるが初期集落においては、その殆んどが村内に居住して集落内産物の仲介と生活用品、建築用品等の販売が主である。村外に居住しての商業従事は、それよりも、より広範な活動を意味する。また、商業従事者の特色は、出身地によっても異なり東部 Jawa 出身者よりも、Surakarta を中心とした中部 Jawa 出身者に多い。(集落 Ad. L)

- ③ 官公吏 (Pegawai) は、一次流入者においては殆んどみられず、第2世代に入って、43名、5.65%がみられるが、その大半は古い集落に集中しており、先述のように新しい集落にあっては未だ教育投資への余裕が生れていないことが推察される。

また、官公吏の中で村内居住は、16名、37.21%、村外居住27名62.79%で、その多数は村外に流出する。

また、村内居住者の大半は小学校教員、農業普及員である。

- ④ 労働者 (Buruh) すなわち日雇職人 (Buruh upah) であるが、一次流入者の0.96%から、第2世代では2.23%へと増加しているのに注目しなければならない。

また、古い集落に、その発生が多くみられ、第2世代目の集落内における土地取得が殆んど不可能で農村労働者として生計を営む者が多く、その割合からみても村内居住が14名、82.35%、村外居住3名17.65%と、その殆んどが、村内、集落内における労働者となっていることからみても明らかである。

ここで、第2世代の特徴は第1世代と比較して、職種が一代より単純固定化にすむ、すなわち一次流入者の職種は12種類であるが、二世世代目に入ると4種類に集約されて、生活の中心となる職業が明らかになる。次に農業従事者 (農家、Tani) は、一次流入者の割合を上廻る。

また、集落の発展に併なって商人 (仲介業、日用品販売、建築資材販売等) が多く発生して、流通をつかさどるが出身地によって異なる。

また、同時に労働者 (主として農業労働者、Buruh) を発生させ、その割合は一次流入者の割合よりも高く、殊に古い集落から発生しはじめている。次に新しい職種として官公吏が発生してきた。その特色は古い集落に多く、新しい集落では生活基盤の育成途次にあり、就学年数に比



例して少ない。

また、官公吏の大半は集落から流出し残留するのは小学校教員と農業普及員であり、教員の場合は集落出身者が多く、農業普及員の場合は流入者（入婿）が多いのが特徴である。

## 12-2. 女子側からの把握

女子側からの調査は、集落 G. A. 及び Ad. L を除いたものである。理由として、G. A は現在第 3 世代に向いつゝあるところで事例が少なく、また、Ad. L においては調査の不備からその全てを把握することができず、5 集落であるが、この考察から全体像を推察することは不可能ではない。

（該当者数 882 名）

### 12-2-1. 結婚年齢

全体からみた結婚年齢は、13才よりはじまり、18才をピークに25才までが一般的に初婚と解され例外として高令初婚もあるが、そのほとんどは再婚と考えられる。男子の初婚年齢差は3才である。つぎに教育段階による結婚年齢のピークを比較してみると、小学校（S. D 中退、卒業）の場合だと、18才であり、中学校（S. L. T. P. 同）のピークは20才であり、高校（S. L. T. 同）の場合には25才が各々の結婚年齢ピークで差が生じている。小学校と中学校間では2.0才の差、中学校と高校間の差は5.0才となっている。

（表-21）

また、同じく、調査内における各教育段階は表 21-(1)の通りで、小学校 717名、81.29%、中学校 37名、4.20%、高校 22名、2.49%、無就学 106名、12.02%で男子に比較して無就学が 4.79%高い。

### 12-2-2. 結婚後の住居について

全調査該当者の内、回答を得たのが、842人で全体の95.46%であり、その該当者中より考察すると表 21-(2)に従って、両親と同居、577名 68.53%、義父（夫の両親）と21名、2.49%、自立235名、27.91%、親戚、9名、1.07%、となっており、結婚後においては、夫（男性）側の多くは妻方の両親と同居をして、先述の自立への準備期間として過すことを実証するものである。

### 12-2-3. 職業について

こゝで夫となるべき男性側の職業、すなわちどの種の職業の人と結婚したことになるかを考察すると、表21-(3)にしたがって、

- ① 農業が824名で全体の94.93%、この中662名、80.34%が、村内定住で、男性側に比べて、職業割合で9.52%、村内定住において、9.34%ともに高く女性の域内結婚、域内定住の高い割合は、社会交流範囲の狭さと同時に一面域内においての血縁社会の構成を促進して、相互扶助社会を築く上において貢献することが認められる。
- ② 官公吏との結婚は、33名で全体の3.80%、その中、17名、51.52%が村内居住で男性側に比較して、14.31%高く、女性の域内定住性と男性側における、この職種は域外女性との結婚が推察される。と同時に教育程度の問題も無視できない。
- ③ 商人との結婚は僅か4名、全体の0.47%、で村内居住は75%と、その殆んどが村内に止まり男性側の村内居住率39.58%と比較すると、官公吏同様の理由から、この数組になったことが考えられる。
- ④ 労働者との結婚は僅か8名、全体の0.80%、そのうち村内居住が3名、28.57%で男性側の結婚相手は域外女性との結婚が推察される。

こゝで村内居住と村外居住をみると、693名(集落S.K.データ)の内、448名、64.65%が村内居住、村外居住は245名、35.35%、で総体的には男性側の比率と殆んど同一である。

### 12-2-4. 結婚年令と産児数について

一般に結婚年令(女子)が若いと産児数が多いと言われるが、一つには集落域内における性風紀の乱れを防止する大きな理由も見逃してはならない。また、本調査内においては、13才~34才まで、882名(内年令不明30名)の産児数調査では平均数値2.64人より、あまり大きな数値の違いは見られなかったが、20才以前の結婚女性の産児数は、平均値よりも少々高いといえる。

また、表21-(1)中に高令結婚にもかかわらず産児数の高いのがみられるが、サンプル数が少ないので考察するには至らない。

(調査地域内は総て家族計画実施集落)

表 21 - (1)

UMUR 年令	Perempuan Daftar Pendidikan - Pendidikan Sesuai Usia												S. D 小学校		S. L. T. P 中等校		S. L. T. A 高级		Jumlah anak didik		計 平均												
	Jumlah		計 %		T.R.S.K.T.T.R.U.S.B		計 %		T.R.S.K.T.T.R.U.S.B		計 %		T.R.S.K.T.T.R.U.S.B		計 %																		
13	2	2	0	2	2	2	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	25	3.13													
14	15	2	0	3	2	22	249	14	2	0	0	0	0	0	0	0	0	33	9	16	3												
15	10	15	6	7	11	49	556	9	14	5	7	7	42	546	0	1	0	27	57	20	14	15											
16	18	11	4	7	51	91	1032	14	8	3	7	43	75	1046	1	0	0	2	54	13	21	121											
17	22	36	9	40	32	139	1576	20	35	6	40	26	127	1721	2	0	0	0	41	105	37	52	54										
18	21	80	7	73	49	210	2381	18	56	6	71	35	187	2608	2	1	0	1	45	63	167	25	130	134									
19	17	23	2	16	21	79	896	12	20	2	13	15	62	865	1	1	0	0	136	40	63	4	38	30									
20	21	26	7	63	22	141	1599	18	21	4	49	15	107	1492	1	1	0	0	50	9	41	110	20	173	35								
21	8	1	1	6	6	22	249	6	1	1	6	5	19	265	0	0	0	0	45	17	3	4	9	15	48	218							
22	7	1	2	12	5	27	306	4	1	9	5	20	279	2	0	0	0	50	18	0	6	20	7	51	139								
23	6	0	6	2	4	18	204	3	0	2	2	7	0	98	0	0	0	0	90	30	0	5	4	9	48	267							
24	7	0	0	1	2	10	113	5	0	1	1	1	7	0	0	0	0	0	136	11	0	0	2	4	17	170							
25	6	5	0	5	4	21	238	4	4	0	3	2	13	181	1	0	0	0	16	18	15	9	0	20	11	55	262						
26	2	0	0	0	0	2	23	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	45	11	0	0	0	0	11	550							
27	3	0	0	0	1	4	045	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	45	7	2	0	0	0	12	300							
28	1	0	0	0	0	1	011	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	45	1	0	0	0	0	1	100							
29	2	1	0	0	0	3	034	1	1	0	0	0	2	028	0	0	0	0	45	5	0	0	0	0	5	167							
30	1	0	0	0	1	2	023	1	0	0	0	1	2	028	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	100						
31	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
32	1	0	0	0	0	1	011	1	0	0	0	0	1	014	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
34	1	1	0	0	0	2	023	1	1	0	0	0	2	028	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
35	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
計	30	0	0	0	0	30	340	13	717	100	12	6	11	3	5	420	37	100	15	1	1	1	1	1	22	100	514	988	134	648	445	2,329	263

表 21 - (2)

結婚既おける在居				合計	
性別	種	女	自立	親中	合計
計	計	計	計	計	計
T. II	184	6	0	0	172
S. K	179	6	0	0	185
T. T	19	32	0	43	61
R. U	167	6	58	7	238
S. B	37	0	85	2	204
計	577	21	235	9	842
総	6853	249	2791	107	100

表 21 - (3)

職業				天	
職業	天	天	天	天	天
計	計	計	計	計	計
Tani	170	52	21	12	6
Pegawai	180	21	4	0	0
Buruh	39	11	2	0	1
Dagang	233	99	2	0	3
Di luar desa	202	4	0	0	0
Di luar desa	824	162	33	16	8
Di luar desa	9493	380	0.90	0.47	0.47
計	10,666	4848	71.43	25.00	25.00

表 21 - (4)

職業		天	
職業	天	天	天
計	計	計	計
T. II	106	28	13
S. K	137	101	36
T. T	448	245	3535
R. U	6465	3535	
S. B			
計	7836	6465	3535

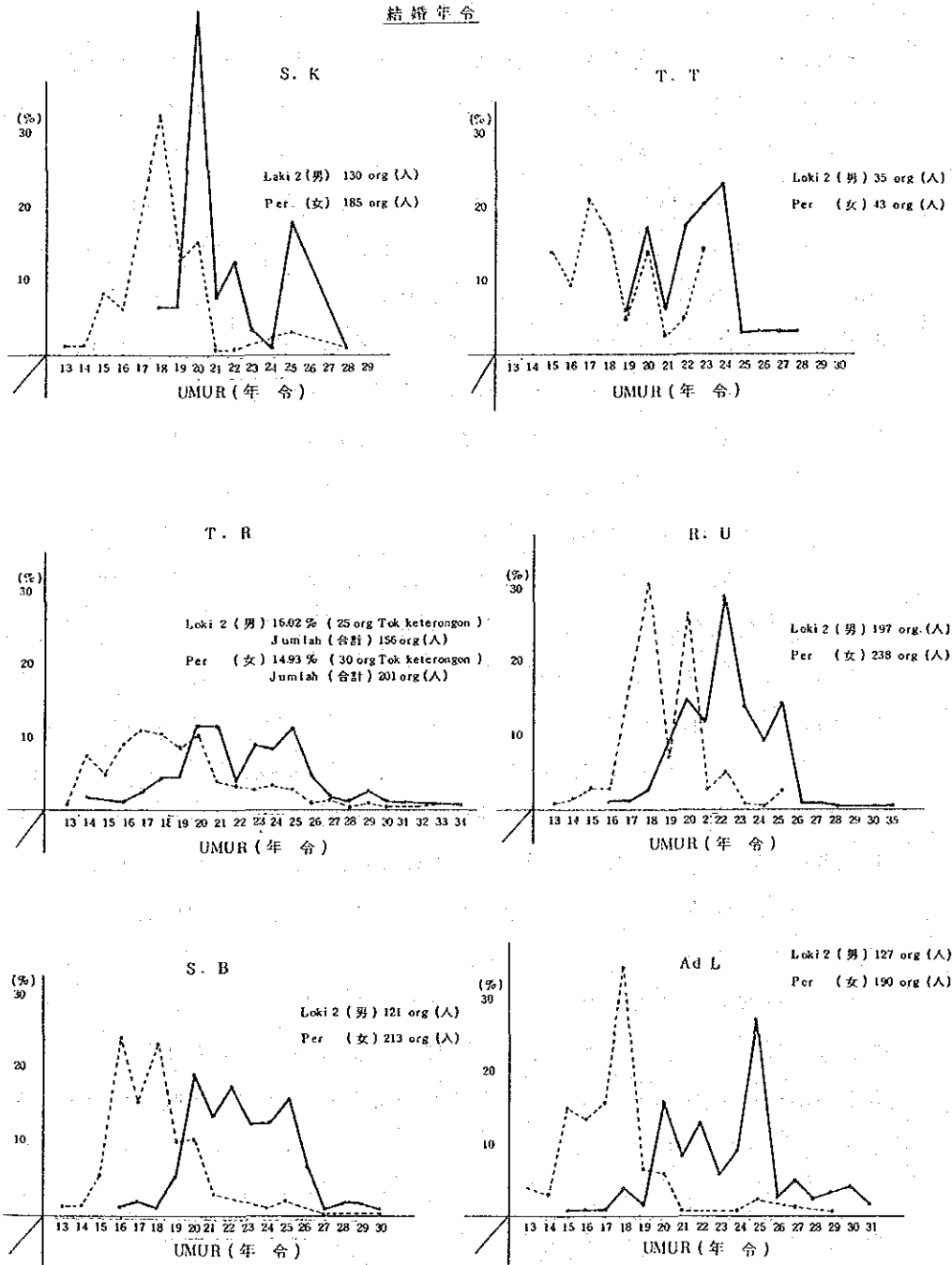
Keterangan  
 職業 級  
 \* dalam daftar Pendidikan jumlah orang  
 (106) Data Lab. 12025  
 \* 結婚と結婚年の関係中 (106) 人不足分  
 12025は父兄として計上

圖-9 集落別結婚年齡

Daftar Perkawinan

(1) Umur Perkawinan

結婚年齡



### 13. 集落内における教育程度

調査集落域内における住民の教育程度の現状を考察してみるとは、今後における地域開発、あるいは、発展のために欠くことができない要素であると考えられる。

また、教育水準の向上が、年代別に明らかにされなければ、その証明にもなり得ない。第1に現状において集落内住民の教育程度、水準、また、それらの割合等について考察してゆく。

調査域内該当者数が、11,232名で内男子5,768名(53.35%)、女子5,464名(48.65%)で、その中でS. D(小学校卒または中退)が、6,567名で全体の58.47%、S. L. T. P(中学校、同じく卒、中退)、452名で全体の4.02%、S. L. T. A(高校、同じく卒、中退)が、261名で全体の2.32%、S. P. G. FAK(師範、大学、同じく卒、中退)が、32名で全体の0.28%、文盲(Buta huruo)が2,159名で全体の19.22%、未就学が1,761名で全体の15.69%である。

また、集落別の教育格差は、小学校(S. D)にみて、上下間に10%の差があり中学校以上についての集落間格差は前者に比較して大きく、集落内における経済状態に左右されての格差の発生と考えられる。

また、文盲についての集落間格差も前者に比較して一段と大きく、未だに集落内におけるJawa語の根強い使用を裏付けるものであり、また同時に言語による種族間結束を裏付けることにもなるであろう。

それらを証明するものとして、集落T. Tの場合があげられよう。この集落の構成は表-7にみられる如く、Jawa族だけではなく、Lampung族、Sunda族等が混じった集落であることから、(今回の調査域内においての他集落と比較して種族数が多い)。

文盲率が低く、域内においてのよりよい関係を作り上げるために国語の習得がなされてきたものと考えられ、一種族による集落形成よりも多種族による集落形成の方が、国語の習得のみについてみると早期に達成せられると考えられる。

Keadaan Pendidikan  
表-22 現状における教育程度

( \* org・人 )

Desa 集落名	Laki-2	Per	Jumlah	S.D	SLTP	SLTP	SPG FAK	Buta- hurup	Belum Sekolah	Jumlah % tas
	男子	女子	合計	小学校	中学校	高校	師範 大学	文盲	未就学	割合計
G. A	145	111	256	130	38	28	2	36	22	
(%)	56.64	43.36		50.78	14.84	10.94	0.78	14.06	8.60	100
S. K	824	765	1589	924	46	11	8	267	333	
(%)	51.86	48.14		58.15	2.89	0.69	0.50	16.80	20.97	100
T. R	925	910	1835	1030	123	114	17	296	255	
(%)	50.41	49.59		56.13	6.70	6.21	0.93	16.13	13.90	100
T. T	335	360	695	404	81	41	3	51	115	
(%)	48.20	51.80		58.13	11.65	5.90	0.43	7.34	16.55	100
R. U	1242	1103	2345	1105	72	29	0	901	238	
(%)	52.96	47.04		47.12	3.07	1.24	0	38.42	10.15	100
S. B	1002	1000	2002	1194	47	13	0	381	367	
(%)	50.05	49.95		59.64	2.35	0.65	0	19.03	18.33	100
Jumlah 合計	5768	5464	11,232	6567	452	261	32	2,259	1,761	
(%)	51.35	48.65	100	58.47	4.02	2.32	0.28	19.22	15.69	

### 13-1 年代別教育程度（水準）

先に全般的教育水準についてみてきたが、こゝでは、年代別についての、その格差は、何の様になっているかを表-23によって考察すると、（但し集落、S. K Ad L.はデータ不備のために除く、また同じく未就学年代をも除いた。一般就学年令は7才であるが、地域集落においては8~9才の就学もある）。

調査域内すなわち、集落、RU. SB. TT. GAの四集落で全該当者数は、4,317名である。

この中で小学校（S. D. 卒、中退）は2,532名で全体の58.65%、そのうち年代別では、10才~14才の81.29%から15才~19才代の55.26%、20~24才代の67.27%、25~29才代の71.17%、30~34才代の62.62%、35~39才代の60.81%、40~44才代の52.84%、45~

49才代の44.20%、50～54才代の31.90%、55～59才代の34.58%、60～64才代の21.37%、65～69才代の24.56%、70才以上の25.00%と高年齢にゆくほど就学率が低下しており、それに殆んど逆比例して文盲率が上昇している。(図-10)

また、全体からみた就学割合は、小学校(S. D)58.65%、中学校(S. L. T. P)5.42%、高校(S. L. T. A)2.57%、大学、師範(F. A. K, S. P. G.)0.12%、文盲(B. H)33.24%となっている。

また、文盲率については先の就学状態調査中の19.22%に比較して33.24%と高いことは、未就学年代の15.69%を除いたことによって現出されたものであることが考察できる。

以上考察して明らかな様に教育に対して、その就学率は確実に上昇しているが、未だ中等、高等教育への就学率は低く、集落によって差異が生じており、その主な理由は、集落開設の時期及びそれに併なる経済的理由が、その主な原因としてあげられる。

表—23 Keadaan Pendidikan Sesuai dg Tk Usia

村別、年令別、教育程度

ik 学別	UMUR 年令 Dera 集落	10	15	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70?	計	(%)
		14	19	24	29	34	39	44	49	54	59	64	69			
S D 小学 校	R. U	136	126	165	172	125	110	67	40	27	31	14	7	0	2532	5865
	S. B	204	149	175	181	86	66	55	56	31	28	10	3	2		
	T. T	68	27	57	57	41	24	22	16	15	13	1	4	8		
	G. A	22	8	14	15	11	11	14	10	1	2	3	0	0		
	計	430	310	411	427	263	211	158	122	74	74	28	14	10		
	(%)	81.29	55.26	67.27	71.17	62.62	60.81	52.84	44.20	31.90	34.58	21.37	24.56	25.00		
S L T R 中 学 校	R. U	13	4	14	20	8	5	5	0	1	1	0	1	0	234	542
	S. B	3	22	8	7	2	2	2	1	0	0	0	0	0		
	T. T	15	25	8	10	7	5	0	0	6	1	0	0	0		
	G. A	8	15	4	3	3	2	0	3	0	0	0	0	0		
	計	39	66	34	40	20	14	7	4	7	2	0	1	0		
	(%)	7.37	11.76	5.56	6.67	4.76	4.03	2.34	1.45	3.01	0.93	0	1.76			
S L T A 高 校	R. U	1	8	6	2	9	1	1	0	0	0	1	0	0	111	257
	S. B	0	2	5	1	3	1	1	0	0	0	0	0	0		
	T. T	0	10	9	8	8	6	0	0	0	0	0	0	0		
	G. A	0	13	8	2	1	2	2	0	0	0	0	0	0		
	計	1	33	28	13	21	10	4	0	0	0	0	0	0		
	(%)	0.19	5.89	4.58	2.17	5.00	2.88	1.34	0	0	0	0.77				
P A R 高 校 以 上	R. U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	5	0.12
	S. B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0		
	T. T	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	0		
	G. A	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	0	0		
	計	0	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0	1	0		
	(%)	0	0	0.17	0.32	0.24	0	0	0	0	0	0.77	0	0		
B H 文 盲	R. U	36	133	96	83	87	71	86	77	104	93	57	29	13	1435	3324
	S. B	19	19	37	34	19	36	36	57	37	34	25	12	14		
	T. T	4	0	2	1	6	3	3	8	6	9	5	1	3		
	G. A	0	0	2	0	3	2	5	6	2	2	14	0	0		
	計	59	152	137	118	115	112	130	150	151	130	101	42	30		
	(%)	11.15	27.09	22.42	19.67	27.38	32.28	43.48	54.35	65.09	64.49	57.10	73.68	75.00		
G. T																
總計		529	561	611	600	420	347	299	276	232	214	131	57	40	4317	100
	(%)	12.25	13.00	14.15	13.90	9.73	8.04	6.93	6.39	5.37	4.96	3.03	1.32	0.93	100	



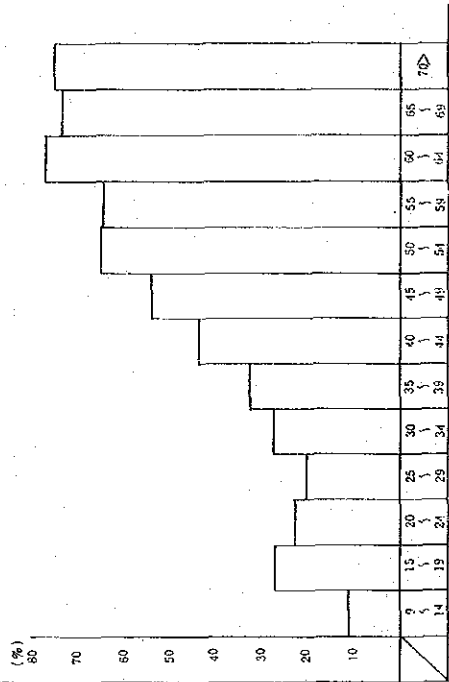
☒ -- 10 Keadaan Pendidikan

1982

現状における教育

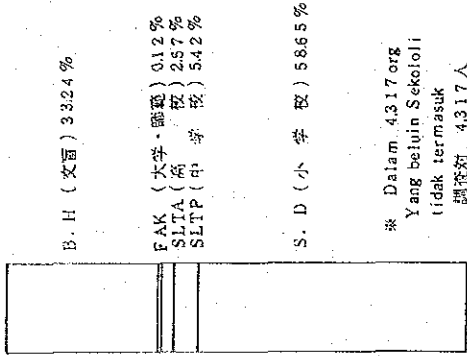
Baca huruf dalam TK Usia

年代別文盲率 1982



Pendidikan dalam % tas

教育程度割合



\* Dalam 4317 org  
Yang be-twin Sekolah  
tidak termasuk  
調査対 4317人  
除く、不識字者

#### 14. 集落内における戸数、家族数、人数の増加について

集落 (Kampung = Jawa, Dusun = Lampung) の複数 (一般には 4~6) 集合体が村 (Desa) である。この調査記述にあたって、集落を使用してきたが、調査域内に Kampung (GA, T. T) と Desa (他の集落) があるところから集落を使用してきた。

集落または村は各々、区域 (Teritori) を持ち、各々が、① 慣習法、② 行政、③ 宗教の混合指導体制によって運営されていると解すべきである。

②及び③の理解は容易であるが、①の部門の理解は困難を極める。何となれば、Jawa における慣習法の違いは、先述のごとく、村によって異なると理解すべきであり、未だ“一般には”、が通用しにくい、その範囲も郡単位 (Kecamatan) が最大であろうと考えられる。これらの指導に当るのが、Infomar Leder と呼べる Dukung の存在であることは、絶対と言っても過言ではない。ここで言う Dukung は、一般的に使用される末梢的なものではなく、Indonesia に回教をもたらした 9 聖人 (Wali Sembilan) よりの啓示を受けた者に限られる。(一般的精霊信仰と異なることは言うまでもない)。また、結婚等の一般的慣習 (冠婚葬祭) の殆んどは Plimbon によって施行されているのが現状であろう。

そこで、集落、村落内における戸数増加、その殆んどが先述のごとく相続によって、大部分であり、これを司り、また証人となるのが、現在の村長職 (Kepala Desa) であるが、その合意に達するまでは、権利者相互間の合議制で進められなければならない。

この様な理由からも、同一地域内において戸数の増加、換言すれば土地細分化への道を辿ることを余儀なくされる。

まず流入後の経路として、① 家族数の増加、→② 域内人口の増加、→③ 相続開始 →④ 戸数の増加 →⑤ 土地の細分化 →①に戻り回転するに従って、より細分化へと進んで行っているのが現状である。

表-24 に従い、5 集落について考察してみると、(集落土地面積は固定に近い)。

① 集落 G. A の場合、1936 年を中心に集落化した域内においては、戸数で 3.29 倍、人数で 6.74 倍、家族数で 2.04 倍、僅か実質 46 年間に一戸当り平均土地所有面積は  $1/3.29$  に下り、家族数においては、2.04

倍に増加しており、当初の1人当り土地面積と1982年の土地面積は実に1/6.71となり、年間1人当り土地面積が0.146%の割合で減じてきたことになる。

② 集落T、Rの場合、1940~1942年を中心に集落化した域内においては、戸数で1.44倍、家族数で3.29倍、人数で4.73倍で、1人当り土地の減少率は $\frac{1}{1.44 \times 3.29} = \frac{1}{4.74}$ となり年間減少率0.116%である。

③ 集落T、Tの場合、1955年を中心に集落化した地域においては、戸数で1.35倍、家族数で2.37倍、人数で1.76倍であり、1人当りの土地減少率は、 $\frac{1}{1.35 \times 2.37} = \frac{1}{3.20}$ で、年間減少率で0.119%である。

④ 集落R、Uの場合、1958年~1963年を中心に集落化した地域においては、戸数で1.19倍、家族数で1.31倍、人数で1.56倍で、前記同様1人当り土地面積減少率を求めると、(1960年を中心とすれば)  
 $\frac{1}{1.19 \times 1.31} = \frac{1}{1.56}$ で年間1人当り減少率は、0.071%である。

⑤ 集落SBの場合、1960年~1965年を中心に集落化した地域では、戸数で1.22倍、家族数で2.26倍、人数で2.75倍であり前記同様1人当り土地減少率を求めると $\frac{1}{1.22 \times 2.26} = \frac{1}{2.76}$ であり年間1人当り土地減少率は0.145%である。(1963年を起準年で計算)。

また、人数増加率、家族数増加率の高い原因は、第1次流入時において家族不同伴または、家族同伴数が少なかったことがあげられる。

(表-24参照)

ここで土地減少率を考察してみると、1戸当り土地減少率は、一戸当り土地減少率よりも緩慢で、殊に2世代目に移行する、第1次流入年次から40年を前後に急激に細分化されてゆくことが考察される。

表-24 Pendatang Asri Sesuai dg Th 1982

一次流入者、戸数、人口と1982年の比較

	Padawaktu datang 流入時			Th. 1982年. 10月			Kenaikan		
							増加率		
	K. K	Jiwa	KK/org	K. K	Jiwa	KK/org	K. K	org	KK/org
	戸数	人数	家族数	戸数	人数	家族数	戸数	人数	家族数
G. A	17	38	2.24	56	256	457	3.29	6.74	2.04
S. K	195			343	1,589	463	1.76		
T. R	195	388	1.99	280	1,835	655	1.44	4.73	3.29
T. T	98	293	2.99	132	695	527	1.35	2.37	1.76
Ad. L	402			496	2,510	506	1.23		
R. U	371	1,508	4.06	440	2,345	533	1.19	1.56	1.31
S. B	311	728	2.34	378	2,002	530	1.22	2.75	2.26
Jumlah									
合計	1589			2,125	11,232	529	1.34		

※ 摘要

流入時の戸数より除かれる。

1) 流入時の同伴者(被扶養者)

は除く。

2) 定住地においての出生者は除く。

※ Keterangan

Pada waktu datan Tidaktermasuk. yang dibawa,

1) Pada waktu datang yang ikut-ikut

Tidak Termasuk.

2) Kelahiran Sctempat Tidak Termasuk

## 15. 1982年10月現在における土地所有状態

以上の考察から現状における土地所有はどの様に変化をとげているのか、またとげつゝあるのかを表-25によって検討を加えれば、現在、また将来に亘って問題となるのは、その大部分が相続によって発生する土地無し、または、これに近い農民の出現である。

すでに記述してきたことによって明らかであるが、表-25から土地無し農民、または、これに近い0.25ha以下が全体の約23%に上っており、その年代の集中は、40才以下に多くみられ、また0.75ha以下が、全体に占める比率は51.01%で、前記流入時における土地取得と比較すれば、その減少率は顕著であり、その域内における増加戸数に比例する形で減少している。また、これらを防止する第2世代～第3世代の集落外への流出も、資金面において困難を極めているのが実状であり、容易に流出がはかれるのは、高等教育を受けた者に限定されるが、その教育投資も現状の集落の経済状態から推察、または、その実績から考えて、未だ1%に充たすその殆んどは、農民として、または、農、作業に従事、または、日雇労働者として流出してゆかなければならないが、それらの詳細に亘ってはすでに論じてきた。

また、自立農業経営を営むとされる。(政府移民の場合は耕地面積1.75ha)

土地面積1.75ha以上は全体の僅か16.05%で、その占める人数は307名、14.70%であり、残余の85.30%の人々にとっての自立経営農家として、第2世代あるいは第3世代へと円滑な移行が行われるのであろうか。

勿論集落の置かれた位置、住民意識によって左右されるが、集落G・Aの様に殆んど無土地所有者を出さずに移行する遠隔地農業の実施と教育投資を行なつての外部流出もみられるが、集落T・Rの様に280名の中で69名24.64%の土地不所有者を出現させる場合も起り得るのであり、これが僅か40年前後の期間に変化した集落である。

表-25 Usia Sesuai dg Hak Janah 1982. 10

年令別土地所有面積 1982. 10.

LUAS 面積 UMUR 年令	年令別土地所有面積 1982. 10.														計	(%)	
	0	0.25	0.500	0.750	1.000	1.250	1.500	1.750	2.000	2.250	2.500	2.750	3.000	3.001>			
~20	4	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	0.43
~25	35	23	24	11	6	8	7	1	1	0	0	0	0	0	0	116	5.56
~30	52	38	60	38	18	13	8	5	6	2	2	2	1	0	245	11.73	
~35	35	39	50	33	40	16	16	1	10	8	4	0	0	4	256	12.26	
~40	33	21	42	34	31	31	17	14	16	3	3	0	0	5	250	11.97	
~45	21	22	36	41	34	20	17	20	10	7	3	5	4	9	249	11.93	
~50	20	31	41	43	38	19	26	28	25	15	13	3	5	3	310	14.85	
~55	21	13	25	31	41	20	17	25	17	7	9	7	12	3	258	12.36	
~60	13	10	10	21	28	18	14	12	14	8	10	3	7	6	174	8.33	
60>	15	29	17	28	30	19	18	12	15	8	6	6	8	10	221	10.58	
計	249	228	308	280	266	164	140	118	14	58	50	26	37	50	2088	100	
(%)	1193	1092	1475	1341	1274	785	670	565	546	278	239	143	160	239	100		

## 16. 現状下における住民意識

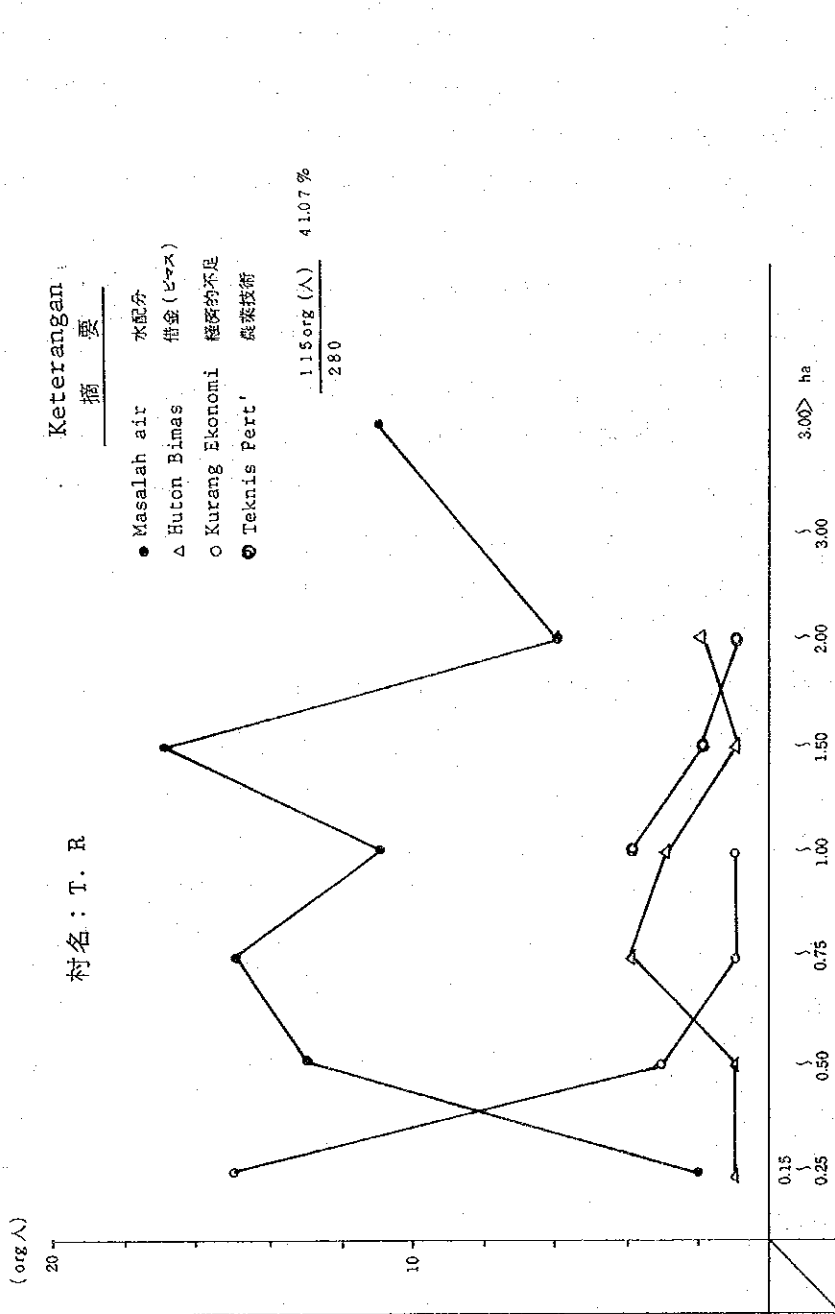
以上の様な条件下においての住民意識はどの様なものであるかを調査したのが図 - 11 で、最も分化の激しい集落 T, R の住民の意識である。

全体的問題意識としては水の配分について、即ち二期（乾、雨期）水田化を望むものであり、稲作による安定した所得の向上を意識として持ち、それが表現されたものである。次がビマスによる貸付金の不備。内容においては、再度の支払いを要請されている、と言うことで、その事務処理の不備を表現すると同時に意識に達する負担となっていることでもあろう。

つぎに農業技術についての意識は、1 ha 以上の農家によって表現されており、この階層においては、不満足な点と技術的問題解決意識をもっていることを証明するものであろう。

また、土地面積 0.50 ha 以下、ことに 0.15~0.25 ha までに顕著にあらわれている経済的不満足の中において、その 20 名のうちで 16 名（80%）が再移民を意識し、また希望していることである。これに土地不所持農民を加えて推計すれば、土地所有面積 0.25 ha~0.01 ha の中の 75.47%、とを加えると、前記調査戸数 2,088 戸のうち、不所持 249 戸プラス 228 戸 × 76.47%、すなわち 174 戸、合計 396 戸で、全体の 18.97% の調査地域内における戸数を再流出させなければならないし、意識を以っていると考えられる。

図-11 耕地面積別住民意識





## 17. 一時帰郷について

一時帰郷は、流入者にとっての目的の一つに間違いない。農耕民族にとっての出生地に対しての憧れは、想像に難しくないし、先述の如く土地あるいは家畜の売却によって旅費の捻出をはかるのである。

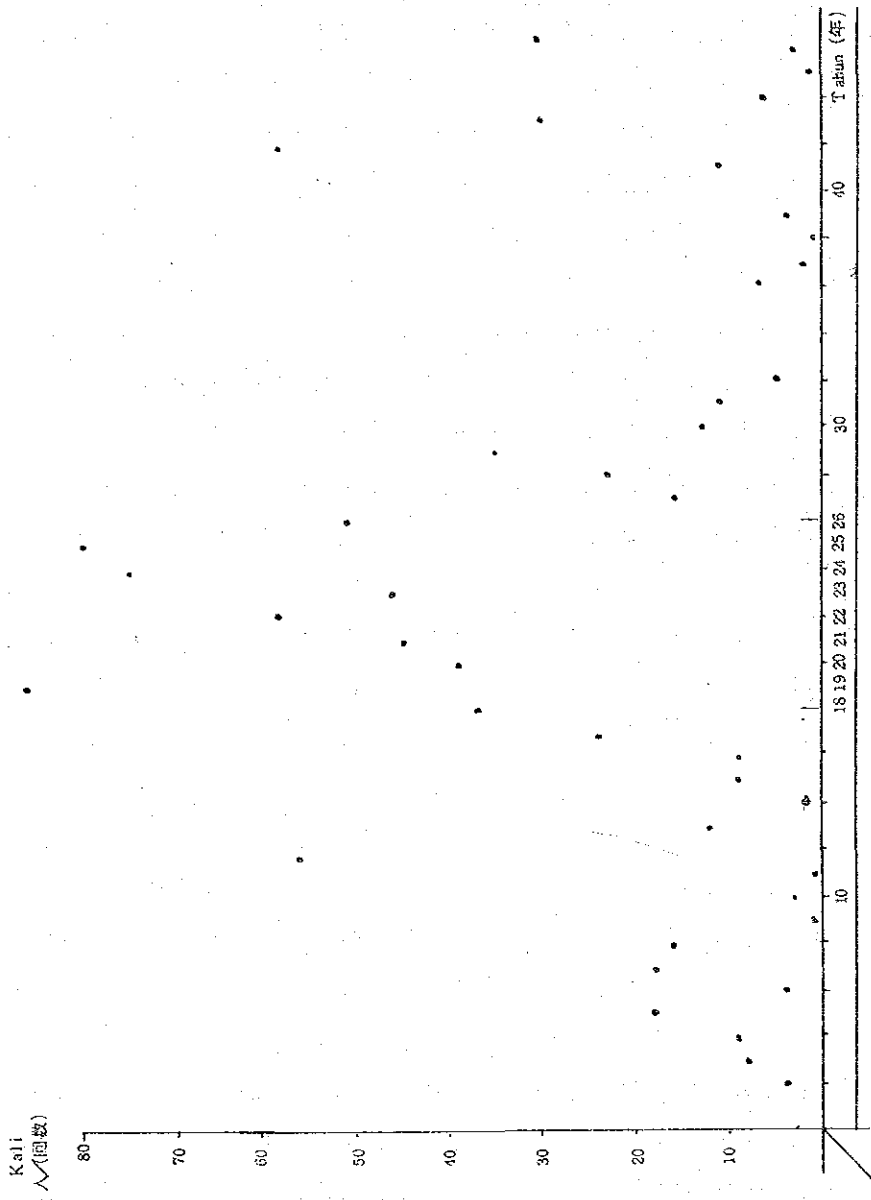
それでは定住後、何のくらいの期間を経て行われるのかを調査結果から考察してみると図 - 12 の通りで経過年数とその頻度で表示した。

最も多いのは、定住経過19年目の135例であるが、その傾向は18年目より急激に増加して、26年目迄続き、27年目より減少する。

この最多期間9年間は、流入者が老年期に入る時期にほぼ合致するところから、その一時帰郷する目的は推察できるであろう。また、経過10年以前の一時帰郷は、その理由として、郷里においての整理が多くあげられ定着定住が可能と見込まれた時点において行われる。つぎに40年以降に減少が激しいのは流入者の絶対人口の減少に起因するものである。

また、帰郷の理由として、① 両親または祖父母の見舞い、または不慮が72%、② 叔父、叔母への見舞い、または不慮が、11%、③ 子供及び財産管理12%、④ 財産処分が5%、で一時帰郷の理由の殆んどは三親等以内の関連において行われており、流出が行われる際に家族の部分的流出であることを裏付けるものといえる。また④は、その項目から完全定着を裏付けるものであるが、本調査においては、僅か5%を占めるに過ぎなかった。

図-12 経過年と帰郷頻度  
 Beburapakali Pergike Jawa Sesuaidg Selama di Desa



## 18. 流入原因と地域内人口増加の結語として

公式記録として、1904年より Jawa における人口抑制の政策と輸出作物農園定住労働者として、オランダ治下に端を発した移民政策は、独立後政府による移民政策に継承された。これらの基盤の上に自主流入（移民）が盛んとなり、域内における人口増加の大きな要因となった。Jawa からの流入の形態は、血縁関係による呼寄せ、地縁関係による呼寄せが、その大半を占めるとともに併せてその殆んどが、農業従事者であり、その特徴として集落地域内に定住するし、また呼寄せる家族主義的な集落形態を形成する。その様な理由から集落内での交流は緊密を極めてあたかも運命共同体的集落と考えられないこともない。然し、外部集落との交流は粗であり、排他的様相を呈する。同一集落内においても出身地を異にするごとに各々グループが形成される傾向が強くあらわれる。しいて言えば集落は閉鎖的小社会集団であり、その殆んど総てを処理する能力をもち機能するといえる。また、それらは先述の行政、宗教、慣習の三者による運営がなされ、ことに日常集落社会を規制しているのは慣習によってなされるのが常であり、一般外部の者に踊らされるのは集落の顔の多くても1/3であろう。この様な社会環境下で輩出してくる第2世代もその大部分が、これらの制度を継承していることは言うまでもない。それは結婚の形態によって明らかなるように許される範囲まで必ずといっていい程、集落内定住をはかり、集落家族的、または運命共同体的社会構成によって生活が営まれる。然し、この様な形態もランボンの集落においては第2世代までの安定的な集落が、すでに過ぎて第3世代を迎え、あるいは迎えようとする現在、Jawa からの一次流入者が原住地を離れた理由と同一の条件下におかれつゝあり悪循環を繰り返そうとしているに他ならない。現在までの集落機構は現状維持的、保守機構的性格が強いが一部改善を行ない集落機構として将来を展望する機能を併設し集落共同体であれば共同体自らがその打開をはかる可く新開地取得、あるいは、遠隔地、永年作物農業を、あるいは子弟教育を成立させるための機関の新設を考慮しなければ問題解決に近づく道はないであろう。1戸では不可能でも共同体としてはそれを可能にするものであり、Panca Silaの精神に合致するものでであろう。小集落共同体の集合したものが、インドネシア共和国であり、各々の共同体において各々が責任を果し遂行しなければならない義務である。

## 19. 人口増加と経営形態の変化について

前記（人口増加要因について）のごとく、ランボン州における人口増加は、現在まで主として、集落内（テリトリー内）における増加で面に対しての増加ではなく従に積まれる増加であったことが明らかとなった。

この章では人口が同一農家内において増加した時に農業経営の形態が何の様な変化を起すかを追跡した結果である。

1. 対 稱 年 1973年及び1980年
2. 分 類 水田地域と畑作地域
3. 抽出方法 ランダム方式
4. 調査地域 主として、  
南部ランボン県  
中部ランボン県内
5. 調査村

水 田	Sumberejo 11戸	Tempuran 16戸
	Astomulyo 12戸	Ngestirahayu 8戸
	Purwodadi 7戸	Burusari 21戸
畑	Hadoyang 21戸	Rengas 19戸

合計115戸、内訳、水田地域54戸、畑作地域61戸である。

### 6. 調査村概要

水田地域抽出集落は中ランボン県 Sukampung、河流域に1930年代後半から1950年代前半にかけて開かれ、各々住民のほとんどはJawaからの移民であり、Tempuran PurwodadiはKec Trimurjo郡にあり、上記河川の頭首口に近く1940年代に水田が開かれた集落である。

つぎにSumberejo Astomulyo Ngestirahayuの三集落の水田化にKec Punggur郡に属し、上記河川のPunggur Utara分水計画によって、1960年代末期から1970年代前半にかけて行われた地域で各々住民は前記同様Jawaよりの移民がその大半を占めている。

畑作地域抽出集落は、南ランボン県Kec Natar郡のHadoyang、1950年代初期に開かれた集落であり、Burusari及びRengasは中部ランボン県に属し、1950年代後半から1960年代中期にかけて開かれた集落であり、各々住民は、水田地域同様Jawaからの移民によって

成立っている。

### 19-1. 人口比較

まず、1973年から1980年にかけて、水田地域と畑作地域においての同一抽出農家内における人口の増減が何の様な傾向にあるかを示すのが、表-26である。

表-26 地域内農家の人口変化

区分	村名	人口(人)		家族数(人)		増加(%)
		1973	1980	1973	1980	1973~80"
水田	S. R	48	58	4.36	5.57	20.83
	T. P	82	104	5.13	6.50	26.83
	A. st	82	96	6.83	8.00	17.07
	Ng H	42	47	5.25	5.88	11.90
	P. D	41	45	5.86	6.43	9.76
	計	295	350	5.46	6.48	18.64
畑	B. S	102	128	4.86	6.10	25.49
	H. Y	116	135	5.50	6.40	16.38
	R. G	101	99	5.32	5.21	(-) 1.98
	計	319	362	5.23	5.93	13.48
合計		614	712	5.34	6.19	15.96

表-26から実質7年間における全体での人口平均増加率は15.96%である。また、その増加形態は家族内増加によってなされている。

また、増加率は畑地域よりも水田地域の方が、より高い。また、Jawa種族の平均家族数±5.23人から考えれば分化直前にさしかかった家族数を示しており、Rengasにおいては、この期間内に分化が行われたことを示し、その家族数数の減じたことによって証明される。

また、年平均増加率に、水田地域の2.66%、畑地域の1.93%、両者平均で2.28%である。これは年間自然人口増加率2.23%にはほぼ等しい。

前頁の人口増加率15.96%と、平均増加率2.28%との関係如何。

## 19-2. 耕作面積比較

前記人口の家族内増加に対して、その耕地面積はどのように変化したかを示すのが表-27である。

表-24 地域内における耕地面積の変化

		耕地面積		1戸当り面積		1戸当り面積	
		1973	1980	1973	1980	1973	1980
水 田	S. R	8,875	9,137	0.807	0.831	0.185	0.158
	T. P	15,675	16,470	0.979	1.036	0.191	0.158
	A. st	10,250	8,000	0.850	0.670	0.125	0.083
	Ng. II	6,630	4,750	0.830	0.590	0.158	0.101
	P. D	7,350	5,000	1.050	0.710	0.179	0.111
	計	48,780	43,357	0.903	0.803	0.156	0.124
畑	B. S	36,550	34,000	1.740	1.620	0.358	0.266
	H. Y	21,300	21,750	1.010	1.030	0.184	0.161
	R. G	20,600	30,660	1.080	1.610	0.204	0.310
	計	78,450	86,410	1.286	1.417	0.246	0.239
合計		127,230	129,785	1.106	1.129	0.207	0.182

上記の表-27から水田地域においては全体で耕地が同期間対比11.12%減少、一戸あたりで、11.07%の減少、1人あたりで24.85%の減少をきたしている。一方畑作地域においては、全体で、2.01%の増加、一戸あたりでは、2.08%の増加、一人あたりにすれば、12.08%の減少となっている。これは水田地域においては殆んど面積拡大が不可能な状況にあることを示すものにほかならないし、その減少の大部分は相続によつての減少で地域内(集落内)面積に変動をきたすものではなく、この調査が同一農業追跡のために変動がみられる。即ち水田地域農家54戸の73年の耕作面積から、5,423ha実面積で減少し、一戸あたりにすれば、0.1haで、1人あたりで見ると、初期面積から年間平均3.55%の減少をきたしていることが考察できる。

畑作地域においては、同期間内に2.01%増加しており、未だ面積拡大の可能性を示唆する。

また一戸平均にしても、2.08%の増加がはかられ、経営面積の拡大がは

かられたが、一人あたりにすると、12.08%の減少で、その面積拡大は家族内人口増加に食されたことを明示している。また一人あたりでみると初期面積から年間平均1.73%の減少をきたしているが水田地域減少率の1/2弱であり、水田地域の一人当り耕地面積の減少速度が畑作に比較して、2倍の速さで1人あたり耕地面積の零細化が進行しつつあることも併せ考察できるところである。

### 19-3. 借地について

借地の傾向をみることによって、その地域が未だ耕地に余裕が生じているのか、あるいは、その逆であるのかが考察でき併せて地域社会に格差が生じはじめたことも考えられ、それら借地の期間、地代等によっても地域社会の変化を把握することができよう。

表-28によって考察してゆくと、

表-28 地域内における借地人の変化

村名	借地人		期間(月)		理由	
	1973	1980	1973	1980	土地なし	耕地なし
S. R	0	2	12	6	0 → 2	不足
T. R	3	3	12	6	2 → 2	1 → 1
			12	36		
A. M	1	0				
Ng. H	0	0				
P. D	0	0				
計	4	5			2 → 4	1 → 1
B. S	0	0				
H. Y	6	0	12~36		5 → 0	1 → 0
R. G	3	1	12~			1 → 0
計	9	1			5 → 0	2 → 0
合計	13	6			7 → 4	3 → 0

水田地域では、1973年には借地人が4人(7.41%)から1980年には5人(9.26%)へと割合で1.85%増加しており、その内容にあつては、1973年の土地無し2人(3.70%)が4人(7.41%)へと同一調査農家中において土地無し農家の割合が増加している。(脱落農家の増加)、また耕地不足のための借地は1人(1.85%)で同期間内においての増減はみられな

い。一方畑作地域では、1973年の9人(14.75%)から1980年には1人(1.64%)へと、割合で13.11%減少して自作地化したことをうらづけ地域内に余裕耕地の存在も併せて考察できる。

また、その内容においても1973年の土地無しが5名、耕地不足2名、(1名は、土地なり、耕地不足か不明)不明1名の計8名が自作地化しており(借地人の88.89%)水田地域と比較して自作地化が容易に展開される。

#### 19-4. 期間と借地料

水田地域では、その借地期間よりも借料の方に注目してみなければならない。それらの小作料が、1973年の刈り分け(50:50)方式から一期作毎の金銭による小作料に変化が進行している。

例えば1973年、ha当りRp 12,000から1980年、Rp40,000へ、または、刈分け(Bagi hasil, Paro 2, 50:50)からRp60,000へと現金契約化へと移行している。

また畑作地域における小作料は1973年3:1であり、1980年においても、その率は変化をみるに至っていない。

以上のことから貨幣経済化が水田地域より進行しつつあり、同時に土地無し、土地不足農家の出現がみられ格差の発生が開始進行している。畑作地域においては、貨幣経済化が未だ顕著では無く、土地取得が割合容易で、農家としての公平化が進行しており、水田地域と比較して正反対の現象が考察できる。



## 20. 経営形態の変化

一般に経営形態は、水田地域においては、水稻栽培がなされ（乾期に灌漑水があれば二期作）。

まれ畑作地域においては、陸稲、メイズ、キャッサバの三作物の混植による年間一期作とされる。

しかし、人口密度が高まることによって、各々両者における経営形態にどのような変化をおよぼすのか、とくに水田地域の面積減少が顕著な場合、また畑作地域の様に面積拡大が可能な場合、それらにおける各々の生産量、所得農耕技術、家計にあたえる変化等を以下において考察する。

### 20-1. 庭園地 (Pekarangan) における変化

庭園地とは、屋敷地すなわち住居建築がなされる土地であり、家の周辺土地を利用して営まれる農業を位置づけられる。一般的にランポン州における一戸あたりの平均面積は約0.25haであり全体農地面積の5.61%を占める。

この調査内においての庭園地の占める割合は表-29によって、全体面積に占める割合は水田地域では、1973年の22.03%から、1980年の22.96%へ、畑作地域にあっては1973年の13.30%から、1980年の14.71%へと、相続による庭園地の分割が行われることによって変動するがそれ自体の変動率は耕地の変動率に及ぶものではない。

また、実面積でみると水田地域においては、1973年の0.26haから0.236haへと(90.77%)約10%の減少をきたした。

一方畑作地域においては、1973年の0.243haから0.257haへと、(105.76%)約6%の増加をみている。(また、調査統計上平均値で耕地と庭園地の割合が連動して増減がみられる場合には、農家の分散吸収が行われている場合が多いので地域内全体調査が必要となる)。

表-29 地域内耕地の変化

村名	農耕地		庭園地		放棄地		合計	
	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980
S. R	0.807	0.831	0.25	0.25	0	0	1.057	1.081
T. R	0.979	1.036	0.25	0.25	0	0	1.229	1.286
A. M	0.850	0.670	0.25	0.25	0.083	0.125	1.183	1.045
Ng. II	0.830	0.590	0.28	0.19	0	0	1.110	0.780
P. D	1.050	0.710	0.27	0.24	0	0	1.320	0.950
計(平均)	0.903	0.803	0.26	0.236	0.017	0.025	±1.180	±1.028
B. S	1.740	1.620	0.30	0.25	0.39	0.06	2.430	1.930
H. Y	1.010	1.030	0.15	0.25	0.122	0.10	1.282	1.380
R. G	1.080	1.610	0.28	0.27	0.410	0.05	1.770	1.930
計(平均)	1.106	1.129	0.243	0.257	0.307	0.07	±1.827	±1.747

## 20-2. 庭園地での農業

前記の様な庭園地の位置づけから、農業経営内におけるウエイトは軽視されるべきものではなく、また、その園地内における栽培作物も副次的食用作物から換金作物まで多種多様であるが、その構成においては水田地域と畑作、もしくは人口密度によって変化をみせ水田地域の人口密度の高いところ、すなわち農耕地面積の少ない地域ほど換金性作物が多くなり併せて農業所得の中に占める割合を高めてゆくことが特徴としてとらえられる。

次に地域ごと、一戸平均年次別に主な作物とその本数を表-26に従って考察してゆくと次の通りである。

表-30 庭園地内の栽培作物の変化

	T		ヤ		ン		コ		ン		マ		ン		コ		ン		ン		ン		ン		ン		ン		ン		ン		ン										
	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980	1973	1980									
S. R	145	118	863	1094	0	0	1364	482	1318	0	0	264	182	0	0	0.91	0.27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
T. R	188	888	619	775	0	0	344	481	0	0	133	0	131	0.31	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
A. M	450	2333	1142	1017	0	0	517	558	208	0	0	242	050	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
N&H	563	775	825	750	0	0	863	1088	0	0	0	200	063	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
P. D	071	1471	614	1614	0	0	-	1286	0	0	0	0	057	171	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0						
計(平均)	283	1117	813	1044	0	0	618	839	305	0	0.27	0	179	099	0	0	0.18	0.05	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2243	3104				
B. S	0	329	953	900	0	0	519	210	143	4.29	0.33	0.29	0.71	0.62	0	0	1.90	1.14	1.95	1.19	-	0.62	0	0.81	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
H. Y	0	776	1614	705	0	0	567	700	2776	7.14	0	0.29	0.14	0.90	0	0	0.95	1.09	0.10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
R. G	0	0	1163	1032	0	0	174	-	142	0.11	0.47	0.25	0.11	0.33	0	0	0	1.53	0	1.53	0	1.53	0	1.53	0	1.53	0	1.53	0	1.53	0	1.53	0	1.53	0	1.53	0	1.53	0	1.53			
計(平均)	0	368	1243	879	0	0	420	303	1020	3.85	0.27	0.28	0.32	0.62	0	0	0.32	1.51	0.41	1.19	0.40	0.60	0.28	2.38	1.85	3.300	2.351	0	0.28	0.28	0.28	0.28	0.28	0.28	0.28	0.28	0.28	0.28	0.28	0.28	0.28	0.28	0.28

全体でのこの地域内庭園地に植えられている樹種数は概ね4種類によって占められるが畑作地域では樹種数が10種類と水田地域に比較して繁雑で地域内需給を備えた様相を呈している。つぎに水田地域の樹種の中では、特に換金性の高い丁字の本数が期間内に増加しており換金性の高い、効率のよい樹種に転換がはかられているが畑作地域においては、換金性樹種よりも先述の域内需給的性格を帯びた自給自足的栽培と位置づけられ部分的には換金性樹種への転換が進行中であるといえる。

ヤシは日常一般に料理用として使用されるのは略を一家庭年間650～720個(別調査)の範囲内であるが、水田、畑作平均一戸あたり約9.5本の栽培されていることから、その年間収量は760個～1140個の間にあり、日常使用の残量が家庭使用油として利用されるか、または販売に供され換金性は高いが価格の面で所得を左右する程のものではない。

つぎにバナナであるが、バナナは副次的食用作物で、樹種も多いが、その用途、料理法も多い。青食の比率においては50%を上廻ると考えられる。

また、植付本数も自給食糧の確保に至る過程において増加し、自給達成によって減少し、その後において商品作物としての過程を進るのが一般的であり、バナナは地域集落考察の基準になると解される。

表-30の水田地域中Ng・HとP・Dにおいては商品作物化しており、畑作地域のB・Sは食糧自給可能とみられ、H・Yは、丁字の増加からみて換金性の高い作物への転換をはかっているのと考え併せると商品作物としての増加であると位置づけられる。

その他の作物については1戸当たり平均本数を示したが、一般的に全農家に近いものが栽培しているのではなく、また地域によって異なる。

また、一戸平均栽植本数は水田地域の31.04本に対して畑作農家の、23.51本(1980)と水田農家の方が7.53本高く、その中の約36%が換金性の高い丁字によって占められているが、畑作において丁字の占める割合は約16%で、水田地域農家に比較して換金性作物の占める割合が低い。

以上の様に畑作地域に比較して水田地域における庭園地農業が有利に展開していることが考察できる。